

4256

清浦奎吾君著

明治法制史全

東京書肆 明法堂

322.16 Ki 347

332.16  
Ki 347<sup>m</sup>  
(2)



224740

自序

余嘗テ歐米各國ヲ漫遊シテ私カニ深ク感スル所ノ  
 モノアリ他ニ非ス、我カ帝國ノ真相ニシテ未タ彼レ  
 ノ知ル所トナラサルカ爲メニ種々ノ誤解妄見アル  
 ナ免カレサルモノ豫想外ニ甚ダシキコト是ナリ、開  
 國以來外人ノ我國ニ來航シテ親シク文物ノ實況ヲ  
 視察シタル者少キニ非スト雖モ大體ノ上ヨリ之ヲ  
 見レハ誠ニ是レ九牛ノ一毛タルニ過キス、故ニ啻彼  
 レニ依ツテ以テ普ク我カ實相ヲ紹介セシムルニ足  
 ラサルノミナラス親シク我カ文物ノ實況ヲ視察シ

自序

一

タリト稱スル者ノ中ニ於テモ往々ニシテ唯タ皮相ノ視察ヲ爲スニ止マリ或ハ之レニ加フルニ架空ノ臆測ヲ逞フシテ世ニ傳フルカ爲メニ我カ帝國ノ真相ハ益掩ハレテ現ハレサルニ至ルヲ免カレス、而シテ其ノ此ニ至ル所以ノモノハ惟フニ我カ文字ハ全ク彼レト相同シカラサル一種ノ特體ニシテ最モ人ノ信用ヲ惹クニ足ルヘキ又最モ精確ナル研究ニ資スル所ノ記述ナルモノ、以テ彼レヲ理解セシムルニ由ナク換言スレハ則チ列國ニ對シテ普ク我カ真相ヲ廣告スルニ必要ナル紹介的機關ノ闕如スルカ

爲メニ外ナラス當時條約改正事業ノ困難ナリシ所以ノモノモ亦實ニ此ニ職由スト謂フヘキナリ果シテ然ラハ彼レヲシテ我カ真相ヲ知ラシメントナラハ先ツ彼レノ理解スルニ足ルヘキ記述ヲ以テ之ヲ紹介スルノ必要ナルコトハ言ナ埃タス且ツ此ノ感ヲ起スト同時ニ余ノ腦裏ニ浮ヒタルハ維新以來ニ於ケル法制發達ノ一斑ヲ以テ紹介的記述ノ材料ニ撰フノ最モ適當ナルヲ信シタルコト即チ是ナリ、蓋シ法制ノ發達ハ根底アル文明ノ餘光ニシテ法制ノ良否ハ以テ文明ノ消長ヲ表スルノ尺度タラシ

ムルニ適スルヲ以テナリ、余固ヨリ専門ノ法律家ニ  
 非サレトモ幸ニ多年法制ノ間ニ從事シタルヲ以テ  
 多少自ラ得ル所アルヲ信シ歸朝以來私カニ其ノ沿  
 革ニ關スル梗概ヲ編述セントノ念ヲ起シ苟モ間ア  
 レハ則チ之ニ從事シ時トシテハ又人ヲシテ成稿ノ  
 一部ヲ歐文ニ翻譯セシム、適々友人某々等ノ歐米ヨ  
 リ歸朝スルニ會シ語ルニ此ノ事ヲ以テセシニ某々  
 等モ亦大ニ余ト其ノ所感ヲ同ウシ切ニ此ノ舉ヲ慫  
 恿スルノミナラス尙ホ歐文翻譯等ノコトニ就テハ  
 十分ノ便宜ヲ余ニ與フヘキコトヲ約セリ、余モ亦力

ナ得テ一層編述ノ進行ヲ努ムル所アリシモ身事匆  
 忙動モスレハ輒チ意ノ如クナル能ハス荏苒歲月ノ  
 久シキヲ費ヤシテ稍ク今茲ニ當初ノ目的ノ一半ヲ  
 達スルニ至レリ

本書初メハ前述ノ如ク外人ヲ主トシテ專ラ簡明ヲ  
 勉メタリ、然レトモ闇黒ハ光明ニ移ルノ經過時代ニ  
 シテ法制ノ光明時代ヲ知ラント欲セハ勢ヒ先ツ闇  
 黒時代ニ溯リテ其ノ發達ノ所由ヲ詳カニセサルヘ  
 カラス、且ツ夫レ近來著書ノ世ニ行ハル、コト殆ン  
 ト汗牛充棟ナルニモ拘ハラヌ未タ法制ノ沿革ヲ記

述シタルモノナキハ我カ進歩セル法制學上ノ一缺典ナリト謂ハサルヲ得ス、サレハ此ノ舉獨リ以テ外人ニ紹介スルノ用ニ供スルノミナラス併セテ又其ノ缺典ヲ補フヲ得ハ所謂一舉兩得ナルモノ是ナリトノ感ヲ起シ此ニ余カ當初ノ意志ハ幾分カ擴充セラレ考據スル所ノ材料ノ多キヲ加フルト共ニ編述ノ事項モ亦稍々精密ニ入り終ニ卷帙ノ浩瀚ニ涉ルノ已ムヲ得サルニ至レリ、惟フニ濟々タル人才ニ富メル法學社會ニ在リテハ夙ニ我國法制史ノ編述ニ著手スル者ナキニアラサルヘシト雖モ未タ之ヲ世

ニ公ニセラレタルモノアルヲ聞カス、本書固ヨリ其ノ完璧ヲ期スルモノニアラスト雖モ我國近世法制ノ沿革ヲ記述シタルモノ蓋シ本書ヲ以テ之レカ嚆矢ト爲スヘシトハ竊カニ余ノ自任スル所ニシテ庶幾クハ以テ後ノ完全ナル著書ヲ促スノ導火トナリ且ツ我カ法制學上ノ缺典ヲ補フコトヲ得ンカ將タ又之ヲ歐文ニ翻譯シテ余カ當初ノ目的ヲ全カラシメンコトハ姑ク之ヲ他日ニ譲リ先ツ成稿ヲ得テ直チニ剞劂ニ付ス

本著ニ關シテハ法學士戸田海市氏ヲ始メ其ノ他知

友諸氏ノ補助ヲ得タルモノ少カラス編述ノ旨趣ヲ  
卷端ニ辯スルニ際シ深ク諸氏ノ厚意ヲ謝ス

東京西久保城山書屋ニ於

明治三十二年六月上浣

清浦奎吾識

# 明治法制史目錄

## 緒論

### 第一編 國法

第一章 憲法

第二章 議院法

第一節 議院

第二節 衆議院議員選舉

第三節 貴族院ノ組織

第三章 公文式及ヒ法例

### 第二編 行政法

一七

一七

三八

三八

四三

四三

四七

四七

第一部	行政機關	五五
第一章	行政機關ノ組織	五五
第一節	中央行政	五五
第二節	地方行政	八一
第一款	國ノ行政	八四
第一項	府縣	八四
第二項	郡	九九
第三項	市町村	一〇一
第二款	自治行政	一〇三
第一項	府縣	一〇三
第二項	郡	一二一
第三項	市町村	一二六

第二章	官吏	一五三
第一節	官吏ノ任用	一五四
第二節	官吏ノ義務	一六三
第三節	官吏ノ懲戒	一六五
第四節	官吏ノ權利	一七〇
第一款	官吏ノ地位ニ對スル權利	一七〇
第二款	官吏ノ財産ニ對スル權利	一七三
第二部	各部行政	一八一
要領		一八一
第一章	保安警察	一八三
第一節	通常保安警察	一九五
第一款	特種ノ物件ニ關スル警察 <small>石油取締、火藥取締、銃砲取締</small>	一九五

第二款	特種ノ行爲ニ關スル警察 <small>集會、結社、出版、</small> ……………	一九九
第三款	特種ノ事業ニ關スル警察 <small>古物商及ヒ質屋營業、取締、電氣事業取締</small> ……………	二一一
第四款	特種ノ人ニ關スル警察……………	二二七
第二節	非常保安警察……………	二一九
第一款	非常保安……………	二一九
第二款	戒嚴……………	二二〇
第二章	民籍……………	二二二
第一節	國籍……………	二二二
第二節	身分……………	二二六
第三節	戶籍……………	二三四
第三章	衛生……………	二三八
第一節	衛生機關……………	二三八

第二節	保健行政 <small>傳染病預防、種痘、其ノ他ノ保健行政</small> ……………	二四四
第三節	醫事行政 <small>醫師、藥劑師、藥品取締、阿片</small> ……………	二五六
第四章	農工商……………	二六四
第一節	農業……………	二六四
第二節	牧畜……………	二六九
第三節	山林……………	二七一
第四節	狩獵……………	二七四
第五節	鑛業……………	二七六
第六節	漁業……………	二七八
第七節	度量衡……………	二八〇
第八節	貨幣……………	二八一
第九節	取引所……………	二八六



第十節	銀行	二八八
第十一節	同業組合	二九二
第五章	交通	二九四
第一節	郵便	二九四
第二節	電信	二九六
第三節	道路	二九八
第四節	鐵道	三〇〇
第五節	河川	三〇三
第六節	領海港、水先案内、航路標識	三〇五
第七節	船舶 <small>船籍、検査、航海及上造船獎勵、衝突豫防、水難救助、海員</small>	三〇九
第六章	教育	三二四
第一節	普通教育	三二六

第二節	中等及七高等教育	三三一
第七章	宗教	三三五
第八章	專用權ノ特許	三五四
第一節	版權	三五七
第二節	發明	三六〇
第三節	意匠	三六一
第四節	商標	三六四
第九章	監獄	三六四
第十章	軍務	三八二
第一節	兵制	三八二
第二節	徵發	三九三
第十一章	財務	三九六

第一節	租稅	三九六
第一款	國稅	三九八
第二款	地方稅	四二三
第二節	會計 <small>會計、豫算、會計檢 査、附官有財産管理</small>	四二八
第三節	公債	四三八
第十一章	雜件	四四二
第一節	公用徵收	四四二
第二節	遺失物	四四六
第三節	行旅病人及ヒ行旅死亡人	四五〇
第三部	行政訴訟	四五四
第一章	行政訴訟	四五四
第二章	訴願	四六〇

第三編 司法……………四六一

第一章 裁判所構成法……………四六一

附 裁判所構成法附屬法令……………四六一

第二章 刑法及ヒ刑事訴訟法……………四八一

第一節 刑法附諸罰則……………四八一

第二節 刑事訴訟法……………五五〇

第三章 民法、商法及ヒ民事訴訟法……………五八〇

第一節 民法……………五八〇

第二節 商法……………五九〇

第三節 民事訴訟法……………五九九

第四節 其ノ他附屬法令……………六〇三

# 明治法制史目錄

終

## 明治法制史

清浦奎吾著

### 緒論

沿革上ノ緒論

德川氏朝廷ノ委任ヲ承ケテ大政ヲ掌リ、二百七十有餘ノ諸侯各、小獨立國ノ姿ヲ爲シテ武斷政治ヲ行ヒタルハ僅カニ三十年以前ノ事ニ屬ス、現時ノ法制ヲ以テ之ヲ三十年ノ昔時ニ比較スルトキハ誰カ其ノ懸隔ノ大ナルニ驚カサランヤ、然リト雖モ吾人ハ一躍シテ今日ノ地位ニ達シタルモノニ非ス、既往三十年間ノ歴史ヲ緝クトキハ如何ニ幼稚ノ法制カ歩一步進ミ來リテ今日アルニ至リシカヲ知ルニ足ルヘク、又現時ノ法制カ將來如何ニ發達スヘキカヲ推測スルニ難カラサルヘシ、蓋シ輒近我國文化ノ發達ハ歐米ニ資スル所甚タ多シト雖モ其ノ能ク之ヲ

緒論

資用スル所以ノモノハ我カ固有文化ノ力ニ由ラスンハ非ス故ニ維新以來ノ法制ノ發達ヲ詳カニセントセハ須ラク先ツ我國固有ノ法制ヲ明カニスルノ必要アリ是レ茲ニ建國以來ノ法制ノ概況ヲ示ス所以ナリ

神武天皇即位紀元以來年ヲ閱スルコト二千五百五十有九此ノ間國ニ治亂盛衰アリ文化ニ汚隆消長アリト雖モ萬古ヲ通シテ動カサルモノハ實ニ我カ國體ナリ天壤ト共ニ無窮ナルハ實ニ我カ皇統ナリ政治ノ變遷ニ因リ時トシテハ政治ノ實權臣下ノ手ニ移レリト雖モ是等ノ者ハ何レモ君主ノ承任者タルノ名義ニ於テ政務ヲ行フモノニシテ開國以來君臣ノ分定矣大義自ラ炳ナリ古典ニ天祖ノ敕ヲ擧ケテ瑞穗國是吾子孫可王之地宜爾皇孫就而治焉ト云ヘリ又神祖ヲ稱ヘタテマツリテ始御國天皇ト謂ヘリ日本武尊ノ言ニ吾者纒向ノ日代宮ニ坐シテ大八島國知ロシノス大帶日子淤斯呂和氣天皇ノ御子トアリ文武天皇即

位ノ詔ニ天皇カ御子ノアレマサム彌繼ニ大八島國知ラサムトノタマヒ又天下ヲ調ヘタマヒ平ケタマヒ公民ヲ惠ミタマヒ撫テタマハムトノタマヘリ世々ノ天皇皆此ノ義ヲ以テ傳國ノ大訓トシタマハサルハナク其ノ後御大八洲天皇ト云フヲ以テ詔書ノ例式トハナサレタリ所謂シラストハ即チ統治ノ義ニ外ナラス此レ乃チ憲法第一條大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ストノ明文ノ據ヲ以テ其ノ基礎ト爲ス所ナリ

建國以來法制ノ變遷ヲ三期ニ大別スルコトヲ得ヘシ、

第一期ハ神武天皇即位ヨリ千三百年(西曆紀元後六百四十年)ニ至リ之ヲ日本固有ノ法制時代トス當時國祖ノ祭祀ハ政府ノ最モ重要ナル職務ニシテ中央官府ニハ別ニ祭祀ノ職ヲ置キ地方官府ニハ概テ長官之ヲ兼テ行ヘリ而シテ凡テ中央及ヒ地方ノ官職ハ門地ノ尊卑ニ應シテ諸氏族之ヲ世襲シ軍務ノ如キモ二三ノ大氏族其ノ部民ヲ率ヒテ之ヲ

日本固有ノ法制時代

專掌シ種々ノ工業モ亦氏族世襲ノ制ヲ採リ而シテ族長ノ權ハ甚ク強クシテ其ノ氏族ニ對シ殆ント無限ノ權力ヲ行ヘリ朝廷ノ財政ハ主トシテ御料地ノ收入諸氏族及ヒ外國ノ貢賦ヲ以テ維持シ後世ニ至リ多少ノ租稅ヲ課セシト雖モ甚ク輕微ナリシカ如シ農耕ノ業凡ニ開ケテ土地私有ノ制行ヘン當時既ニ兼併ノ弊亦少ナカラス刑法ニハ神事ニ關スル犯罪ノ罰例多ク刑罰ハ一般ニ寬和ナリ又犯人ノ身ハ汚レタルモノトシテ神ニ對シ之ヲ殺除スルノ制行ヘレタリ

支那法制折衷時代

第二期ハ千三百年代ヨリルノ三十年以前マテ繼續シタリ之ヲ支那法制ノ折衷時代トス本期ハ又之ヲ細別シテ前後ノ二期トス

(一) 前期ハ千八百四十年マテニシテ中央統一ノ制ヲ布キ廣ク支那主義ノ成文法ヲ行ヒタル時代ナリ抑モ本期ニ於ケル法制ハ主トシテ支那ノ法制史中最モ發達セル隋唐ノ制度ヲ採用セシモノニシテ其ノ舊制ト異ナル要點ヲ擧クレハ神祇官祭祀ニ關スル官府ト太政官(政

治ニ關スル最高官府)ト對等ノ地位ニ置キ太政官ノ下ニ中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内ノ八省ヲ設ケ地方ヲ國郡里ノ行政區ニ分チテ各其ノ長官ヲ置キ政祭ヲ司トラシメ地方人民ハ五戸フ一ノ組合トシテ内ハ互ニ相扶持シ相監督シ外ハ國家ニ對シテ一種ノ連帶責任ヲ負ヘシメタリ又官職世襲ノ制ヲ廢シ氏族ノ貴賤ヲ問ハス材能ニ由リテ官吏ヲ登用シ職業世襲ノ制ヲ廢シ各人ヲシテ其ノ好ム所ニ就カシメ兵制ヲ改革シテ徵兵主義ヲ行ヒ官吏癡篤疾者等ヲ除キ年齡二十歳ニ達シタル男子總數ノ三分ノ一ヲ選ンテ兵役ニ服セシメ之ヲ大小ノ軍隊ニ編成シ中央及ヒ各地方ニ配置シテ國防ニ備ヘ土地兼併ノ弊ヲ矯ムルカ爲メ宅地園地ノ外國内ノ土地ハ凡テ國有トシ上親王ヨリ下庶民ニ至ルマテ各一定ノ耕地ヲ與ヘ其ノ死亡ト共ニ之ヲ國家ニ回收シテ賣買相續ヲ許ルサス只所持者ハ一年間之ヲ貸貸スルノ權アルノミ社寺ハ國家ヨリ土地ヲ寄附シテ之ヲ

維持シ、僧侶ニ對シテ嚴重ノ監督ヲ行ヒ、國ノ財政ヲ維持スルカ爲ニ地租及ヒ一種ノ人頭稅ヲ起シ、又國有地及ヒ國庫收入ヲ貸付ケテ地代利子ヲ徵シ、中央及ヒ各地方ニ學校ヲ設ケテ其ノ卒業生ヲ競爭試驗ノ法ニ依リテ官吏ニ登用シ、交通ノ制度ヲ整ヘテ中央政府ト各地方トノ連絡ヲ容易ニシ、其ノ他刑事法、民法特ニ其ノ親族法ハ頗ル詳密ノ規定ヲ有セリ、斯ノ如ク第二期ノ法制ハ舊制ニ對シテ根本的ノ改革ヲ加ヘシモノナリト雖モ、又日本固有ノ制度ヲ存スル點少ナカラス、特ニ中央官制ニ於テ神祇官ヲ太政官ト齊シク最高ノ地位ニ置クカ如キハ支那法制ニ見サル所ニシテ、家族制度ノ如キモ亦日本固有ノ制度ヲ存スル點少ナカラス

此ノ支那主義ノ制度行ハレテヨリ國民ノ文化大ニ開發シ、特ニ法學ハ高度ノ發達ヲ爲セシカ素ト此ノ制度ハ我カ國情ニ適セサル點多ク年ヲ經ルニ從ヒテ漸々廢弛ニ歸シタリ、蓋シ我國ハ古來農耕ノ業

大ニ開ケ土地私有ノ念盛ナルヲ以テ土地國有制ヲ維持スルコト甚タ難ク、又古來門地血統ヲ貴ヒシヲ以テ人材登用ヲ行フコト容易ナラス、左レハニヤ久シカラスシテ再セ官職ハ一ニ權門ノ專有ニ歸シ、口分田ノ制弛ミテ強族又ハ社寺ノ私領各地ニ起リ、特ニ兵制廢弛ノ爲メ政府ハ事變アル毎ニ豪族ノ力ニ頼ラサルヲ得サルノ勢トナリテ武家ノ勢力次第ニ增長シ、遂ニ政權ハ武門ノ手ニ歸シテ封建制度ヲ見ルニ至レリ

(二)後期 前期ノ末葉ヨリ中央政府ノ權力ハ益々衰微シ、群雄四方ニ割據シテ互ニ相侵略セシカ、其ノ中最モ強族ニシテ海内平定ノ功ヲ奏セシ者君主ノ委任ヲ承ケテ政權ヲ握リ、別ニ中央政府ヲ設ケテ之ヲ幕府ト稱ス、蓋シ武將政府ノ意ナリ、而シテ各地方ハ之ヲ其ノ從屬ノ功臣ニ封シ、又ハ服從シタル豪族ヲシテ之ヲ保有セシメ、此等ノ領主ハ幕府ニ對シテハ嚴重ノ監督ヲ受ケント雖モ、其ノ領内ニ對シテハ殆

ント無制限ニ政權ヲ行ヒタリ、而シテ此ノ封建制度ヲ最モ完全ニ建設セシ者ハ徳川氏ニシテ二千二百六十年ヨリ三十年前マテ之ヲ維持シタリ、抑モ幕府ノ法制ハ主トシテ慣習ニ存シ、其ノ成文法ハ實用ヲ主トシテ體裁ニ拘泥セズ、其ノ基ク所ハ當時ノ實際ニ應ジテ支那法制ヲ參酌シタルモノナリ、蓋シ支那法制ハ當期ニ至リ成文ノ儘行ハレスト雖モ、我國ノ法律思想ハ近世ニ至ルマテ主トシテ之ニ支配セラレタルナリ、而シテ徳川氏ノ成文法ハ所謂民ハ之ニ由ラシムヘシ之ヲ知ラシムヘカラスノ主義ヲ取り多ク之ヲ秘密ニシテ直接ニ關係ヲ有スル有司ノ外之ヲ知ラシメズ、其ノ成文法中最モ著シキモノハ朝廷ト幕府、幕府ト諸侯トノ關係ヲ定メタルモノ及ヒ刑法ニシテ、此ノ刑法ハ各諸侯モ之ニ倣ヒテ殆ント同様ノ制ヲ其ノ領内ニ行ヒタリ、徳川氏ノ法制ハ第三期即チ王政復古ノ後モ暫ク存在セシモノ多キ故之ヲ第一編以下ノ各部ニ譲リ、此ニハ幕府ノ政治組織ノ大

幕府ノ政治組織

綱ヲ示スヘシ

幕府ハ政治ノ實權ヲ握ルト雖モ國家ノ大事ハ事前又ハ事後ニ之ヲ奏上スルヲ例トス、將軍ヲ任命シ、位階ヲ授ク、年號ヲ定メ、寺院ノ設立ヲ認許シ、僧官ヲ任免スルカ如キハ天皇ノ特權トス、而シテ皇室經費及ヒ朝廷ニ仕事スル公卿等ノ俸祿ハ幕府ヨリ定額ヲ支出セリ、次ニ幕府ハ外交、兵馬、鑄錢、及ヒ金銀銅ノ鑄業、寺社、重大ナル裁判ニ關スル事務ヲ自カラ行ヒ、又首府其他主要ノ地ハ其ノ直轄トシ、代官ヲ置キテ之ヲ支配シ、其ノ他ノ地方ハ之ヲ其ノ舊來從屬ノ功臣ニ封シ、又ハ徳川氏ニ服從シタル舊領主ヲシテ保有セシメ、此等諸侯ノ數二百七十有餘ニシテ、其ノ領内ノ政務ハ殆ント之ニ一任シ、各、小獨立國ノ如キ有様ヲ爲セリ、然レトモ幕府ハ諸侯ノ妻子ヲ首府即チ江戸ニ住セシメテ之ヲ質トシ、且ツ諸侯ニ命シテ年々一定ノ期間幕府ニ參勤セシメ、諸侯ニシテ重大ノ過失アレハ其ノ領土ヲ削減、改易又ハ沒收シ、

徳川氏ノ法制

戦時ニハ兵馬ヲ供セシメ、平時ニハ一定ノ軍用金ヲ課シ、幕府ニ於テ重大ノ土木ヲ起スカ如キ場合ニハ之ニ經費ノ貢納ヲ命シ、其ノ他必要ニ臨ミテハ如何ナル事柄ヲ命スルモ法律上ノ制限ナシトス。尚ホ爰ニ徳川氏ノ法制ニ付キ一ニ注意スヘキ點ヲ擧クレハ、第一ハ外國交通制度ニシテ其ノ政府ノ安寧ヲ維持スルノ必要ヨリ非常ニ之ヲ制限シ、且ツ耶蘇教ノ信仰ヲ禁止シタリ、第二編宗教ノ部参照第二ニ注意スヘキハ其ノ社會政策的法制ニ在リ、蓋シ我國ハ上古ヨリ農業盛ニシテ權門勢家土地兼併ノ弊ニ苦シミ、既ニ前期ニ於テハ井田法ヲ採用セシモ其ノ効ヲ奏セス、徳川氏ニ至リテ國民ヲ武士平民等ノ階級ニ分チ、(第二編戶籍ノ部参照)武士ニハ世襲ノ俸祿ヲ與ヘテ營利ノ業ヲ禁シ、平民以下ハ文武ノ政務ニ從事スルコトヲ禁シテ産業ニ從事セシメ、而シテ土地賣買ヲ禁シテ其ノ兼併ヲ防キ、數多ノ營業ヲ特許業トシテ自由競争ヲ制シ、其ノ他親族隣保互ニ相扶クル

大政奉還

ノ義務ヲ負ヘシムルカ如キ種々ノ制度ヲ設ケ各人ヲシテ其ノ分ニ安ンシ生ヲ樂シムノ途ヲ與ヘタリ。徳川氏ハ禍亂ヲ戡定シ國政ヲ總攬セシモ泰平ノ久シキニ衰レ恬熙風ヲ爲シ綱紐漸ク弛ミ武備廢ナラス、時ニ泰西各國富強相競ヒ使節相踵テ通商貿易ヲ乞、幕議其ノ請ヲ容レス殆ント釁端ヲ啓カントス、則假ニ其ノ請ヲ聽許シ其ノ約ヲ遲緩セシメ以テ其ノ間ニ處スル所アラントス、有志ノ士其ノ怯懦ヲ憤慨シ、過激者流ハ斬姦ヲ唱ヘ暗殺ヲ行ヒ都鄙ヲ騷擾ス、加之幕府適、嫡胤絶エ支胤入りテ嗣キ輔弼其人ヲ得ス、此ノ機ニ際シ勤王ノ徒ハ熾ニ大義名分ヲ唱ヘ幕府カ政權ヲ左右スルハ我國固有ノ體制ニ背クモノトナシ、又攘夷論ヲ口實トシテ世論ヲ喚起シ公武ノ間益、阻隔スルニ至レリ、而シテ幕府ノ權力ハ漸々衰微ニ傾キ財政ハ困難ニ陥井リ強大ノ諸侯ヲ威服スルニ足ラス、終ニ慶應三年十月十五日徳川慶喜大政ヲ奉還シ將軍職ヲ辭シ、



鎌倉幕府以來七百年間武門政治ノ雲霧全ク消散シテ天日再ヒ其ノ  
光輝ヲ發揚シ王政維新今日開明ノ基ヲ開クニ至レリ

歐米制度折衷ノ  
法制

第三期ノ法制ハ之ヲ歐米ノ制度ニ參酌スル所多シト雖モ其ノ初メニ  
在リテハ復古思想頗ル盛ニシテ中央官制及ヒ刑法ノ如キハ殆ント第  
二期ニ於ケル支那法制折衷主義ノ全部ヲ復活シタルモノナリ只中央  
官制ニ於テ立法上輿論ヲ採用スルノ制ヲ設クシハ泰西新思想ニ出ツ  
ルモノトス、

維新ノ改革タル主トシテ各藩勤王志士ノ力ニ頼ルモノニシテ諸侯ニ  
對スル新政府ノ實力モ此等ノ志士ニ倚ラサルヲ得サルノ必要アリ明  
治四年七月諸侯ハ全ク其ノ政權ヲ失ヒテ郡縣ノ制トナリ新政府ノ基  
礎益々確實トナレリ是ニ於テカ政府ハ兵制、財政、交通、教育、銀行、司法等歐  
米ノ制ニ考ヘテ著々改良ヲ行ヒ封建ノ遺習タル彼ノ階級及ヒ特權主  
義ノ法制ハ殆ント其ノ跡ヲ絶ツニ至レリ

夫レ維新ノ變革ハ空前絶後ノ政變ナリ而シテ其ノ變革ノ反動トシテ  
國內ニ多少波瀾アリシト雖モ其ノ政變ノ大ナル割合ニハ一小波瀾ト  
謂ハサルヘカラス又維新後數年間ハ政治ノ變革ニ關シ種々障礙ヲ惹  
起シタリト雖モ其ノ障礙ヲ排除シ一定ノ方針ニ依リ著々改良ノ歩武  
ヲ進メ今日ノ基礎ヲ建造シタルモノハ氣運ノ然ラシムル所ナリト雖  
モ抑モ亦聖天子ノ威徳ト三條岩倉及ヒ大久保木戸西郷等ノ良臣能ク  
聖徳ヲ輔弼シ洪業ヲ贊襄シタルノ功ニ歸セサルヲ得ス明治六年六月  
豫算ヲ公布シ八年四月元老院大審院ヲ設ケテ立法司法ノ制ヲ改メ明  
治八年度ヨリ決算ヲ公布シ明治十一年七月府縣會及ヒ町村會ヲ設ク  
明治十三年三月會計検査院ヲ設ク同年七月刑法治罪法ヲ頒布ス明治  
十四年十月勅ヲ發シテ來ル二十三年ヨリ國會ヲ開設スヘキ旨ヲ諭ス  
二十二年二月憲法及ヒ議院法會計法二十三年六月行政裁判法ヲ發布  
シテ翌年十一月國會開設ノ時ヨリ實施スルコト、セリ而シテ憲法發

布ノ前後ニ伴ヒ中央官制市町村制府縣制民法商法民事及ヒ刑事訴訟法等數多重要ノ法律ヲ發布シテ司法及ヒ行政組織ニ關スル制度ハ大ニ整備スルニ至レリ但シ此ノ民法商法ノ規定ハ不便ノ點少ナカラサルヲ以テ同年ノ議會ニ於テ之カ施行ヲ延期シ其ノ後商法ハ最モ必要ナル一部ヲ實施シ同時ニ民法商法ノ改正ニ著手シ新民法及ヒ商法ハ全部既ニ公布セラレテ刑法民事及ヒ刑事訴訟法等モ日ナラスシテ其ノ改正ヲ見ルニ至ルヘシ斯ノ如ク司法ニ關スル法制ハ著々改良セララルト同時ニ行政法ハ近時ニ至リ最モ著シキ發達ヲ爲シツ、アリ、蓋シ行政法ハ從來頗ル發達ヲ爲セシト雖モ多クハ之ヲ地方長官ノ權限ニ委テシヲ以テ各地方甚タ區々ニ亘リシカ、近時之ヲ統一シテ更ニ改良ヲ加フルニ至レリ

斯ノ如ク我國ノ法制ハ維新以來長足ノ進步ヲ爲セシカ、其ノ中支那法制ヲ參酌セシハ維新ノ初メニ於ケル中央官制ト刑事法ヲ以テ最モ著

シキモノトシ、其ノ他ハ主トシテ時ノ必要ニ應シ歐洲ノ法制ヲ參酌シタルモノナリ、蓋シ維新後佛英獨ノ法學盛ニ研究セラレ、各其ノ長ヲ採リテ必スシモ一方ニ偏セスト雖モ、司法ノ部ニ於テハ從來多ク佛英ノ法學勢力ヲ有シ、民法ノ如キハ個々ノ單行法ヲ除クノ外一ニ慣習法ニ依ルモノナルカ、維新以來社會事情ノ變遷甚タ大ニシテ慣習ノ確立セサルモノ少ナカラサルカ故ニ、裁判官ハ多ク佛英ノ法制ヲ參酌シテ判決ヲ下セシカ如シ、然ルニ近時獨乙法學モ盛ニ行ハレテ佛英ノ法律ト相並ヒテ勢力ヲ有スルニ至レリ、又公法ノ部ニ於テハ獨乙法學ハ早クヨリ勢力ヲ有シ、佛英法制ト肩ヲ並ヘテ折衷參酌セラレタリ

之ヲ要スルニ三十年來我國ノ法制ハ國民ノ文化ト共ニ驚クヘキ長足ノ進步ヲ爲セリト雖モ、何レノ法制モ一躍以テ今日ノ地位ニ達セシモノナク、歩一步進ミ來リシモノニシテ仔細ニ此ノ間ノ歴史ヲ研究スルトキハ以テ現時ノ法制ノ成立スル所以ヲ明カニスルヲ得ヘク、又以テ

將來法制ノ發達ヲ窺フニ難カラサルナリ

國法

國是治定ノ詔

### 第一編 國法

#### 第一章 憲法

慶應三年十二月幕府大政ヲ返上シ王政舊ニ復ス翌年即明治元年三月  
 天皇百官諸侯ヲ召シ廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決シ上下一心盛ニ經  
 緯ヲ行ヒ官民一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシ  
 ムルコトヲ要シ舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基キ智識ヲ世界ニ求  
 メ皇基ヲ振起スヘキノ五事ヲ神明ニ誓ヘセラレ國是ヲ定メ萬民保全  
 ノ道ヲ求メラル同日億兆ヲ安撫シ國威ヲ宣揚被遊度ノ宸翰ヲ總裁輔  
 弼ヨリ公布セリ。

議政、行政、司法  
ノ官制ヲ定ム

同年閏四月新ニ官制ヲ定メ略ホ議政、行政、司法ノ機關ヲ分チ議政官ヲ  
 上下二局ニ分チ、上局ニ議定參與ヲ置キ主トシテ一般ノ法制ヲ定メ機

太政官ノ設置

務ヲ決シ三等官以上ヲ詮衡シ賞罰ヲ明カニシ條約締結及ヒ和戰宣布等ノ事ヲ掌リ下局ハ各藩主ノ選定シタル多數ノ議員ヲ以テ組織シ外國條約宣戰講和租稅兵役等重要ノ事項ニ付キ上局ノ諮詢ニ對シテ議決シ、司法官ハ裁判及ヒ警察ノ事務ヲ司ルコト、セシカ如キハ抑モ亦此ノ誓詔ノ旨意ニ外ナラス、同年九月議政官ヲ廢シ上局ノ議員ハ其ノ儘行政官ニ屬シテ其ノ諮詢ニ應シ政務ヲ議セシメ、翌年四月殆ント同一ノ制度ヲ回復セシカ、二年七月上旬ヲ廢シ太政官ヲ置キテ最高官府トシ、行政司法ノ各機關ハ凡テ其ノ監督ノ下ニ立テ集議院(舊ノ下局)モ唯其ノ命ニ從ヒ諮詢ニ答フルニ過キス、當時集議院ノ制度ヲ見ルニ其ノ議員ハ各藩主及ヒ各地方長官ニ於テ其ノ部下ノ官吏中一定ノ官等以上ニ在ル者ヨリ選任シ、任期ハ四年ニシテ二年毎ニ半數改任ヲ行ハシム、議院ハ常ニ成立シ毎月一定ノ日ニ會合シテ太政官ヨリ下付シタル議案ニ對シ可否ヲ議決ス、議事ハ凡テ人民ノ傍聽ヲ許ルス、議院ハ又

一般人民ノ建白ヲ受理シテ會議ニ附シ、其ノ可決セシモノハ太政官ニ上申ス

集議院ハ明治六年六月ニ至リ廢止セラレシカ是レヨリ先キ明治四年七月中央官制ヲ改メ太政大臣ノ下ニ左右兩院ヲ置キ一般ニ關スル法令ハ凡テ太政大臣天皇ノ監督ノ下ニ之ヲ制定シ、左院ハ自カラ法案ヲ議決シテ太政大臣ニ上申シ及ヒ太政大臣ノ下付セル議案ヲ審議スル所ニシテ、其ノ議員ハ凡テ政府之ヲ任命シ、右院ハ各部行政長官ノ會同協議スル所トス、太政大臣ハ左院ノ決議ニシテ行政ノ實務ニ關係スルモノハ之ヲ右院ノ議ニ付シ、又右院ノ議決ニシテ公議ニ諮フノ必要アリト認ムルモノハ之ヲ左院ニ下付ス然レトモ太政大臣ハ議案ノ下付決議ノ採否ニ付キテハ何等ノ制限ヲ受クルコトナシ

明治七年五月議院憲法ヲ頒ツノ詔ニ曰ク朕踐祚ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以

議院憲法頒布ノ詔

元老院ノ設置

テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ンシ以テ國家ノ重キヲ擔任スヘキノ義務アルヲ知ラシメシムコトヲ期望ス故ニ先ツ地方長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒示ス各員其ノ之ヲ遵守セヨト此ノ議會ハ各地方長官ヲ以テ組織シ毎年一回及ヒ臨時必要アル時ニ召集シテ議案ヲ下付シ其ノ決議ヲ上奏セシム但シ之ヲ採用スルト否トハ君主ノ自由ニ存ス此ノ會議ハ地方長官ヲシテ人民ノ代表者タル心得ヲ以テ會同セシムルヲ以テ議場ニ於ケル言論忌諱ニ觸ル、モ糾斷スルコトヲ得スト定メタリ、此ノ會ノ性質ハ其ノ頭ヲ官トシ其ノ尾ヲ民トシタル一種異様ノモ、如クナレトモ他日帝國議會ヲ開カル、ノ元素ハ亦實ニ此ノ會ニ胚胎セリ、同八年四月左右兩院ヲ廢シ御誓文ノ旨趣ヲ擴張シ立法ノ源ヲ廣ムルカ爲ニ同日元老院ヲ設ケラル

元老院ハ華族高等官國家ニ功勞アリシ者及ヒ政治法律ノ學識ヲ有ス

地方官會議

ル者ヨリ君主ノ勅任シタル議官ヲ以テ組織ス元老院ノ職權ヲ舉クレハ左ノ如シ

(一) 法案ノ議決 法案ハ勅命ヲ以テ內閣ヨリ提出シ其ノ法案中元老院ノ議決ヲ經テ君主ノ裁可スルモノト、單ニ元老院ノ檢視ニ付シ意見ヲ聞クニ過キサルモノトノ別アリ、其ノ區別ハ內閣ニ於テ之ヲ定ム、元老院ノ檢視ニ付スヘキ事項ニシテ急施ヲ要スルモノハ之ヲ公布シタル後其ノ檢視ニ付ス

(二) 上奏 元老院ハ立法ニ關スル意見ヲ上奏スルコトヲ得

(三) 請願ノ受理 元老院ハ立法ニ關スル請願ヲ受クルコトヲ得

行政長官即チ各省卿輔開拓使長次官其ノ他ノ政府委員ハ元老院ニ於テ議案ヲ説明シ意見ヲ陳フルコトヲ得ヘク、元老院モ亦行政長官ノ出席ヲ求ムルコトヲ得ヘシ

七年五月地方官會議ヲ組織セラレ同會議ハ各地方長官ヲ以テ議員ト

國會開設ノ詔

シ、毎年一回及ヒ臨時必要アル時ニ召集シテ君主自カラ議案ヲ下付シ、其ノ決議ヲ奏上セシム、但シ之ヲ採用スルト否トハ君主ノ自由ニ存ス、此ノ會議ハ地方長官ヲシテ人民ノ代表者タル心得ヲ以テ會同セシメ、議場ニ於ケル言論忌諱ニ觸ル、トモ糾斷スルコトヲ得スト定メタリ、元老院ハ明治二十三年十月帝國議會ノ開カレシマテ存在シ地方官會議ハ十三年十二月ヲ以テ最終ノ召集トス而シテ明治十一年七月ニハ府縣會ヲ設ケ次テ區町村會ヲ設ケラレタリ是等ハ共ニ民選議會タリ、明治十四年十月ノ詔敕ニ曰ク、夙ニ立憲政體ヲ立テ漸次基ヲ創メ序ニ循ヒテ歩ヲ進ムルノ道ニ由リ明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ開クヘシト明治二十二年二月ニ至リ憲法及ヒ皇室典範、議院法、選舉法等ノ附屬法ヲ公布シ、翌年十一月帝國議會開會ノ時ヨリ其ノ實施ヲ見ルニ至レリ

幕府時代ノ中央官制ハ司法ニ關シテハ較之ヲ他ノ政務ト區別シタレ

大審院ノ設置

憲法

トモ地方官制ハ全ク同一ノ機關ニ依リテ之ヲ司トリタリ、維新ノ初メニモ同一ノ主義ヲ採リシカ明治五年五月ニ至リ別ニ裁判所ヲ設ケ、司法大臣ハ唯死刑國事犯等奏請シテ決スヘキ二三ノ場合ニハ自カラ裁判スルコト、シ明治八年四月ニ至リ司法ヲ全ク行政權ト分離シ大審院ヲ設ケテ以テ審判ノ權ヲ鞏クセリ、明治十九年五月ニハ司法官ノ任用資格ヲ定メ且ツ刑事事又ハ懲戒裁判ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ退官懲罰セララル、コトナシトシ憲法ニ由リテ此等ノ點ハ確認セララル、ニ至レリ(次章裁判所構成法參照)

抑モ憲法ハ天皇ノ最高顧問府タル樞密院ニ諮詢シテ欽定シタマヒタルモノニシテ、天皇、臣民ノ權利義務、帝國議會、國務大臣及ヒ樞密顧問、司法會計、補則ノ七章ニ分チ七十六條ヲ以テ成立ス、將來此ノ憲法ヲ變更スルニハ勅命ヲ以テ其ノ案ヲ議會ニ付シ、兩議院ハ各其ノ總議員三分ノ二以上ノ出席ヲ以テ議事ヲ開キ、出席議員三分ノ二以上ノ多數決ニ

憲法發布ノ勅語

依リテ之ニ協賛スヘキモノトス  
明治二十二年二月ノ憲法發布ノ勅語ニ曰ク、朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶  
福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將  
來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス、ト今其ノ規定ノ概要ヲ示セ  
ハ

天皇

天皇

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治スルモノニシテ皇位ハ皇室典  
範ノ定ムル所ニ由リ皇男子孫之ヲ繼承ス、而シテ皇室典範ナルモノハ  
帝國議會ノ協賛ヲ要セス天皇之ヲ定ムルモノニシテ、憲法ニ依ルノ外  
廢止セラル、コトナキ形式的効力ヲ有ス、其ノ皇位繼承ニ關スル規定  
ヲ見ルニ、皇位ハ凡テ年長直系ニ由リ繼承スルモノニシテ、其ノ順位ハ  
第一ニ皇子孫、第二ニ皇兄弟子孫、第三ニ皇伯叔子孫、第四ニ其ノ他ノ最  
近親トシ同等内ニ於テハ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニス、皇嗣ニシテ不治ノ重

天皇ノ大權

忠又ハ重大ノ事故アルトキハ天皇ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シテ  
其ノ順位ヲ變更スルコトヲ得

天皇ハ議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フノ外、左ノ事項ニ付キテハ議會  
ノ協賛ヲ經スシテ親カラ其ノ權ヲ行フモノトス

(一) 議員ノ召集、議會ノ開會、閉會、停會及衆議院ノ解散

(二) 左ノ命令ヲ發布スルノ權

(1) 法律ニ代ルヘキ命令

公共ノ安寧ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲、緊急ノ必要ニ由  
リ帝國議會閉會ノ場合ニ發スルモノニシテ、此ノ勅令ハ次期ノ  
議會ニ提出シ若シ議會之ヲ承諾セサルトキハ政府ハ之ヲ廢止  
セサルヲ得ス

(2) 法律執行ノ爲ニスル命令

(3) 公安ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ノ命令

右(2)(3)ノ命令ハ行政官府ニ命シテモ之ヲ發セシムルコトヲ得ルモノニシテ、此ノ二種ノ命令ハ法律ヲ廢止變更スルノ效力ヲ有セス

(三) 行政官府ノ官制ノ制定、文武官ノ任免及俸給ノ給與

但シ此等ノ事項ニ付キ憲法及他ノ法律ニ特例ヲ設クルモノハ君主親カラ行フノ限リニ在ラス

(四) 陸海軍ノ編制、統帥及常備兵額ノ決定

(五) 宣戰講和及條約ノ締結

(六) 戒嚴ノ宣告

戒嚴ノ要件及效力ハ法律ヲ以テ定ムルモノトス

(七) 爵位勳章其ノ他榮典ノ授與

(八) 赦免權

皇室費ハ憲法實施ノ時ニ於ケル定額即チ一今年三百萬圓ヲ國庫ヨリ

支出シ、唯將來増額ヲ爲ス場合ニ限り議會ノ協賛ヲ經ルモノトス、又皇室典範ニ依リ勅命ヲ以テ皇室ノ世傳御料ヲ定ムルコトヲ得ヘシ

攝政

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ統治權ヲ行フ攝政ヲ置クノ間ハ憲法及皇室典範ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

攝政ヲ置ク場合及攝政タルヘキ者ハ皇室典範ニ由リテ定メラル、モノニシテ其ノ規定左ノ如シ

第一攝政ヲ置ク場合 攝政ハ左ノ事由アルトキハ其ノ位ニ就クモノトス

(1) 天皇未成年ナルトキ(天皇ハ十八歳ヲ以テ成年トス)

(2) 天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキ但シ此ノ事由ノ存在スルヤ否ハ皇族會議及樞密院ニテ議定ス

第二攝政ト爲ルヘキ者 皇族ノ中左ノ順位ニ由リテ攝政ノ位ニ上ル



モノトス

(1) 成年ノ皇太子又ハ皇太孫

(2) 親王、王、皇后、皇太后、太皇太后、內親王、女王、

同等内ニ於ケル順位ハ皇位繼承ノ場合ト同シ、但シ皇太子孫成年ニ達シタルトキハ之ニ其ノ任ヲ讓ルコトヲ要ス、而シテ此ノ順位ハ重忠又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議決ニ依リ變更ス又女性ハ其ノ配偶者アラサル者ニ限ルモノトス

臣民

臣民ノ權利義務

日本臣民タルノ要件ハ法律ニ依リテ定メサルヘカラス、而シテ日本臣民タル者ハ憲法ニ依リ左ノ諸種ノ權利ヲ確保セラル

(一) 法律命令ノ定メタル資格ヲ有スル者ハ身分ニ拘ハラズ均シク官吏ト爲リ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

(二) 法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ有ス

(三) 相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒテ請願ヲ爲スコトヲ得

(四) 左ノ事項ニ付テハ法律ニ依ルニ非サレハ其ノ自由ヲ制限セラレ又ハ負擔ヲ命セラル、コトナシ

(1) 宗教ノ信仰 但シ安寧秩序ヲ妨ケス、臣民タルノ義務ニ背カサルニ限ル

(2) 居住及移轉

(3) 逮捕、監禁、審問、處罰

(4) 意思ニ反スル住所ノ侵入搜索

(5) 信書ノ秘密

(6) 言論、著作、出版、集會及結社

(7) 所有物ノ收用 但シ法律ヲ以テスルモ其ノ收用ハ公益ノ爲必要ナル場合ニ限ル

(8) 兵役

(9) 納税

是等ノ事項ニ關スル憲法ノ條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セサルモノニ限り、軍人ニ準行セラルヘク又戰時若クハ事變ノ際ニ於テハ天皇大權ノ行使ヲ妨クルコトナキモノトス

帝國議會

帝國議會

帝國議會ハ貴族院、衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス、貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及ヒ勅任セラレタル議員ヲ以テ組織シ、衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス、但シ何人モ同時ニ兩院ノ議員タルコトヲ得サルモノトス  
議會ハ毎年之ヲ召集シ、其ノ會期ハ三個月トスレトモ必要ノ場合ニハ勅命ヲ以テ延期スルコトヲ得ヘシ、又臨時緊急ノ必要アルトキハ臨時會ヲ召集シ、其ノ會期ハ勅命ヲ以テ之ヲ定ム、而シテ議院法ニ依レハ議

會ノ停會ハ十五日ヲ過クルコトヲ得ス、衆議院解散セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員選舉ヲ命ジ、解散ノ日ヨリ五個月以内ニ之ヲ召集セサルヘカラス

憲法ニ定ムル所ノ帝國議會及ヒ各議院ノ權限ハ左ノ如シ

第一帝國議會

(一) 法律、豫算、公債ノ募集、及豫算ニ定メサル國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スコトニ付キ協賛スルコト

(二) 法律ニ代ルヘキ命令及財政上ノ緊急處分ニ對シテ事後承諾ヲ爲スコト

(三) 決算ノ提出ヲ受クルコト

第二各議院

(一) 法律案ヲ提出スルコト

兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ再ヒ提出スル

コトヲ得ス

(二) 政府ニ建議スルコト 但シ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ再ヒ建議スルコトヲ得ス

(三) 天皇ニ上奏スルコト

(四) 臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコト

(五) 現行犯又ハ國事犯以外ノ犯罪ノ爲會期中ニ其ノ院ノ議員ヲ逮捕スルコトヲ許否スルコト

(六) 憲法及議院法ノ範圍内ニ於テ其ノ院ノ内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ定ムルコト

此ノ外各議院ハ議院法ノ定ムル所ニ由リ政府ニ質問シ報告ヲ求メ、其ノ議員ノ資格ヲ審査シ、辭職及ヒ有期ノ請暇ヲ許可シ、委員ヲ選任シ、議員又ハ傍聽人ニ對シテ議場整理ノ爲メ一定ノ處分ヲ爲スコトヲ得、各議院ハ總議員三分ノ一以上出席セザレハ議事ヲ開クヲ得ス、決議ヲ

採ルハ過半数ニ依ル、但シ憲法變更ノ場合ニハ三分ノ二以上ノ出席ニ由リ三分ノ二以上ノ多数ヲ以テ決議ス、各院ノ會議ハ公開スルヲ原則トシ、政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リテ秘密會ト爲スコトヲ得ルモノトス、國務大臣及ヒ政府委員ハ何時タリトモ議院ニ出席シ及ヒ發言スルノ權アリ、但シ自カラ議員タル場合ニ非サレハ決議ニ加ハルヲ得サルハ論ヲ竣タス

各院ノ議員ハ議院ニ於テ發表シタル意見ニ付キ、院外ニ於テ國法ニ對スル責ヲ負フコトナシ、但シ院外ニ於テ自カラ之ヲ公ケニスル場合ハ此ノ限ニ在ラス、又議員ハ現行犯若クハ國事犯ノ外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セラル、コトナク、議會並議員保護法ニ依リテ議員ニ對スル暴行侮辱等ニ付テハ特ニ刑ヲ重クス、議員ハ議院法ニ依リテ一定ノ歳費、旅費及ヒ手當ヲ受クルノ權アリ

國務大臣及樞密顧問

國務大臣及樞密顧問

至高顧問府

國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シテ其ノ責ニ任シ、法律、勅令其ノ他國務ニ關スル詔勅ニ副署ス

樞密顧問ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス(二十一年四月第二十二號勅令節錄)朕元勳及練達ノ人ヲ選ミ國務ヲ諮詢シ其ノ啓沃ノ力ニ倚ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ至高顧問ノ府トナサントス

樞密院ハ議長、副議長各一人、顧問官二十五人及ヒ書記官若干人ヲ以テ組織シ顧問官ハ年齡四十歳以上ニ達シタル元勳及ヒ練達ノ人ヨリ親任セラル、モノナリ、樞密院ノ權限ハ憲法及ヒ之ニ附屬スル法令ノ疑義又ハ其ノ草案、戒嚴ノ宣告法律ニ代ル勅令及ヒ罰則ノ規定アル勅令ノ發布、財政上ノ緊急處分、國際條約等一定ノ事項及ヒ君主ノ任意ニ定ムル事項ニ付キ、諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏スルモノナリ、而シテ戒嚴ノ宣告其ノ他上ニ掲ケタル勅令ノ發布ニハ樞密院ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載スヘキモノトス

司法

司法

司法權ハ法律ニ依リテ構成セラレタル裁判所、法律ニ依リテ之ヲ行フ裁判官ハ法律ノ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ任用シ(次章參照)刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分官吏懲戒ノ部參照ニ由ルノ外其ノ地位ヲ動かサル、コトナシ、裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス、但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ノ規定又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ公開ヲ停ムルコトヲ得ヘシ

會計

會計

租稅ヲ賦課シ稅率ヲ變更スルニハ法律ヲ以テシ、豫算、國債、及ヒ豫算ニ定メサル國庫負擔ノ契約ハ帝國議會ノ協賛ヲ要ス

國家ノ歲出入ハ年々豫算ヲ以テ議會ノ協賛ヲ經ルコトヲ要ス、但シ特別ノ須要ニ由リ政府ハ豫シメ年限ヲ定メ繼續費トシテ其ノ協賛ヲ求

ムルコトヲ得ヘシ、豫算ハ先ツ衆議院ニ提出スヘキモノトス、而シテ豫算中皇室費ハ憲法制定ノ當時ニ於ケル定額ニ由リテ國庫ヨリ支出シ、將來増額スル場合ノ外議會ノ協賛ヲ要セス、又憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ、政府ノ同意ナクシテハ議會ハ之カ廢除削減ヲ議決スルヲ得ス、議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ其ノ他ノ事情ニ由リ豫算成立ニ至ラサルトキハ前年度ノ豫算ヲ施行スルモノトス

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲メ又ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲メ豫備費ヲ設クルヲ要ス、而シテ此等ノ豫算ニ定メサル支出ヲ爲セシトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求メサルヘカラス、又公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アル場合ニ於テ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ、政府ハ勅命ニ由リテ財政上必要ノ處分ヲ爲シ次ノ會期ニ於テ議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

國家ノ歳出入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査シ、政府ハ其ノ検査報告ト共ニ之ヲ議會ニ提出セサルヘカラス、而シテ會計検査院ノ組織權限ハ法律ヲ以テ定ムヘキモノトス(財務行政會計ノ部參照)

議院法

## 第二章 議院法

### 第一節 議院

明治二十二年二月法律第二號ヲ以テ議院法ヲ定ム、該法ニ依レハ帝國議會召集ノ勅諭ハ集會ノ期日ヲ定メ、少クトモ四十日前ニ之ヲ發布ス、各議員ハ指定ノ期日ニ議場ニ集會シ、議長、副議長ハ衆議院ニ在リテハ其ノ院ノ議員中ヨリ各三名ヲ選舉セシメ、其ノ中ニ就キテ君主之ヲ勅任ス、其ノ任期ハ議員ノ任期ニ依ル、貴族院ニ在リテハ貴族院令ノ定ムル所ニ由リ七年ノ任期ヲ以テ君主直チニ勅任ス、各議院ニハ全院委員、常任委員、及ヒ特別委員ヲ設ケシメ、又各議院ハ抽籤法ニ由リ總議員ヲ數部ニ分チ、每部ニ部長一名ヲ部員中ヨリ互選セシム

議院茲ニ成立シタルトキハ勅命ヲ以テ議會開會ノ日ヲ定メ、兩院議員ヲ貴族院ニ會合セシメ、天皇親カラ臨御シテ開院ノ式ヲ行ハサセラレ

開院式ノ勅語

而シテ後議事ヲ開始スルヲ例トセリ

明治二十三年十一月開院式ノ勅語ニ曰ク、朕即位以來二十年間ノ經始スル所内治諸般ノ制度粗其ノ綱領ヲ舉ケタリ、庶幾クハ卿等ト俱ニ前ヲ繼キ後ヲ啓キ、憲法ノ美果ヲ收メ、以テ將來ニ益、我カ帝國ノ光烈ト我カ臣民ノ忠良ニシテ、勇進ナル氣性トヲシテ、中外ニ表明ナラシムルコトヲ得ム、朕ハ卿等カ公平慎重以テ審議協贊スル所アルコトヲ期シ、併セテ將來ニ繼クヘキ模範ヲ貽サムコトヲ望ム

又各議院ニ書記官長一名、書記官數名ヲ置キ、其ノ任免ハ政府之ヲ行フ、書記官ノ外必要ナル職員ハ書記官長之ヲ任ス

議員ニハ凡テ一定ノ歳費ヲ給ス、但シ官吏ニシテ議員タル者ニハ之ヲ給セス、又議員ハ旅費ヲ受ケ、議會閉會後繼續委員トシテ議案ヲ審査スル者ハ一定ノ日當ヲ受ク

各議院ノ議事ハ其ノ議長ノ定メタル議事日程ノ順序ニ依ル、議事日程

議事方法

ヲ定ムルニハ政府ノ提出案ヲ先ニセサルヘカラス、但シ緊急ノ議事ニシテ政府ノ同意ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ、法律案ハ凡テ三讀會ヲ經テ議決ス、但シ政府ノ要求又ハ議員十人以上ノ要求ニ依リ出席議員三分ノ二以上ノ多數決ニ依ルトキハ此ノ手續ヲ省略スルコトヲ得、凡テ議案ヲ發議シ及ヒ議案ニ對シ修正ノ動議ヲ發スル者ハ二十人以上ノ賛成アルニ非サレハ議題ト爲スヲ得ス、但シ豫算案ニ對スル修正ノ動議ヲ發スル場合ハ三十人以上ノ賛成アルヲ要ス、政府ニ質問、建議シ又ハ上奏スルトキモ亦然リ、但シ質問ニ對シテハ政府ハ理由ヲ附シテ答辯ヲ拒ムコトヲ得ヘシ

兩院ノ關係ハ豫算案ヲ前ニ衆議院ニ提出スルノ外對等ニシテ、甲院ノ議決ヲ乙院ニ於テ可決又ハ否決シタルトキハ之ヲ甲院ニ通知スルニ止マリ、若シ之ニ修正ヲ加ヘタルトキハ其ノ修正案ヲ甲院ニ移シ、甲院之ニ同意セサルトキハ兩院ヨリ各十人以下同數ノ委員ヲ選ミテ協議

會ヲ開キ、此ニ協議案成立シタルトキハ最初原案ヲ議決シタル甲議院ニ之ヲ移ス、協議案ニ對シテハ更ニ修正ノ動議ヲ爲スコトヲ得ス、各議院ニ呈出スル人民ノ請願書ハ請願委員之ヲ審査シ、議院ニ報告ス、請願委員又ハ議員三十人以上ノ要求アルトキハ請願事件ヲ會議ニ附シ、之ヲ採擇スヘキモノト議決シタルトキハ議院ノ意見書ヲ付シテ其ノ請願書ヲ政府ニ送附シ、事宜ニ依リテハ政府ヨリ之ニ對スル報告ヲ求ムルコトヲ得、請願ニシテ憲法ノ變更又ハ司法及ヒ行政裁判ニ關スルモノ、皇室、政府又ハ議院ニ對シ不敬侮辱ノ語ヲ用ヒタルモノ、其ノ他一定ノ形式ヲ備ヘサルモノハ各議院之ヲ受理スルコトヲ得ス、各議院ハ請願ヲ受クルノ外人民ト交通シ又ハ國務大臣及ヒ政府委員ノ外他ノ國家機關ト交通スルヲ得ス、議院ヨリ審査ノ爲メ政府ニ向ツテ必要ナル報告又ハ文書ヲ求ムルトキハ、秘密ニ涉ルモノ、外政府ハ其ノ求メニ應セサルヘカラス

議場ニ於テハ皇室ニ對シ不敬ノ言論ヲ爲シ、其ノ他一般ニ無禮ノ語ヲ用ヒ又ハ他人ノ身上ニ涉ルノ言論ヲ爲スコトヲ得ス、議場ノ紀律ヲ保ツ爲ニ議長ハ議員及ヒ傍聽人ニ對シテ制止、發言禁止、退場等ノ處分ヲ行ヒ、政府ヨリ派出セル警察官吏ヲ指揮シテ之ヲ強行スルコトヲ得ヘシ、各議院ハ其ノ議員ニ對シテ懲罰ヲ行フノ權アリ、而シテ之ヲ行フニハ先ツ懲罰委員ニ審査セシメ、議院ノ決議ヲ經テ議長之ヲ宣告スルモノトス、懲罰ハ公開シタル議場ニ於ケル譴責、謝辭、一定時間出席ノ停止及ヒ除名ノ四種ニシテ、除名ヲ爲スニハ衆議院ニ於テハ出席議員ノ三分ノ二以上ノ多數決ヲ要シ、貴族院ニ於テハ議長ヨリ上奏シテ勅裁ヲ請フヘキモノトス、正當ノ事由ナクシテ出席ヲ怠ル者ニ對シテハ貴族院ニ於テハ其ノ出席ヲ停止シ上奏シテ勅裁ヲ請フヘク、衆議院ニ於テハ之ヲ除名スルコトヲ得ヘシ

### 第二節 衆議院議員選舉

明治二十二年二月法律第三號ヲ以テ衆議院議員選舉法ヲ定ム、該法ニ依レハ各府縣ヲ數多ノ選舉區ニ分チ、一選舉區ヨリ一名又ハ二名ノ議員ヲ選出セシム、議員ノ總數ハ三百名トス、各選舉區ノ事務ハ其ノ區ノ郡長市長ヲ選舉長トシテ之ヲ管理セシム、選舉人ニ特別ナル資格ハ、日本臣民ノ男子ニシテ年齡二十五歲以上ナルコト、選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ本籍ヲ定メテ住居シ、且ツ直接國稅十五圓以上ヲ納メ、仍ホ引續キテ住居及ヒ納稅ヲ爲スコト是ナリ、所得稅ノ場合ハ三年以上、被選舉人タル特別ノ資格ハ年齡三十歲以上ナルコト、一定ノ期間其ノ府縣内ニ住居スルヲ要セサルコト、外選舉人ノ場合ト同シ、尙ホ神官、僧侶、教師、宮内官、裁判官、會計検査官、稅務官、警察官ハ被選舉人ト爲ルコトヲ得ス、其ノ他ノ



官吏ハ其ノ職務ヲ妨ケサル限リハ議員ト相兼ヌルコトヲ得ヘシ、但シ府縣郡ノ官吏及ヒ市町村ノ吏員ハ其ノ關係アル選舉區ノ被選舉人タルコトヲ得ス

選舉人被選舉人タルコトヲ得サルハ瘋癲白痴ノ者、身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者、公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ公權停止中ノ者、一定ノ刑ニ處セラレ滿期又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者、選舉ニ關スル犯罪ニ由リ選舉權及ヒ被選舉權停止中ノ者、現役ニ在ル陸海軍人、華族ノ戶主等ナリ

選舉長ハ一定ノ手續ヲ以テ毎年選舉人名簿ヲ作り一定期日間之ヲ其ノ役所ニ於テ縱覽セシム、選舉人名簿ニ誤謬アルコトヲ發見シタルモノハ縱覽期日內ニ之ヲ申立テ、訂正ヲ請フコトヲ得、選舉長ノ處分ニ對シテ不服ナルモノハ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘシ、一定ノ期日ニ至レハ選舉名簿ハ確定シ、次年調製ノ日マテ效力ヲ有ス、但シ裁判言

渡書ニ依リ改正スヘキモノハ選舉長ニ於テ之ヲ改ムルモノトス、選舉ノ期日時間ハ法律ニ依リ一定セラル、投票所ハ選舉長ニ屬スル官廳及ヒ各町村役場等ニ設ケ、選舉人中ヨリ一定數ヲ指名シテ立會人ト爲ス、投票ハ選舉人自カラ投票所ニ至リ、投票用紙ニ被選人ヲ記載シテ記名捺印シ投票函ニ入ル、投票ヲ終レハ投票函ヲ選舉長ノ官署ニ集メ、一定數ノ委員ヲ投票立會人中ヨリ指定シテ選舉會ヲ設ケ、投票函ヲ開キ、投票數ヲ計算シ各投票ヲ點檢シテ選舉長ハ其ノ法定ノ形式ヲ具フルト否トニ由リテ選舉委員ノ意見ヲ聞キ效力ノ有無ヲ決定ス、此ノ選舉長ノ決定ニ對シテハ選舉會場ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス、當選人ヲ決スルニハ投票數ヲ以テシ、同數ノ者二人以上アルトキハ年齡ノ長スル者ヲ以テシ、年齡相同シキトキハ抽籤ヲ以テス、當選人ハ當選ヲ辭スルヲ得ヘク、又當選ノ通知ヲ得タル時ヨリ一定期間內ニ承諾ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ其ノ當選ヲ辭シタルモノト看做シ、更ニ選舉ノ

手續ヲ爲ス、選舉人ハ投票所及ヒ選舉會場ニ入ルコトヲ得レトモ、戎器ヲ携帶シ及ヒ秩序ヲ紊タスノ所爲アル者ハ之ヲ退場セシメ、且ツ一定ノ刑ニ處ス

各選舉區ニ於テ當選ヲ失ヒタル者、當選人ノ當選ヲ無効トスルノ理由アリト認ムルトキハ、當選人ヲ被告トシテ當選人ノ姓名公示アリシ日ヨリ一定ノ期限内ニ控訴院ニ出訴スルコトヲ得、但シ當選人ハ裁判確定ニ至ルマテ衆議院ニ列席スルノ權ヲ失ハス  
尙ホ選舉法ニ於テハ選舉ニ關スル犯罪ニ付キテ精密ナル罰則ヲ設ケタリ

### 第三節 貴族院ノ組織

明治二十二年二月勅令第十一號貴族院令、同年六月勅令第七十八號貴族院伯子男爵議員規則、同年六月勅令第七十九號貴族院多額納稅議員

貴族院ノ組織

互選規則等ニ依リ貴族院議員ニ關スル規定ヲ設ク而シテ貴族院ニ關スル特別ノ規定ハ凡テ樞密院ニ諮詢シテ定メタル勅令ヲ以テシ、其中貴族院ノ組織ニ關スル勅令ハ之ヲ變更スルニハ其ノ院ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス、而シテ貴族院ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

第一、身分ニ由リ議員タル者

(1) 成年ノ皇族

(2) 二十五歳以上ノ公侯爵

第二、選舉ニ由リ議員タル者

伯子男爵ヲ有シ二十五歳以上ニ達スル者ニシテ各其ノ同爵者ヨリ互選セラレタル者、此ノ種ノ議員ハ任期ヲ七年トシ、其ノ數ハ各爵總議員數ノ五分ノ一ヲ超ユルヲ得ス

第三、勅任ニ由リ議員タル者、此ノ種ノ議員ハ合シテ有爵議員ノ數ニ超過スルコトヲ得ス

(1) 國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル三十歳以上ノ者ヨリ特ニ勅任セラレタル議員 此ノ種ノ議員ハ終身其ノ任ニ在ルモノトス

(2) 各府縣ニ於テ多額ノ直接國稅ヲ納ムル三十歳以上ノ者十五人ノ中ヨリ一人ヲ互選シテ上奏シ勅任セラレタル議員 此ノ種ノ議員ノ任期ハ七年トシ其ノ互選ノ規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

貴族院ハ議員ノ資格及ヒ選舉ニ係ル爭訟ヲ判決シ其ノ判決ノ規則ハ貴族院ニ於テ議定シ上奏シテ裁可ヲ請フヘキモノトス、議員ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ勅命ヲ以テ除名ス、又懲罰ニ由リ除名スル者ハ議長ヨリ上奏シテ勅裁ヲ請フモノトス

貴族院ハ議院ノ一般ノ職務ノ外天皇ノ諮詢ニ應ヘ華族ノ特權ニ關スル條規ヲ議決ス

公文式

第三章 公文式及ヒ法例

法律命令ノ格式ヲ制定スルノ必要ヲ認メラレ明治十九年二月敕令第一號ヲ以テ公文式ヲ定メラル、今茲ニ公文式ニ關スル沿革ヲ略記スレハ明治元年三月舊幕府ノ揭榜ヲ撤シ更メテ五箇條ヲ揭示ス其ノ三箇條ハ永世ノ定法ニシテ之ヲ定三枚高札ト云ヒ他ノ二箇條ハ一時ノ揭示ニシテ覺書ト云フ、又時々ノ布令ヲ揭示スルモノトス、同年四月布告書類達方規則ヲ定ム、同年八月行政官、大總督府、鎮將府並五官府縣ノ布告發布ノ手續及ヒ其ノ文例ヲ定ム、六年二月第六十八號ヲ以テ諸布告發令毎ニ人民周知ノ爲メ凡三十日間便宜ノ地ニ揭示セシメ又從前ノ高札ハ人民周知スルヲ以テ之ヲ撤ス、同年六月第二百十三號ヲ以テ各府縣ニ諸布告到達ノ日數ヲ定メ三十日間揭示ノ後ハ管内一般人民熟知スルモノト看做ス旨ヲ達ス、同年七月北海道ニ限り各所到達揭示ノ

初日ヲ以テ取纏メ開拓使ヨリ届出ルヲ許ス、同年同月第二百五十四號  
ヲ以テ各廳及ヒ官員限リノ違書ト、全國人民一般又ハ華士族社寺ニ布  
告ノ區別ヲ立テ其ノ結文例ヲ定ム、七年四月第四十八號達ヲ以テ從前  
ノ布告布達ノ揭示方ヲ廢シ更ニ布告布達共該地到達ノ翌日ヨリ騰寫  
等ノ日數二十日ヲ除キ其ノ翌日ヨリ三十日經過セハ人民一般知得タ  
ルモノト看做スモノトス、十四年十二月第九十四號達ヲ以テ諸省事務  
章程通則ヲ定メ法律規則布達ハ其ノ主管事務ニ屬スル各省卿之ニ副  
署シ兩省以上關涉ノモノハ關涉ノ省卿均シク連署シ其ノ責ニ任セシ  
ム、同年十二月第一號達ヲ以テ法律規則ヲ布告トシ從前各省限リ布  
達スル條規ノ類ヲ總テ太政官ノ布達トシ一時公布ニ止マルモノヲ太  
政官及ヒ諸省ノ告示トス、十六年五月第十七號布告ヲ以テ從前令スル  
所ノ布告布達施行ニ關スル件ヲ改メ更ニ布告布達施行期限ヲ定ム、十  
九年二月敕令第一號ヲ以テ前令ヲ改メ更ニ公文式ヲ制定ス是レ現行

法ナリ

本敕令ハ第一ニ法律及ヒ一般ノ行政ニ係ル敕令ハ親署ノ後御璽ヲ鈐  
シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任大臣ト共ニ之ニ副署ス、其ノ各省  
專任ノ事務ニ屬スルモノハ主任大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ上諭  
ヲ以テ之ヲ公布ス、其ノ他閣令省令發布ノ手續ヲ定メタリ  
第二ニ凡ソ法律命令ハ官報ヲ以テ布告シ、官報各府縣到達日數ノ後官  
報到達日數ハ明治十六年五月二十六日第十四號布達ニ依ル即チ各地  
距離ノ遠近ニ應シ伸縮シタルモノナリ、若干日ヲ以テ施行ノ期限ト爲  
ス、天災時變ニ由リ到達日數内ニ到達セザルトキ及ヒ法律命令ノ特ニ  
急施ヲ要スル場合等ノ手續ヲ定メタリ  
第三ニハ法律命令ハ親署ノ後内大臣御璽ヲ鈐シ、國書、條約批准、外國派  
遣官吏委任狀、勅記、敕任官ノ辭令書、御璽、國璽ヲ鈐スルノ手續ヲ定メ  
タリ

法例

法例ハ明治二十三年十月法律第九十七號ヲ以テ民法ト相前後シテ公布セラレ二十九年十二月法律第九十四號ヲ以テ明治三十一年六月三十日マテ施行ヲ延期シ民法ノ修正ト共ニ多少ノ修正ヲ加ヘ三十一年六月法律第十號ヲ以テ公布セラレタリ抑モ法例ハ素ト民法又ハ民法旅行法ノ總則ニ非スシテ民法タルト商法タルト將タ公法タルト私法タルトヲ問ハス一般法律ノ適用ニ關スル通則ヲ規定セル法律ナルヲ以テ全ク獨立ノ法律トシテ制定セラレタリ

明治二十三年十月發布ノ法律ハ全編十七條ヨリ成立セリ法律ノ時ニ關スル效力法律牴觸公ケノ秩序善良ノ風俗及ヒ裁判拒絕ニ關スル原則ヲ掲ケタリト雖モ其ノ規定概テ汎濶ニ失シ實際ノ適用困難ナルノミナラス之ヲ法文ニ掲クルコトヲ要セスト謂フヲ以テ之ヲ修正シ之ヲ削除シタル簡條少ナカラス其ノ重要ナルモノヲ舉レハ第二條法律ハ既往ニ遡ル效力ヲ有セスヲ削除セリ法律不遡及ハ法律ノ時ニ關ス

ル效力ヲ定ムル萬世不易ノ一大原則トシテ近世ニ至ル迄ハ諸國ノ法典ニモ認メラレタリシモ法律ノ時ニ關スル效力ハ其ノ法律ノ性質ニ因リテ定マルヘキモノニシテ或ハ既往ニ遡ルモノアリ或ハ既往ニ遡ルヘカラサルモノアリ之ニ關シテ一定ノ通則ヲ掲クルハ却テ法律ノ適用ヲ誤ラシムルノ危險アルヲ免レストノ理由ヲ以テ削除セラレタリ第十三條(訴訟手續ハ其訴訟ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ)ヲ削除セラレタリ執行方法ハ其執行ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ)ヲ削除セラレタリ訴訟手續及ヒ執行方法ハ法廷地法ニ屬シ之ヲ爲ス國ノ法律ニ從ハサルヘカラサルハ各國ノ立法者及ヒ法學者ノ普ク認ムル原則ニシテ一國ノ法律タル法例ニ之ヲ規定スルハ却テ國法ノ體裁ヲ失スルモノトシテ削除セラレタリ第十七條(判事ハ法律ニ不明不備又ハ闕典アルヲ口實トシテ裁判ヲ拒絕スルコトヲ得ス)ヲ削除セラレタリ本規定モ歐洲各國ノ法制上一時大ニ重要セラレシ規定ニ屬スト雖モ法例ニ之ヲ規定スヘ

キ必要アルヲ見ス、此ノ規定ヲ以テ裁判官ノ權限職務ヲ定ムルモノト  
 セハ宜シク裁判所構成法ニ於テ之ヲ定ムヘキモノナリ、加之既ニ刑法  
 第二百八十三條ハ裁判官檢察官無故不受不理遷延ノ者ヲ處罰シ、判事  
 懲戒法第一條ハ判事職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタル者ヲ  
 懲戒スルノ規定アルヲ以テ無用ノ長物トシテ削除セラレタリ、其ノ他  
 改正ニ係ル條項少カラサルノミナラス殆ント一箇條トシテ舊態ノ儘  
 存スルモノナシ要スルニ不穩當ナル規定ヲ除キ新ニ必要ナル規定ヲ  
 加ヘ其ノ他改良ヲ施シタルモノニシテ全編第三十條ヨリ成立セリ

行政法

行政機關

行政機關ノ組織

中央行政

## 第二編 行政法

### 第一部 行政機關

#### 第一章 行政機關ノ組織

##### 第一節 中央行政

徳川氏ノ時代ニ在リテハ天皇ハ將軍ノ任命、位階ノ授與、寺院設立ノ認  
 可、高貴ノ僧官ノ任免等ヲ自カラ行フト雖モ、政治上ノ實權ハ凡テ幕府  
 ニ委任シ、皇室經費及ヒ朝廷ニ仕事スル公卿等ノ俸祿ハ幕府ヨリ定額  
 ヲ支出セシカ、朝廷ノ規模甚タ小ニシテ大政ハ盡ク幕府ノ掌握スル所  
 ナリシ、而シテ幕府ノ中央官制ヲ見ルニ將軍ノ下ニ大老一人アリテ庶  
 政ヲ監督ス、然レトモ此ノ官ハ時トシテ闕クルコトアリ必スシモ常ニ  
 存セス、第二ヲ老中ト云ヒ禁裏、公卿、諸侯等ニ關スル事務及ヒ一定ノ訴

詔ハ直接ニ管理シ、大老ヲ置カサルトキハ最高官府トシテ政令ヲ行フ、定員ハ五人ニシテ交番ニ勤務ス、第三ヲ若年寄ト云ヒ老中ヲ補佐スルノ外、幕府所屬ノ武士ヲ支配シ、又將軍ノ一身ニ關スル庶務ヲ統轄スルモノトス、尙ホ老中ニハ五人ノ大目付若年寄ニハ十人ノ目付ナル官ヲ付シテ各其ノ耳目トシ、百般ノ制度ヲ監察シ、訴訟ノ枉屈ヲ暢達シ、諸般ノ警察ヲ行ヒ、諸役人ヲ彈劾スルノ權アリ

次ニ政務ノ各部ヲ分擔スル機關ヲ舉クレハ、第一勘定奉行アリテ更ニ之ヲ財政部、司法部ニ分チ、財政部ハ一切ノ財務ヲ管理スルト同時ニ普通地方官ノ監督ヲ司トル、第二ヲ寺社奉行トシ、寺社及ヒ神官僧侶ニ關スル諸般ノ事務ヲ管理ス、此ノ二奉行ト相並ヒテ町奉行ナルモノアリ、幕府直轄領ノ中首府ノ事務ヲ司トリ、其ノ地位高ク直接ニ老中ノ監督ニ屬スト雖モ、其ノ性質ハ地方官ニ外ナラス

各藩ノ中央官制ハ固ヨリ幕府ノ如ク規模大ナルコトヲ得ス、諸侯ノ下

攝政關白征夷大將軍以下ノ職ヲ廢シ新ニ總裁、議定、參事、典、職ヲ置ク

ニ庶政ヲ統轄スル家老アリテ、其ノ下ニ警察、財政、司法等多少職務ノ分課アリト雖モ、其ノ職制ハ藩ノ大小ニ由リテ必スシモ一樣ナラス

慶應三年十二月攝政關白征夷大將軍以下ノ職ヲ廢シ新ニ總裁、議定、參事、典、職ヲ置ク、明治元年正月三職ヲ分テ神祇、内國、外國、軍務、會計、刑法、制度ノ七課ト爲シ、同二月之ニ總裁局ヲ加ヘテ八局ト稱ス、同閏四月新ニ官制ヲ定メ三職八局ヲ廢シ太政官中議政、行政、神祇、會計、軍務、外國、刑法ノ七官ヲ置ク

(一) 議政官 直接ニ君主ノ監督ヲ受ケテ重要ノ法規ヲ定メ、宣戰、講和、條約等ノ事項ヲ司トリ、他ノ諸官省ニ對シテ上級官省タルノ實ヲ有セリ、而シテ議政官ハ分チテ上下二局トシ、上局ハ議政官ニ屬スル權限ヲ執行シ、下局ハ各藩ヨリ選出シタル貢士ヲ以テ組織セル議會ニシテ上局ノ諮詢スル事項ヲ審議スルモノトス

(二) 行政官 他ノ官省ニ屬セサル一切ノ事務ヲ統轄ス、其ノ長官ハ議政

官上局ノ長官之ヲ兼ヌ

- (三) 神祇官 國祖祭祀ノ事務ヲ管理ス
- (四) 會計官 財政及ヒ交通行政ヲ司トル
- (五) 軍務官 一切ノ軍務ニ關スル事務ヲ司トル
- (六) 外國官 外國交通ニ關スル事務ヲ司トル
- (七) 刑法官 裁判司法警察及ヒ監獄ヲ司トル

此ノ制度ハ議政官ヲ除クノ外頗ル上古支那法制時代ノ官制ト相類シ  
 特ニ同年九月議政官ヲ行政官ニ屬セシメ、二年四月舊ニ復シ同年五月  
 議政官ヲ廢シ同年七月及ヒ八月更ニ官制ヲ改メテ益、上古ノ制ト相近  
 ツケリ、即チ神祇官太政官ヲ對等ノ地位ニ立タシメ、太政官ハ其ノ長ヲ  
 太政大臣トシ、之ニ左右大臣及ヒ數名ノ參議ヲ付シ其ノ事務ヲ輔ケシ  
 ム、太政官ノ下ニ民部(戶籍租稅交通鑛山濟貧)地方官ノ監督等(大藏國庫、  
 出納造幣官有財產管理)兵部刑部外務宮内ノ六省及ヒ集議院(舊議政

太政官官制ヲ改  
 メ其ノ長官ノ官  
 廳ヲ正院ト稱ス

官下局ニ相當ス(大學(教育行政)司トル)彈正臺(行政監督及ヒ警察事務  
 フ司トル)等ノ諸官府ヲ屬セシメ、次テ明治三年閏十月工部省ヲ置キ工  
 業鑛山業、鐵道、電信、土木、測量等ヲ管轄セシム、該省ハ明治十八年十二月  
 廢止セラレテ交通ニ關スル事務ハ逓信省ニ鑛山工業ニ關スル事務ハ  
 農商務省ニ移サレタリ

明治四年八月太政官官制ヲ改メ、其ノ長官ノ官廳ヲ正院ト稱シ、之ニ左  
 右兩院ヲ付ス、左院ハ一定ノ議官ヲ以テ組織スル議政府ニシテ、正院ノ  
 諮問ニ應シテ審議シ、又ハ自カラ建議スルノ權限ヲ有シ、右院ハ各省長  
 次官ノ會同シテ各省所管ニ關係アル法案ヲ議定シ、又ハ行政ノ實際ノ  
 利害ヲ審議スル所トス、而シテ左院ノ奏事ニシテ行政ノ實際ニ關係ア  
 ルモノハ右院ニ下付シ、右院ノ奏事ニシテ一般ニ關係スルカ如キモノ  
 ハ之ヲ左院ニ下付シテ審議セシメ、集議院ハ左院ニ屬セシメタリ、同年  
 七月民部省ヲ廢シ土木ノ外一切ノ事務ヲ大藏省ニ移シ、同月大學ニ代



フルニ文部省ヲ以テシ同年八月神祇官ヲ改メテ神祇省トシ各省ト齊シク太政官ニ屬セシメタリ

明治五年二月兵部省ヲ廢シテ陸軍省及ヒ海軍省ノ二省ヲ置キ神祇省ヲ廢シテ其ノ祭祀事務ヲ宮内省ニ移シ同年三月更ニ教部省ヲ設ケテ宗教行政事務ヲ司トラシム本省ハ明治十年一月廢止セラレ其ノ事務ヲ内務省ニ移セリ

明治六年五月太政官官制ヲ改定シテ凡ソ全國ニ通スル法令ハ太政大臣之ヲ左右大臣及ヒ議官ニ諮リテ案ヲ立テ勅裁ヲ經タル上太政大臣ノ名ヲ以テ之ヲ公布スルコト、シ、太政官ノ權限ヲ非常ニ擴張シテ各省ノ權限ヲ縮メタリ、同年十一月内務省ヲ設ケテ戶籍、警察、土木勸業、交通等ノ事務ヲ司トラシム

明治八年四月太政官官制ヲ改メ左右兩院ヲ廢シテ元老院ヲ置キ、重要ノ法律ヲ議定セシメ、大審院ヲ設ケテ行政官ヨリ裁判所ヲ分離シテ獨

立ノ權限ヲ與ヘ、各省ノ權限ヲ擴張シ、各省長官ノ專斷シ得ヘキ事項ト勅裁ヲ請フヘキ事項トヲ區別セリ、明治十三年三月達第十八號ヲ以テ大藏省中ノ監督局ニ代ヘテ太政官中ニ會計檢査院ヲ設ケ、翌年四月布告第二十一號ヲ以テ農商務省ヲ設ケテ農、商、漁、牧、畜、山林、交通等ノ事務ヲ司トラシム、但シ銀行ハ大藏省ニ鐵道電信ハ工部省ニ舊ノ如ク屬セシム、明治十八年十二月達第七十號ヲ以テ工部省ヲ廢シ鑛山、工作ノ事務ハ農商務省ニ移シ同時ニ遞信省ヲ設ケ之ニ郵便、電信、燈臺、管船等ノ事務ヲ移シ、鐵道ハ一時内閣ニ管掌セシカ二十五五年ニ之ヲ遞信省ニ移セリ

太政官ヲ廢シ内閣ヲ組織ス

明治十八年十二月中央官制ニ未曾有ノ改革ヲ行ヒ、太政官上ニ立チテ各省大臣之カ監督ニ服スルノ制ヲ廢シ各省大臣ハ直接ニ君主ノ監督ヲ承ケテ職務ヲ行フト同時ニ、内閣ヲ組織シテ重要ノ事項ヲ協議シ、内閣總理大臣ハ其ノ首班ニ立チ、旨ヲ承ケテ各部ノ統一ヲ計リ、兼テ又

官制改革ノ詔勅

各部ニ屬セサル一定ノ事務ヲ管理スルノ制ト爲セリ、  
 當時ノ詔勅ニ曰ク  
 朕惟フニ經國ノ要ハ官其制ヲ定メテ機關各其所ヲ得ルニ在リ内閣ハ  
 萬機親裁專ラ統一簡捷ヲ要スヘシ今其組織ヲ改メ諸大臣ヲシテ各其  
 重責ニ當ラシメ統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシ以テ從前各省太政官  
 ニ隸屬シ上申下行經由繁複ナルノ弊ヲ免レシム乃各部ニ至テハ官守  
 ヲ明カニシ以テ濫弊ヲ除キ選敍ヲ精クシ以テ才能ヲ待チ繁文ヲ省キ  
 以テ淹滯ヲ通シ冗費ヲ節シ以テ急要ヲ舉ク規律ヲ嚴ニシ以テ官紀ヲ  
 肅ニシ徐クニ以テ施政ノ整理ヲ圖ラントス是レ朕カ諸大臣ニ望ム所  
 ナリ中興ノ政一タヒハ進ミ一タヒハ退クヘカラス華ヲ去リ實ヲ務メ  
 綱舉リ目張リ永遠繼クヘカラシム諸臣其レ各朕カ意ヲ體シテ奉行ス  
 ル所アレト

内閣總理大臣ハ右ノ聖詔ヲ奉體シ各省事務ヲ整理スルノ綱領ヲ舉ケ

各省事務綱領

以テ將來ノ標準ヲ示シタリ

一 官守ヲ明ニスル事

我カ官制ハ草創ノ餘未タ限ルニ定員ノ制ヲ以テセス濫弊從テ生シ官  
 愈、多クシテ務愈、壅カルコトヲ免レヌ十年ニ一タヒ官制ヲ改メ教部省  
 ヲ廢シ内務省ニ併セ各省奏判官ヲ減シテ其過半數ヲ罷メタリ然ルニ  
 當時定員ノ制ヲ設ケテ以テ將來ヲ防範セサリシニ因リ其後又更ニ漸  
 クニ増員シ從テ減シテ從テ加ヘリ以テ其初メニ倍スルニ至レリ今ニ  
 於テ各省大臣宜シク詔意ヲ奉體シ左ノ節目ニ依リ各省内局課ノ設置  
 ヲ定メ官吏ノ員數ヲ限リ節減淘汰ノ意見ヲ具ヘテ閣議ニ付シ各省ヲ  
 シテ略均一ナラシメ成案トナシ然ル後上奏シテ裁ヲ請フヘシ

一 各省次官一人ニ限ル

一 各省書記官ハ其省ノ須要ニ從ヒ定員ヲ限ル

一 省中各局ニ屬セサルノ分課ハ其省書記官ノ内ヲ以テ課長ニ充ツ

- 一 省務ノ枝分シテ別ニ一部ヲ爲シ經常ニ繼續スヘキ者ヲ局トス局ニ局長一人又ハ局長局次長ヲ置ク
- 一 本省又ハ局中ノ事務ヲ分テ課ヲ設クルハ各省ノ便宜ニ從フ
- 一 局長及局次長ハ奏任トス局中ノ課長ハ判任ヲ以テ之ニ充ツ
- 一 局ノ等級ヲ分テ一等局二等局トナスハ事務ノ繁簡輕重ニ從ヒ各省大臣ノ具狀スル所ニ依リ裁定ヲ經ヘシ
- 一 局課ノ設置一定ノ後省務ノ變更ニ依リ新ニ廢置ヲ要シ又ハ新ニ奏任官ノ定員ヲ増サント要スルトキハ理由ヲ具ヘテ閣議ノ後裁可ヲ請フヘシ
- 一 各省ノ須要スル所ニ從ヒ定員ヲ限リ參事官ヲ置キ審議立案ノ職ニ供フルコトヲ得
- 一 以上定員ノ外出仕又ハ御用掛ノ名義ヲ以テ補任スルコトヲ得ス
- 一 各省大臣ハ局課ノ規程ヲ定メ局長課長ヲシテ責任スル所ヲ知ラシ

ムルヲ要ス

- 前項ノ規程ハ可成各省均一ヲ要スル爲ニ閣議ヲ經テ之ヲ定ムヘシ
- 一 八等官以下ハ各省ノ須要ニ從ヒ定額俸給項内ニ於テ各省大臣之ヲ判任スヘシ
  - 一 各省大臣ハ臨時事務ノ爲ニ判任常員ノ外ニ定額内ニ於テ備員ヲ使用スルコトヲ得
  - 一 學術專科ニ係ル官制及警視收稅典獄ノ類ハ別ニ定ムル所ニ依ル
  - 一 特ニ一事件ヲ審査セシムル爲ニ委員ヲ設ケ又ハ臨時ノ事務ヲ擔當セシムル爲ニ掛ヲ設ケ省中定員ノ人ヲ使用スルハ各省大臣ノ權内トス
  - 一 各省ニ試験ヲ經タル試補ヲ置キ省局ノ事務ヲ練習セシメ闕官アルヲ待チテ補任ス各省試補ノ數ハ閣議ノ定ムル所ニ依ル
  - 一 試補ニ關スル規則ハ追テ裁定ヲ經公布スヘシ

一官吏一省内ニ於テ二ツノ事務ヲ兼テシムルコトヲ得ルモ二省ニ涉リテ兼スルコトヲ得ス若シ止ムヲ得サルノ要用ニ依リテ兼官セシムルモ兼官ハ一年ヲ過クルコトヲ得ス

一他省ニ涉リテ兼官スルモノハ兼スル所ノ官俸三分ノ一ヲ増給スヘシ但武官ニシテ文官ニ任スルハ此例外タリ

以上ハ官制ノ綱領トス各省案成ルノ後裁可ヲ經一定公布スル所アルヘシ

奏任以上ハ官ニ職權アリテ各機關ノ一部ニ當ル者ナリ屬官ハ使用ヲ受ル者ナリ從前官制ノ區別明ナラスシテ雇等外ノ年ヲ經タル者ハ進テ屬官ニ昇リ屬官ノ年資ヲ經タル者ハ進テ奏任ニ列ス是レ試験法ナキノ致ス所ニ由ル今既ニ試験法ヲ定ムルトキハ凡ソ奏任ノ官ハ必ス高等試験ヲ經ル者ニ限り屬官ノ年勞ヲ積ム者ハ漸クニ其俸給ヲ増シ奏任初等官即現セト相匹等セシムルコトヲ得ヘシ其昇テ奏任トナス

ニ至テハ必異常功績アリテ大臣ヨリ狀ヲ具ヘ奏請シ又ハ高等試験ヲ經ル者ニ限ルヘシ此皆冗濫ヲ防クノ道ナリ

明治四年ニ官等ヲ定メテ以來俸給ヲシテ官等ト相配當セシメ以テ才ヲ使フノ道ヲ狹限シタリ今之ヲ改正シ凡ソ何ノ官ヲ論セス試験ニ由テ進ム者ハ各官繁簡ニ從ヒ各數等俸ヲ定メ次第ニ陞テ增俸ヲ得セシムヘシ

本項俸給ニ關スル規則ハ追テ閣議ノ後裁可ヲ經テ公布スル所アルヘシ

二選敍ノ事

選敍ノ法未タ定マラスシテ人各知ル所ヲ舉ク而シテ成學ノ士或ハ其進ム所ヲ失フ此レ皆制度ノ未タ備ラサル者ニシテ勢ノ免レサル所ナリ今官制一タヒ定マリ官仕限アルニ及テ選敍ノ法仍ホ設ケサルトキハ情弊ノ至ル所其失ニ堪ヘス而シテ行政部局其人ヲ得ルニ由ナカラ

ントス

選彼ノ法ヲ行フニハ事創始ニ屬スルヲ以テ其規則節目ノ詳ナルハ委員ヲシテ審査セシメ閣議ヲ經ルノ後成案トナシ裁可ヲ請フヘシ今其大要ヲ擧ケテ以テ標準ヲ示ス

第一 仕進ハ試験ニ由ラシムル事

第二 試験ニ學術試験ト普通試験ヲ分ツ事

第三 學術試験ニ初等試験ト高等試験ヲ分ツ事

第四 學術試験普通試験ノ外ニ專科試験ヲ設クル事會計官定ハ記簿  
法ヲ試驗シ外  
官吏ハ外國語學ヲ試驗シ  
其他技術ヲ試驗スルノ類

第五 試験人ハ定リタル試験科目ノ外ニ隨意ニ其學フ所ノ專門學ノ

試験ヲ受クルコトヲ得セシメ試験委員ニ於テ他ノ科目ト斟酌

シテ之ヲ采取シ其優等ナル者ハ別ニ優等證ヲ付シ以テオヲ試

ミルニ遺漏ナカラシムル事

第六 内閣中ニ試験委員ヲ設クル事

第七 各省ニ許可ヲ得テ設クル專科試験法ハ試験委員ト各省大臣ト

ノ間ニ叶議制定セシムル事

第八 試験ニ依リ進ムヘキ官吏ノ出身ハ年齡性行健全才能ノ四件ヲ

合セテ共ニ試験委員ノ審査ヲ經然ル後選用スル事

第九 學術試験合格者ハ一定ノ期限内試験補トナシ事務ヲ見習シメ又

ハ候補簿ニ登記スル事

第十 現勤判任官ヨリ奏任ニ昇ル者ハ少クトモ初等學術試験ヲ經セ

シムル事

第十一 判任ノ缺官又ハ需要アルトキハ普通試験ヲ行ヒ選用スル事

第十二 現勤等外及雇ヨリ等内官又ハ本官ニ任スル者其判任官ハ皆

普通試験ヲ經セシムル事但特ニ一藝アル  
者ハ選用ヲ許ス

第十三 現勤判任及准奏判任御用掛雇等外官ニシテ學術試験ヲ請フ

者ハ其情願ニ任スル事

第十四 試験委員ノ紀律ヲ嚴ニシ其公正ヲ保タシムル事

第十五 地方ノ屬官ヲ試験スルハ別段ノ方法ニ依ル事

右ハ其策略ノ目的ヲ定ムル者ニシテ此レヲ實行スルニ至テハ更ニ委員ヲ命シ精確ノ審査ヲ經セシメントス

### 三、繁文ヲ省ク事

維新ノ後舊ヲ變シ新ニ就クノ際下司ノ上司ニ稟請シ命ヲ得テ始メテ施行スルヲ例トシ細大多端往復繰ルカ如ク相因テ一ノ慣習ヲ成シ一令出ルコトニ疑問百出經伺ノ文簿積テ堆ヲ爲シ往々半年或ハ一年ニシテ始メテ定マル此レ從前各省及太政官ノ事務繁劇官吏冗多ナル所以ニシテ始メハ已ムヲ得サルノ勢ニ出テ終リニ因習ノ弊ニ堪ヘサル者ナリ文書繁多ノ弊ハ

第一 事務ヲ掩滯シテ疏通便捷ナラサラシメ公私ノ障害タリ

第二 官吏ヲ冗多ナラシム

第三 一部ヲ擔任スルノ官僚ヲシテ文書ニ倚賴シテ責任ノ意ヲ輕カラシム

今此弊ヲ除カントセハ左ノ方法ニ依ルヘシ

第一 凡ソ布告ノ法律ハ疑問ナカラシムル爲ニ其説明ヲ要スル者ハ可成説明書ヲ附シ各官廳ニ達スル事

第二 府縣長官及其他一局部ノ長タル者ハ法律命令ヲ施行スルニ付テ其明文アル者ニ付經伺シテ指令ヲ請フコトヲ得ス其明文ナキ者モ實際ノ事務ヲ延滞セサラシムル爲ニハ法律ノ精神ニ由リ處分施行スルヲ以テ當然トナス事

其他公文ノ底滯シテ或ハ歲月ヲ經過シ緩慢ニシテ敏活ナラサルハ施政ノ大弊ニシテ公私ノ病患此レヨリ大ナルハナシ今此ヲ救フノ要領ハ左ノ數點ニ外ナラサルヘシ

- 第一 文書受付往復ノ程限ヲ設ケ事ノ輕重緩急ニ從ヒ相當ノ期日ヲ定メ稽滯ヲ以テ過失トシ主任ノ官吏其責ニ任セシムル事
  - 第二 事務ノ各局課ニ關涉スル者ハ各局課ノ間或ハ會議法ヲ設ケ或ハ主任官互ニ面議ヲ行ヒ議決ノ即時ニ捺印シ從前ノ回覽法ニ換ヘ異議附箋ノ煩ヲ除ク事
  - 第三 文書ニ記録ノ要用ト不要トヲ分テ其不要ナル者ハ件銘日時ヲ日記ニ登錄スルニ止メ原文ノ謄寫ヲナサ、ル事
  - 第四 各局長ハ每週一次又ハ二次其局ノ文書往復ノ簿冊ヲ査閲シ稽滯ヲ檢明シ各省次官ハ毎月一次又ハ二次其省ノ文書往復ノ簿冊ヲ査閲シ稽滯ヲ檢明スルノ類ノ方法ヲ行フ事
  - 第五 各局長以下ハ大臣又ハ次官ノ命ナクシテ定期ノ外文書ヲ留置クノ權ナキ事
- 以上ハ其大概ヲ畧說スルニ止マル者ニシテ其實施ノ順序節目ニ至テ

ハ固ヨリ各省ノ便宜ニ屬シ各省大臣其規程ヲ設クルノ權内ニ在ル者タリ但タ此事各省ノ整理ニ關シ可成均一ヲ要スルヲ以テ茲ニ之ヲ提舉シテ以テ標準ヲ示ス

#### 四 元費ヲ節スル事

凡ソ行政官務整頓嚴確ナルノ國ハ其經費必節省ナラサルハナシ蓋富強ノ道ハ多費ニ在ラスシテ施ス所其實ヲ務メ緩急其要ヲ得テ以テ成效ヲ永久ニ期スルニ在リ維新以來歲出ノ歲ヲ逐テ増加スルハ内外政務ノ多端ナル實ニ已ムコトヲ得サルニ由ルト雖モ明治六年ノ會計表ニ據リ此レヲ昨十七年度ノ歲出ト比較スルニ幾ント四分ノ一ヲ増加シタリ又俸給一項ヲ以テ之ヲ言フニ明治六年ノ概數ニ據リ之ヲ十七年度ニ比較スルニ即チ十分ノ六ヲ増加シ又九年十年度ノ概數ニ據リ之ヲ十六七年度ニ比較スルニ即チ三分ノ一ヲ増加シタリ實務ノ舉カル所成果ノ得ル所未タ經費ノ遞増ト相比例スルニ至ラス今宜シク務

メテ制減ヲ行ヒ各省ノ定額ハ内閣ニ於テ事物ノ緩急ヲ料リ之ヲ總判  
畫定シ越ユヘカラサルノ限ヲ爲シ各省大臣ハ全局ノ平衡ヲ顧ミ以テ  
各、其省ノ費用ヲ節省スヘシ  
奏任以上ハ官ニ定員アリ判任以下ハ各省大臣定額俸給項内ニ於テ便  
宜ニ使用スルコトヲ得今變更ノ際一タヒ節減ヲ行ヒ更ニ永久ニ繼續  
シテ濫弊ヲ防制スル爲ニ各省院府縣廳ハ毎月官吏ノ員數并俸給ヲ統  
計シ翌月十日迄ニ之ヲ検査院ニ報告セシメ検査院ニ於テ其制ヲ踰エ  
限ニ過ル者ヲ檢出シタルトキハ内閣總理大臣ニ上申シテ處分ヲ請ハ  
シムヘシ  
検査院ハ單ニ會計出入ノ検査ニ止マルノミナラス需費ノ成績ニ就テ  
事業ノ得失ヲ察シ各廳内部ノ處務ニ注目シ務メテ儉省確實ノ方法ヲ  
計畫シテ内閣ニ提出シ以テ行政各部ノ注意ヲ促スコトヲ得セシムヘ  
シ

各省ノ事務互相重複スル者ハ内閣ヲ經テ其一ヲ減省スヘシ

五、規律ヲ嚴ニスル事

官吏ノ品格ハ實ニ政府ノ威信ニ係リ官吏ノ忠順慎密勤勉清廉ハ政務  
ノ得失ニ於テ密接ノ關聯ヲ相爲ス此レ宜シク其規律ヲ嚴ニシテ秩序  
ヲ正シクシ一ハ以テ官務ヲ整理シ一ハ以テ忠順廉潔ノ風ヲ維持セサ  
ルヘカラス九年ニ官吏懲戒例ヲ設ケテ而シテ監督審理ノ方法備ラス  
未タ具文ノ法タルコトヲ免レス將來懲戒裁判ヲ設ケ懲戒及罷免ノ規  
則ヲ定メ以テ官紀ヲ肅シ且以テ官吏ノ位置面目ヲ保護スルコト實ニ  
止ムヘカラサルノ必要タリ但タ此事他ノ官制ノ細目ト相關係スルヲ  
以テ現時未タ舉行シ易カラサル者アリ抑モ官吏ノ規律ヲ張リ其品格  
ヲ保ツヘ以テ一日モ緩慢ニ付スヘカラス各省大臣ニ在リテ宜シク  
詔意ヲ奉體シ各其權内ニ於テ振勵監督シ凡ソ官吏忠順誠實ノ大義ニ  
乖キ法律ヲ恪守セス機事ニ慎重ナラス務ヲ執テ勤勉ナラサル者其情



狀ニ從ヒ之ヲ告戒譴責シ或ハ之ヲ懲罰スヘク贈遺ノ禁ハ細大ニ及ホシ職務曠廢ノ戒メハ其有意無心ヲ問ハス老朽務メニ堪ヘサル者ハ其官ヲ退カシムヘク務メテ核實嚴明ニシテ効力アルコトヲ要スヘシ其規則ニ涉ル者ハ更ニ裁ヲ經テ制定スル所アルヘシ

當時内閣ヲ組織セルモノハ内閣總理大臣及ヒ内務、外務、大藏、文部、工部、陸軍、海軍、司法、農商務大臣ニシテ、工部省ハ同日廢セラレテ逕信省之ニ代リ、又宮内大臣ハ各省大臣ト並ヒテ内閣ニ列スルコトナシ、今左ニ宮中、内閣及ヒ各省ノ官制要領ヲ示ス

甲、宮中

第一、内大臣及ヒ宮中顧問官

此ノ二官ハ共ニ明治十八年十二月太政官達第六十八號ヲ以テ設置セラレタルモノニシテ、内大臣ハ御璽、國璽ヲ尙藏シ常侍、輔弼シ及ヒ宮中顧問官ノ議事ヲ總提ス、宮中顧問官ハ十五人トシ帝室ノ

宮中  
内大臣及ヒ宮中  
顧問官

宮内省官制

典範儀式ニ係ル事件ニ付諮詢ニ奉對シ意見ヲ具上スルモノトス  
第二宮内省(明治二十二年宮内省達第十號制定ノ官制ニ依ル)

宮内大臣ハ帝室ニ關スル一切ノ事務ヲ管理シ、兼テ華族ヲ監督スルモノニシテ、皇室典範及ヒ法律勅令ノ範圍内ニ於テ帝室ニ關スル諸法規ヲ制定シ警視總監、北海道及ヒ地方長官ニ示命シ及ヒ人民ニ命令告示スルコトヲ得ヘシ、而シテ宮内省ニ於ケル事務ノ分課ヲ示セハ侍從職、式部職、皇后宮職、内藏寮、御料局、爵位局、大膳職、主殿寮、宮殿及ヒ其ノ附屬物件ノ保管並ニ皇宮警察、圖書寮、内匠寮、主馬寮、諸陵寮、侍醫局、主獵局、調度局、宮中用需ノ供給運搬、帝室會計審査局トス

内閣官制

乙、内閣(明治二十二年十二月勅令第三百三十五號制定ノ官制ニ依ル)  
國務大臣ハ憲法ノ規定ニ由リ天皇ヲ輔弼シ國務ニ關スル詔勅ニ副署スヘキモノトス但シ副署ニ付キテハ法律及ヒ一般行政ニ關スル

勅令ハ内閣總理大臣及ヒ主任ノ各省大臣、各省主任ノ行政事務ニ關スル勅令ハ主任ノ各省大臣之ニ副署スヘキモノトス、而シテ内閣ハ各省大臣ヲ以テ組織シ、内閣總理大臣之カ首班トナリ、一定ノ事項ニ付キテハ協議ヲ以テ輔弼ノ責ヲ盡ス、機關トナルト同時ニ、又一定ノ事項ニ付キテハ行政機關タルノ權限ヲ有ス、即チ閣議ヲ經ヘキ事項ヲ舉クレハ法律案、豫算及ヒ決算案、豫算外ノ支出、外國條約、官制、法律施行ノ勅令、人民ノ請願ニ對スル處分、高等ナル官吏ノ任命及ヒ進退、諸省間ノ權限爭議其ノ他重要ノ行政事務ニシテ、主任大臣ハ又任意ノ事件ヲ閣議ニ提出スルヲ得ヘシ、但シ軍機ニ關スル事項ハ勅命ニ由ルノ外閣議ヲ經ルコトナシ

内閣總理大臣ハ内閣ノ首班タルト同時ニ、單獨官府トシテ勅旨ヲ承ク、行政各部ノ統一ヲ保チ、必要ト認ムルトキハ各省大臣ノ命令又ハ處分ヲ中止セシメテ勅裁ヲ請フコトヲ得、又賞勳恩給、官報、法制ノ諸

各省官制通則

局高等文官試驗委員及ヒ臨時ニ設ケラレタル各種調査委員會ノ如キモノヲ監督ス

丙各省（明治二十六年十月勅令第二百二十二號公布ノ通則ニ依ル）

第一、各省官制通則 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付キテ法律、勅令ノ範圍内ニ於テ命令ヲ發スルコトヲ得、又地方長官ニ訓令シ其ノ命令又ハ處分ノ違法越權又ハ公益ヲ害スルモノト認ムルモノヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得、其ノ部下ノ官吏ヲ監督シ判任官ノ進退ヲ專行ス、各省ニハ次官、局長、參事官、審議立案ヲ司トル（祕書官、機密事務ヲ司トル）書記官及屬官ヲ置キ、事務取扱ノ部署ヲ分チテ大臣官房及諸局課ヲ設ク、其ノ省ノ事務ノ全般ニ亘ルモノハ大臣官房ニ於テ處理セシメ、特別ノ事務ハ各局ヲシテ處理セシム

第二、各省特別ノ事務

陸海軍、外務、文部、司法ノ諸省ハ其ノ事務ノ範圍概シテ一定スルヲ

以テ之ヲ略シ、此ニハ左ノ諸省ノ事務分配ヲ示ス

大藏省（明治三十年四月勅令第二百十號公布ノ官制ニ依ル）

大藏大臣ハ政府ノ財務ヲ總轄シ會計、出納、租稅、國債、貨幣、預金、保管物、政府ノ印刷物及一個ノ官有鐵山ニ關スル事務ヲ管理シ、地方自治體ノ財政ヲ監督ス

內務省（明治二十六年十月勅令第二百二十七號公布ノ官制ニ依ル）

內務大臣ハ地方行政、議員選舉、警察、監獄、土木、衛生、地理、社寺、出版、版權、戶籍、恤救ニ關スル事務ヲ管理シ、中央衛生會、警視總監、北海道及地方長官ヲ監督ス

農商務省（明治三十年六月勅令第八十三號公布ノ官制ニ依ル）

農商務大臣ハ農工商、水產、牧畜、林野、鑛山、發明、意匠、商標及地質ニ關スル事務ヲ管理ス

逓信省（明治三十年八月勅令第二百六十七號制定ノ官制ニ依ル）

逓信大臣ハ鐵道、郵便、電信、船舶、海員、航海、航路、標識、郵便爲替、郵便貯金ヲ管理シ、水陸運輸及電氣事業ヲ監督ス

### 第二節 地方行政

#### 地方行政ノ沿革

地方行政ノ制度ハ成務帝ノ時山河ヲ界シ阡陌ヲ分チ國郡ニ長ヲ立テ縣邑ニ主ヲ置キ爾來支那法制ニ則トルニ及ンテ五十戸ヲ一里トシ二三里以上二十里以下ヲ合シテ郡トシ郡ノ上ニ國ヲ設ケ國司、郡司、里長ヲ置キ各、其ノ長官トシ隣保相接セルモノ五戸ヲ以テ一組合トシ内ハ互ニ相扶持シ相監督シ外ハ國家ニ對シテ一種ノ連帶責任ヲ有セシメ以テ國家ノ福利ヲ増進セシメタリ、封建時代ニ及ンテ德川氏ハ重要ナル地方ヲ其ノ直轄即チ天領ト稱シ其ノ他ヲ諸侯ニ分チ之ヲ藩トシ諸侯ヲシテ其ノ領土内ニ自主ノ政ヲ行ハシメシカ故ニ其ノ制度區々ニ涉レリ然レトモ德川氏カ其ノ直轄地ニ行ヒシ制度ニ依レハ重要ノ市

街地ニ町奉行郡ニ代官ヲ置キ町村行政ノ監督稅務及ヒ司法事務ニ當ラシメ町行政ニシテ直接國家ニ關係アル警察事務ノ如キ重要事件ヲ除ク外其ノ他ノ事件ハ町人ヨリ任命シタル吏員ニ委シ一町村ノ事務ハ地主ヲシテ之ヲ處理セシメタリ五人組ノ制ハ上古ノ制ト略ホ同一ニテ之カ組頭ヲ置キ以テ諸般ノ事務ヲ處理セシメ村落ニ於テハ庄屋ナルモノヲ以テ一切ノ村行政ヲ處理セシム庄屋ニ世襲ノモノアリ一代限ノモノアリ年番勤メノモノアリ人民ノ公選ニ由ルモノアリ而シテ五人組ノ組頭ハ庄屋ノ補助役トナル實ニ庄屋組頭ハ一村ノ取締租稅ノ徵收等國家ノ行政事務ヲ施行シ道路堤防ノ修築等町村公共事務ヲ處理ス又百姓代ナルモノアリ總百姓ノ代人ニシテ庄屋組頭ノ專斷壓制ヲ監視ス時ニ或ハ村内重要ノ件其ノ他費用ノ賦課ニ關シ總百姓會合シ協議ヲ以テ決スル地方アリ屢應三年大政維新舊來ノ面目ヲ一新ス然リト雖モ地方行政ノ制度ニ至リテハ舊來ノ積習遽ニ變スヘカ

ラサルモノアリ仍テ一定ノ規定アルモノハ外舊慣ニ仍リ之ヲ處理シタルモノト謂フヘキナリ降リテ明治四年七月廢藩置縣トナリ府縣行政統一シ中央畫一ノ制茲ニ始メテ成立シ同四年四月郡區町村ヲ區畫シテ大小區ト爲シ每區ニ戶長並ニ副戶長ヲ置キ明治五年四月庄屋名主年寄等ノ稱ヲ廢シ戶長副戶長ト改稱シ同年十月各地方土地ノ便宜ニ由リ一區ニ區長一人小區ニ副戶長等ヲ置クヲ許シ明治九年地方官ヲシテ司法事務ヲ兼掌セシメサルニ至リ始メテ司法ト行政トノ分離ト爲ル明治十一年七月府縣會規則ヲ制定シ同十一年七月府縣民費ノ名ヲ以テ徵收セルモノヲ改メテ地方稅トシ即チ地方稅規則ヲ制定シ同十一年七月郡區町村編制法ヲ發布シ以テ府縣ニ其ノ代議機關ヲ設ケ其ノ財政ノ基礎ヲ立テ郡區町村ノ行政區畫ヲ明カニシ同十一年七月地方ノ便宜ニ從テ町村會議又ハ區會議ノ開設ヲ許シ明治十三年四月區町村會法ヲ發布ス是ニ於テ現今ノ地方行政ノ基礎確定ス明治十

國ノ行政

九年七月大ニ地方官官制ヲ改正シテ以テ地方官ノ職責ヲ明カニシ中  
央集權ノ弊ヲ避ケ明治二十一年四月市町村制ヲ發布シテ以テ成文法  
上市町村ノ自治機能ヲ與ヘ明治二十三年五月ニ至リ府縣制郡制ヲ以  
テ府縣郡ノ自治機能ヲ規定ス是ニ於テ我邦地方行政組織ノ一變遷ヲ  
見ルニ至レリ而シテ琉球島ニ至リテハ明治十二年四月藩制ヲ廢シ明  
治二十四年司法ト行政事務トヲ分離セシム北海道沖繩及ヒ臺灣ニ至  
リテハ内地ト其ノ趣ヲ同ウセス故ニ特別ノ行政組織ヲ制定ス明治二  
十九年三月沖繩縣區制ヲ發布ス亦法制上ノ一進歩ナリトス同三十年  
五月北海道ニ於ケル自治制ヲ發布ス同三十二年三月府縣制郡制ヲ改  
定ス

第一款 國ノ行政

第一項 府縣

府縣ノ沿革

慶應三年十二月徳川氏大政ヲ奉還スルヤ明治元年正月政府ハ舊幕府  
領地ヲ直隸ト爲スノ令ヲ布キ其ノ重要ナル土地ニ裁判所ヲ設ケ總督  
ヲ置キ一切ノ事項ヲ處理セシメ裁判所ヲ設ケサル地方ハ適宜各藩ニ  
委任シ之カ行政ヲ執行セシメタリ尋テ同年閏四月政牒書ヲ發布シ府  
藩縣ヲ以テ地方行政ノ區畫トシ地方官ヲ分テ三官トシタリ而シテ府  
縣ハ實ニ徳川氏ノ直轄地タリシモノニ屬シ藩ハ諸侯ノ領地ニ屬セシ  
モノトス然レトモ府ト云ヒ縣ト云フモ其ノ實躰ニ至リテハ異ナルコ  
トナク唯其ノ職員ノ組織ニ於テ規模大小ノ差アルノミ又當時地方長  
官ノ職權タルヤ人民ヲ撫育シ生産ノ富殖ヲ獎勵シ教化ヲ敦シ租稅ヲ  
收メ賦役ヲ督シ賞刑ヲ知シ府縣郷兵ヲ監スル等單ニ行政事項ノミナ  
ラス司法、軍務、民政等一切ノ事件ヲ處理シ藩ニ於テハ諸侯ヲシテ任意  
自主權ヲ以テ地方行政ヲ施行セシメタリ降テ同年十月藩治職制ヲ定  
メ各藩ニ令シテ一定ノ職員ヲ置カシメ之ヲ選任スルニハ門地ニ拘ヘ

ラサルヲ以テ旨トシ重要ナル職員ノ進退ハ之ヲ報告セシメ且ツ重要ナル事務ノ分課ハ適宜之ヲ規定シテ報告セシム是ニ於テ地方行政ハ府藩縣ノ三治ニ歸シ茲ニ行政統一ト行政監督ノ端ヲ啓ク

明治二年二月府縣施政順序ヲ規定シ府縣事務ノ概目ト施政ノ方針トヲ指示シ同年六月各藩主ヲシテ其ノ領地ヲ返還セシメ更ニ舊藩主ヲ其ノ藩ノ知事ニ任シ同年七月職員令ヲ定メ以テ地方長官ノ職權ヲ明カニシ府藩縣三治ノ制茲ニ確定ス又同年同月府縣奉職規則ヲ定メ府縣行政ノ項目ヲ示シ專決處分スヘキモノト主務省ニ稟申指揮ヲ受クヘキモノトヲ區別シ重要ナル命令ノ發布ハ其ノ主務省ニ伺出テ指揮ヲ受クヘキモノトス然レトモ封建ノ餘習尙ホ未タ全ク除ク能ハス唯漸々其ノ權限ヲ限縮シ其ノ監督ヲ嚴ニシタルノミ

明治四年七月藩ヲ廢シ縣ヲ置ク全國行政區畫府縣ノ二治ニ歸ス尋テ同年十月府縣官制ヲ定ム降テ同年十一月縣治條例ヲ發布シ縣治職制

府藩縣

府縣職制并ニ事務章程ヲ設ク

ト縣治事務章程ヲ規定シ人民ヲ救督保護シ條令布告ヲ遵奉施行シ租稅ヲ收メ賦役ヲ督シ賞刑ヲ判シ非常ノ場合ニ於テ鎮臺分營ニ出兵ヲ請フ等ノ權ヲ有セシメ且ツ其ノ裁斷ヲ以テ命令若クハ處分シ得ヘキ事項ト主務省ニ稟議處分スヘキモノトヲ分チ地方官ノ權限ヲ明確ニシタリ是ニ於テ封建ノ制全ク跡ヲ絶ツニ至レリ

明治八年十一月太政官第二百三號達ヲ以テ府縣職制并ニ事務章程ヲ設ク憲法典令ヲ遵奉シ部内ノ安寧部民ノ保護徵稅勸業教育等ノ事ヲ掌トリ奏任官ノ功過ヲ具狀シ判任以下ノ任免ヲ專行シ非常ノ際ハ鎮臺ニ稟議スル等ノ職權ヲ有セシメ又其ノ管掌事務ニシテ主務ノ各省ニ稟議シテ處分スヘキモノト專任施行スヘキモノトヲ區別シ其ノ節目ヲ詳記シテ以テ之ヲ明確ニス而シテ明治十年一月布告第十三號ヲ以テ各府縣廳ヨリ發スル布達ニハ壹圓五拾錢以內ノ罰金ヲ科スルコト、ナリシカ同十四年十二月布告第六十二號ヲ以テ廢止セラル

府縣官職制ヲ定

明治十一年七月太政官第三十二號達ヲ以テ府縣官職制ヲ定ム今茲ニ其ノ要點ヲ舉クレハ地方長官ハ部内行政事務ヲ總理シ法律及ヒ政府ノ命令ヲ執行スル爲ニ必要ナリトスルトキハ實施ノ順序ヲ設ケテ部内ニ布達シ及ヒ適宜處分ヲ許サレタル事件ニ就キテハ規則ヲ發布スルノ權ヲ有シ又是等ハ直チニ各省主務ノ卿ニ報告スヘキノ義務アリトシ若シ法律若クハ命令ニ背キ權限ヲ超エタルトキハ太政大臣若クハ各省主務ノ卿ヨリ之カ取消ヲ命スルモノトス又地方稅ヲ徵收シテ部内ノ支費ニ充ツルコトヲ得府縣會アル地方ニ於テハ之ヲ會議ニ付スヘキモノトシタリ府縣會ノ召集會議ノ中止其ノ他決議ノ後之ヲ認可シ又ハ之ヲ認可セサルノ權限ヲ有ス且ツ主務省ニ稟申シテ處分スヘキ事件ヲ列舉ス是ニ於テ地方長官ノ職權益、明確トナリ同年七月第十八號布告ヲ以テ府縣會規則ヲ制定シ同年七月第十九號布告ヲ以テ地方稅規則ノ發布アリ是ニ於テ地方ノ事情ヲ裁酌シテ內務卿ノ決定

地方官官制ヲ定

ニヨリ漸次各府縣ニ自治制ヲ布クノ基礎ヲ立ツ是ニ於テ地方長官ハ國ノ行政機關タルト同時ニ其ノ府縣自治體ノ行政機關タルノ形ヲ爲スニ至レリ而シテ明治十三年七月布告第三十七號第四百三十條ニ依リ地方長官ノ發スル命令ニハ明治十五年一月一日ヨリ違警罪ノ制裁ヲ附スルニ至レリ又明治十四年三月太政官達第十五號及ヒ第十九號ヲ以テ監獄事務ニ關シテ典獄副典獄ヲ置キ地方長官ノ指揮監督ヲ受ケテ典獄ノ事務ヲ總理セシム同年十一月太政官達第九十八號及ヒ第九十九號ヲ以テ警部長ヲ置キ地方長官ノ命ヲ受ケ其ノ府縣警察上一切ノ事務ヲ調理セシメ國事警察ニ付キテハ直チニ內務卿ノ命令ヲ奉シ其ノ事情ヲ具狀スルコトヲ得セシム同十七年五月太政官第四十七號及ヒ第四十八號ヲ以テ收稅長ヲ置キ徵稅ヲ總理セシム明治十九年七月勅令第五十四號ヲ以テ地方官官制ヲ定ム地方長官ハ法令ノ範圍内ニ於テ一般ニ府縣令ヲ發スルコトヲ得然レトモ公益ヲ

害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯ストキハ主務大臣之ヲ取消シ又ハ中止ヲ命シ所部ノ官吏ヲ統督懲戒シ奏任官ノ功過及ヒ懲戒ハ内務大臣及ヒ各主務大臣ニ具狀シ判任以下ハ任免共ニ之ヲ專行ス其ノ他技術官ヲ置キ非常ノ時出兵ヲ請フノ權等ヲ明示ス又從來官制ヲ以テ主務大臣ノ指揮ヲ受ケテ施行スヘキ事項ヲ列擧スルノ方法ヲ廢ス而シテ地方長官ノ下書記官、收稅長、警部長、典獄其ノ他ノ吏員ヲ付シ部署ヲ定メテ事務ヲ分掌セシム即チ内務行政事項ニ第一部第二部收稅事務ニ收稅部警察事項ニ警察本部ノ三部署ヲ定メ之ヲ分掌セシム其ノ部署内ノ分課ハ適宜地方長官ニ於テ之ヲ設クルコトヲ得ルモノトス監獄事項ハ第二部ニ隸屬シ典獄之ヲ分掌ス又各郡區ニ警察署一個所ヲ置キ其ノ下ニ適宜警察分署ヲ配置ス

明治二十二年五月勅令第六十三號ヲ以テ各郡區役所所在地ニ收稅部出張所ヲ設ケテ事務ヲ取扱ハシム

地方官官制ノ改正

地方官官制再改正セラル

明治二十三年十月勅令第二百二十五號ヲ以テ地方官官制ヲ改正ス其ノ要點ヲ擧クレハ第一部第二部ヲ廢シテ内務部ト監獄署ヲ置キ收稅部ヲ廢シテ之ヲ直稅署、間稅署ノ二署トシ又參事官ヲ置キ知事ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ具シ及ヒ審査立案ヲ掌ラシメ又内務部各課長トナリ又ハ臨時部課ノ事務ヲ助ケシムル等ナリ而シテ同二十三年九月勅令第二百八號ヲ以テ地方長官ノ命令ハ一定ノ法式ニ據リ公布シタル後効力ヲ生スルモノトシ且ツ十圓以内ノ罰金若クハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得ルニ至リ更ニ地方行政ノ執行權ヲ強大ナラシメタリ

明治二十六年十月勅令第六十二號ヲ以テ地方官官制ヲ改正ス是レ即チ現行法ニシテ舊法ト格別ノ差異アルコトナシ又同二十九年十月勅令第三百三十七號ヲ以テ收稅部ヲ廢シ其ノ事務ハ大藏大臣ノ管轄ニ屬スル稅務管理局ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコト、ナレリ

以上ハ府縣ニ於ケル國ノ行政ニ關スル法令沿革ノ大要ヲ擧ケタルノ



ミ之ヲ要スルニ國ノ行政ノ執行者タル地方長官ノ職權始メハ甚ク漠然タリシカ數次ノ改正ヲ經テ益々明確トナリ世ノ進歩ト共ニ各種補助機關ノ發達ヲ促シタリ而シテ東京、北海道及ヒ臺灣ニ於テハ別ニ特例ヲ設ク今其ノ一般ノ制度ト異ナル沿革ノ大要ヲ述フヘシ

(イ) 警視廳

警視廳ノ沿革

明治七年一月太政官第六號達ヲ以テ警視廳ヲ置ク其ノ長官ヲシテ東京警察ノ事務ヲ總提シ其ノ事務ニ付テハ人民ニ命令スルコトヲ得セシム同八年十二月内務省乙第六十七號ヲ以テ東京府所轄ノ監獄ニ關スル事項ヲ管セシメ同十年一月太政官達第十五號及ヒ第七號ヲ以テ警視廳ヲ廢シ内務省ニ屬セシメ大警視ヲシテ直管執行セシム同十四年一月太政官達第一號及ヒ第三號ヲ以テ再々ヒ警視廳ヲ置キ職制並ニ事務章程ヲ定メ同十八年七月太政官達第三十四號ヲ以テ更ニ之

ヲ改正シ同十九年五月勅令第四十二號ヲ以テ官制ヲ定メ總監ヲ置キ東京府下ノ警察消防及ヒ監獄ノ事務ヲ總轄セシメ其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍内ニ於テ警察令ヲ發スル等ノ職權ヲ有シ同二十四年四月勅令第三十四號ヲ以テ官制ヲ改正シ同二十六年十月勅令第五百十九號ヲ以テ警視廳官制ヲ改定ス是レ即チ現行官制ナリ同二十九年其ノ規定ノ幾部ヲ改正スト雖モ要スルニ東京ニ於ケル警察及ヒ監獄事務ハ地方長官ニ委セス別ニ警視廳ヲ置キ總監ヲシテ之ヲ管掌セシム

(ロ) 北海道

北海道ノ沿革

明治二年七月開拓使ヲ置キ其ノ長官ヲ各省卿ト同列ニ置キ諸地開拓ヲ總判セシメタリ同八年十一月太政官達第二百十七號ヲ以テ開拓使職制並ニ事務章程ヲ定メ北海道并ニ屬島ヲ四大部ニ分畫シ本廳ノ外

ニ支廳ヲ置キ長官ヲシテ一切ノ事務ヲ總判セシメ事務章程ヲ以テ上奏裁可ヲ經テ施行スヘキモノト專決處分スヘキ事件ヲ明記ス是レヨリ先キ同年三月布告第三十七號ヲ以テ屯田兵ヲ置キ開拓使ニ隸屬セシム同年十二月太政官達第二百十七號ヲ以テ司法事務ニ關シテハ一定ノ地域ヲ除ク外ハ終身懲役死罪ニ非サル犯罪ハ皆之ヲ處斷シ得ルモノトス同十三年十二月太政官達第六十號ヲ以テ開拓使職制並ニ事務章程ヲ改定シ開拓使ハ北海道開拓ノ事務ヲ管理スルノ所トシ長官ヲシテ百般ノ事務ヲ總理セシメ事務章程ヲ以テ上奏裁可ヲ經テ然後施行スヘキ事件ヲ列舉ス同十五年二月布告第八號及ヒ第十五號ヲ以テ開拓使ヲ廢シ北海道ニ三縣ヲ置キ内地ト其ノ制度ヲ同ウセリ然レトモ同年二月布告第九號ヲ以テ從來北海道ニ施行セサル法律規則ハ亦之ヲ施行セサルモノトシ尙ホ同月布告第十四號ヲ以テ司法ニ關スル裁判事務ハ裁判官ヲシテ管理セシムルニ至レリ同十九年一月布

告第一號ヲ以テ各廳分治ノ制ヲ改メ北海道廳及ヒ支廳ヲ置キ全道ノ施政及ヒ集治監屯田兵開墾授産ノ事務ヲ統理セシム同年一月太政官達第六號ヲ以テ長官ヲ置キ北海道拓地殖民ニ關スル一切ノ事務ヲ總判シ屯田兵開墾授産ノ事務ヲ監督セシム又同年十二月勅令第八十三號閣令第三十七號ヲ以テ官制ヲ改正シ支廳ヲ廢ス長官ハ内閣總理大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ事務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ受ケ北海道ノ拓地殖民及ヒ警察ニ關スル一切ノ事務ヲ統理シ屯田兵開墾授産ノ事ヲ監督セシム又職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍内ニ於テ廳令ヲ發スル等ノ權ヲ有ス同二十三年七月勅令第一百十九號ヲ以テ北海道廳官制ヲ改正シ長官ヲ内務大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ主務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承クルモノトシテ府縣知事ト同等ノ位地ニ立タシメ法律命令ヲ執行シ北海道ノ拓地殖民并都内ノ行政及ヒ警察ニ關スル一切ノ事務ヲ統理セシメ屯田兵ノ開墾授産

ノ事ヲ監督セシム同二十四年四月勅令第百一十一號ヲ以テ官制ヲ改定ス同三十年十月勅令第三百九十二號及ヒ第三百九十五號ヲ以テ官制ヲ改正ス是レ即チ現行ノ官制ナリトス其ノ要點ヲ擧クレハ管内ヲ數區ニ區畫シ支廳ヲ置キ支廳長ハ長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部内ニ施行シ部内ノ行政事務ヲ掌理スル等内地ノ郡長ト職權ヲ同クス要スルニ北海道ハ土地荒漠住民稀少ニシテ一般法令中施行スルヲ得サルモノ多シ從テ道廳ノ組織ハ概シテ府縣廳ト同シト雖モ其ノ規模稍大ニシテ其ノ長官ノ權限モ亦從テ大ナリトス

(ハ) 臺灣

明治二十九年三月勅令第八十八號ヲ以テ臺灣總督府條例ヲ定メ臺灣ニ總督ヲ置キ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ内閣總理大臣ノ監督ヲ受ケ諸般ノ政務ヲ統理セシム同年三月勅令第九十號ヲ以テ行政

臺灣施政ノ沿革

及ヒ司法ニ關スル事務ヲ整理セシムルカ爲ニ民政局ヲ置キ同年四月勅令第百十六號ヲ以テ陸海軍軍政及ヒ軍令ニ關スル事項ヲ掌ラシムル爲メ軍務局ヲ置ク同年五月律令第一號ヲ以テ民事刑事ノ裁判ヲ掌ラシムル爲ニ總督府法院ヲ設ク同年三月勅令第八十九號ヲ以テ法律ニ代ルヘキ命令ヲ議決シ亦特ニ必要ト認メタル事件ニ付キ諮詢スルカ爲メ臺灣總督府評議會ヲ組織シ又總督ハ府條例ニ依リ其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ禁錮二十五日又ハ罰金二十五圓以内ノ罰則ヲ附シ(第四條)其ノ管内ノ安寧秩序ヲ保持スルカ爲ニ必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得ルモノトス(第六條)同年三月法律第六十三號ヲ以テ明治二十九年ヨリ向フ三箇年間假リニ便宜ノ制ヲ立ツルコトヲ得而シテ現行ノ法律又ハ將來發布スル法律ニシテ特ニ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ指定スルモノトシ(第五條)總督ハ其ノ管内ニ法律ノ效力ヲ有スル命令ヲ發スル

ユトヲ得セシム但タ其ノ命令ハ臺灣總督府評議會ノ議決ヲ取り勅裁ヲ請フモノトシ(第二條)且ツ臨時緊急ノ場合ハ發布後直チニ勅裁ヲ請ヒ之ヲ臺灣總督府評議會ニ報告シ若シ勅裁ヲ得サルトキハ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ナキユトヲ公布スルモノトス(第四條)明治三十年五月勅令第五百二十二號ヲ以テ地方民政ノ機關トシテ六縣三廳ヲ置キ知事廳長ヲ各其ノ長官トシ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理セシメ其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ管内ニ縣令廳令ヲ發スル等ノ權ヲ有セシム又縣及ヒ廳ニ各參事ヲ置キ(第三十二條)地方行政事務ニ關シ知事廳長ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ヘ或ハ命ヲ承ケテ事務ニ從事セシム(第三十三條)又縣廳ノ下須要ノ地ニ辨務署ヲ置キ(第三十四條)辨務署ノ下ニ街庄社ヲ置キ辨務署長ノ職權ハ一二ヲ除ク外ハ郡長ノ權ニ同シ同三十年五月勅令第五百十七號ヲ以テ街庄社ニ其ノ長ヲ置ク亦戶長ノ職權ト同シ

## 第二項 郡

郡政ノ沿革

郡ハ維新前ニ在リテハ一ノ行政區畫ナリシカ明治五年ニ至リ消滅シ同年十月地方ノ便宜ニ由リ正副區長ヲ置クニ當リ數町村ヲ合シテ區ノ行政區畫ヲ設ケタリト雖モ區ノ管轄ハ必スシモ郡ノ區域ト合一シタルニ在ラス當時郡ハ地理上ノ名稱ニ過キサリシナリ明治十一年七月布告第十七號ヲ以テ郡區町村編制法ヲ發布シ區ヲ廢シテ郡ヲ置キ一郡若クハ數郡ニ郡長一名ヲ置ク(第三條)是ニ於テ郡ハ行政ノ區畫トナル三府五港其ノ他人民輻湊ノ地ハ別ニ一區トシ其ノ廣濶ナルモノハ區分シテ數區トナシ每區ニ區長ヲ置ク(第四條)同十一年七月太政官達第三十二號ヲ以テ府縣官職制ヲ定メ郡區長ハ事ヲ府知事縣令ニ受ケ法律命令ヲ郡區内ニ施行シ一郡區ノ事務ヲ總理シ法律命令又ハ規則ニ依テ委任セラレタル條件及ヒ特ニ分任セラレタル

條件ニ付キ便宜處分シテ後ニ報告スルコト、シ其ノ專行處分後知事ニ報告スヘキ件々ヲ規定シタリ

郡ニ關スル官制ハ此ノ後改正セラレタルモ其ノ職權ニ至リテハ大體異ナル所ナシ同十九年七月勅令第五十四號ヲ以テ郡長ハ其ノ法律命令若クハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ關シテ部内ニ告示ヲ發スルノ權ヲ與ヘ其ノ他ノ職權モ益々明確トナリ且ツ同時ニ一定ノ島地及ヒ勅令ヲ以テ指定スル島地ハ郡ニ編入セス島司ヲ置キテ其ノ島内ノ行政事務ヲ掌ラシム同二十三年十月勅令第二百二十五號ヲ以テ郡長ハ警察規則ヲ發スルコトヲ得ルモノトシ島司ノ權限モ是ニ至リテ郡長ト同シキニ至レリ同二十六年十月勅令第六十二號ヲ以テ郡長島司ヘ郡令島廳令ヲ發スルコトヲ得セシメ同年十月勅令第九十九號ヲ以テ其ノ公布ノ法式ヲ一定ス而シテ市街地ニ於ケル區長ハ市町村制施行ノ土地ニ在リテハ廢官トナレリ明治二十三年五月法律第三十六

號ヲ以テ制定ノ郡制實施セラル、ニ及ヒテ郡長ハ國ノ行政機關タルノ外郡ノ自治體ノ執行機關トナレリ(第五十六條)而シテ沖繩縣ニ於テハ明治二十九年三月勅令第十三號及ヒ第十四號ヲ以テ郡ノ行政區畫ヲ更定シ郡區長島司ヲ置ク

### 第三項 市町村

市町村行政ノ沿革

市町村ノ行政制度ハ維新ノ始メ舊來ノ慣例ニ仍リ市町村ノ役人ヲシテ國ノ行政ヲ處理セシメタリ明治四年四月戶籍法則ヲ布告シ戶籍事務ニ關シ戶長副戶長ヲ置キ專ラ之ヲ處理セシメタリト雖モ同五年三月大藏省伺ニヨリ其ノ他ノ事務ニ關シテハ從來ノ役人ニ取扱ハシメタルヲ以テ其ノ當時ニ在リテハ國ノ行政施行ニ關スル二個ノ機關アリ故ニ行政統一ヲ缺クヲ以テ同五年四月布告第十七號ヲ以テ從來ノ役人ヲ廢シ戶長副戶長ヲ置キ一切ノ事項ヲ處理セシメタリ同十一

年七月布告第十七號ヲ以テ郡區町村編制法ヲ制定シ每町村又ハ數町村ニ戶長ヲ置キ一定ノ市街地ニ於ケル區内ノ町村ニハ戶長ヲ置カス區長ニ其ノ戶長ノ事務ヲ行ハシム(第六條)同年七月太政官達第三十二號ヲ以テ戶長ハ地方長官ノ監督ヲ承ケテ戶籍、兵事、學事等ヲ掌トラシメ且ツ其ノ職務ノ概目ニ據リ定マリタル事項其ノ他上級官廳ノ命スル事項ヲ執行セシム同年七月太政官無號達第四項ニ依リ當時市町村ハ自治ノ體ヲ有シ戶長ハ其ノ執行機關ヲ兼テタリ同年四月內務省乙第五十四號ヲ以テ凡戶長ハ成ルヘク公選セシメ地方長官之ヲ任命スルモノトセシカ明治十七年五月太政官達第四號ヲ以テ地方長官ノ選任ニ委テタリ明治二十一年四月法律第一號ヲ以テ制定ノ市町村制ヲ實施スル地方ニ在リテハ戶長ハ消滅ニ歸シ市町村吏員タル市町村長ハ法律及ヒ勅令ノ規定ニ依リ國ノ行政事務ヲ處理スルニ至レリ(市制第七十四條、町村制第三十九條)

自治行政

### 第二款 自治行政

#### 第一項 府縣

府縣自治ノ沿革

明治ノ初年政府爲政ノ要ハ公議輿論ニ在リトシ地方ニ對シテ亦地方議會開設ニ關シ訓示スル所アリト雖モ議會ノ組織其ノ權限等ヲ規定シタル成文法アルコトナシ其ノ之アルニ至リタルハ府縣會規則ヲ以テ始トス又地方經濟ニ關シテハ單行法令ヲ以テ規定スル所ナキニ非スト雖モ地方稅ノ支出スヘキ費目ヲ規定シ會計年度ヲ定ムル等府縣財政ノ基礎ヲ定メタルモノハ地方稅規則ナリトス是等規則ハ府縣行政ニ至大ノ關係ヲ有スル重要ノ法律ナリトス

府縣會規則ノ發布

明治十一年七月布告第十八號ヲ以テ府縣會規則ヲ發ス該則ハ四章三十五條ヨリ成立ス第一章ニ議權會議ノ類別第二章ニ議會ノ組織選舉ノ方法第三章ニ開會及ヒ表決ノ方法、議場ノ秩序ニ關スル事項ヲ規定

ス

府縣會ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其ノ徵收方法ヲ議定シ(第一條)地方税ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ケ(第六條)府縣内ノ利害ニ關シ政府ニ建議シ(第七條)又ハ知事ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ヘ(第八條)議事細則ヲ議定スルノ權ヲ有ス(第九條)

府縣會ハ每郡區ヨリ選舉シタル議員ヲ以テ成立シ該則ニハ一定ノ員數ヲ定メス郡區ノ大小ニ由リ五人以下ヲ選フモノトセリ(第十條)而シテ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其ノ郡區内ニ本籍ヲ有シ且ツ府縣内ニ於テ一定ノ地租ヲ納ムル者ハ選舉權ヲ有シ(第十四條)滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其ノ府縣内ニ滿三年以上居住シ且ツ一定ノ地租ヲ納ムル者ハ被選舉權ヲ有シ(第十三條)選舉ニ關スル事務ハ郡區長之ヲ管理シ(第十五條)第十六條第十八條第十九條第二十條投票ハ記名トス(第十七條)議員ノ任期ハ四年ニシテ二年毎ニ半數ヲ改選ス(第二十一條)議長

正 府縣會規則ノ改

副議長ノ任期ハ二年トス(第二十二條)凡テ會議ハ公會トシテ府知事縣令ノ請求又ハ議長ノ意見ニ由リテハ秘密會トス(第二十八條)府縣會ハ毎年一度之ヲ開キ其ノ他臨時必要ノ場合ニ於テ事件ヲ限リ臨時會ヲ開クモノトス(第四條)第三十一條第三十二條臨時會ハ會期ノ規定ナシ通常會ノ會期ハ法律ニ一定シ特ニ延期ノ必要アルトキハ府縣會ノ議決ニ依リ府知事縣令之ヲ決定シ内務卿ニ報告スルモノトス(第三十一條)而シテ凡ソ地方税ヲ以テ施行スヘキ事件ハ府縣會ノ會議ニ付シ府知事縣令ハ之ヲ認可シテ施行スルモノトス若シ之ヲ認可スヘカラスト思慮シタルトキハ其ノ事由ヲ内務卿ニ具申シテ指揮ヲ請フヘキモノトス(第五條)府縣會ノ議事公安ヲ害シ法律命令ニ反スト認ムルトキハ府知事縣令ハ之ヲ中止セシメ内務卿ノ指揮ヲ請フヘク(第三十二條)又内務卿ハ之ヲ解散スルコトヲ得ルモノトス(第三十四條)

明治十三年四月布告第十五號ヲ以テ府縣會規則ヲ改正ス、府縣制ヲ實

行セサル地方ニ於ケル現行法ナリトス其ノ改正ノ要點ヲ舉クレハ地方税ニ係ル出納ノ決算報告書ヲ受ケ説明ヲ求メ尙ホ意見アルトキハ大藏卿ニ上申スルコトヲ得ト規定シ(第六條)財産監督ノ途ヲ開キ議員招集ニ應セス又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審査シ退職者ト決定スルノ規定(第九條)ヲ設ケテ以テ自主權ヲ擴張スル等其ノ最ナルモノトス而シテ同年十一月布告第四十九號ヲ以テ常置委員ノ一章十四个條ヲ追加ス即チ常置委員ハ府縣會議員カ互選シタル委員五人以上七人以下ヲ以テ組織シ(第三十六條)其ノ任期ハ二個年(第四十六條)ニシテ府縣會ノ議定ニ依リ地方税ヲ以テ支辨スヘキ事業ヲ執行スル方法順序ニ關シテ府知事縣令ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ヘ地方税ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要スルトキハ其ノ費用ヲ議決スルノ權ヲ有ス(第三十七條)又常置委員ハ府知事縣令ヨリ發スヘキ議案ハ前以テ請取リ議會ニ意見ヲ報告スルモノトシ(第三十八條)明治十四年二

月布告第四號ヲ以テ又之ヲ追加削除シ即チ府縣會ノ議決ニシテ認可スヘカラスト思慮スルトキハ府知事縣令ハ時宜ニ由リ之ヲ再議ニ付スルコトヲ得ルノ規定(第五條)第二項ト法律ノ見解權限ノ爭議ニ關シテ政府ニ裁定ヲ請フノ規定(第九條)第二項ト法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又議員召集ニ應セサル場合ノ處理方法ニ關スル規定等ヲ追加シ(第三十三條)第二項第三項公安ヲ害シ又ハ法律規則ヲ犯スト認メ解散シタル場合ニ於テ前議員ノ議定セサル議案ハ後任ノ議員ヲシテ之ヲ議定セシムルノ規定ヲ設ケ(第三十四條)第一項二項同年二月太政官布告第六號ヲ以テ其ノ議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土工會ニ委任スルヲ得ルニ至レリ

明治十五年二月第十號及ヒ十二月第六十八號ヲ以テ大ニ追加改正ス今其ノ要點ヲ舉クレハ出納決算書ハ他ノ議案ノ如ク府知事縣令ニテ説明スヘキモノトシ(第六條)二項會期ハ延期スヘカラサルモノトシ(第



三十一條臨時會ノ會期ヲ定メ(第三十六條)會期內ニ於テ議了セサル場  
合及ヒ停止ニ於ケル處理方法ノ規定ヲ設ケ(第三十三條第二項第四項)  
豫備費支出ニ付キ常置委員ニ意見ヲ述フルノ權ヲ與ヘ臨時急施ノ場  
合ニ於テハ經費ノミナラス徵收ノ方法モ議決セシムルノ規定ヲ設ク  
(第三十七條)同十七年十二月布告第二十八號ヲ以テ通常會期ヲ改正ス  
又議員選舉方法ニ關シテハ明治二十二年二月法律第六號ヲ以テ府縣  
會議員選舉規則ヲ制定ス該則ハ六十八條ヲ包含シ選舉ニ關スル一切  
ノ事件ヲ規定ス

明治十三年五月布告第二十六號ヲ以テ府縣管內ニ於テ重要ナル市街  
地ヲ有シ郡部ト利害ヲ異ニスル地方ニ在リテハ府縣會ノ議ヲ經內務  
卿ノ裁定ヲ得テ區ニ係ル地方稅ノ經費ト郡ニ係ルモノトヲ區別スル  
コトヲ得ルノ規定ヲ設ケ明治十四年二月布告第八號ヲ以テ之ヲ廢シ  
テ區郡部會規則ヲ規定シ同十四年三月布告第二十號同十五年二月布

告第十二號ヲ以テ之ヲ追加改正ス即チ三府及ヒ神奈川縣其ノ他區制  
ヲ設ケタル諸縣ニ於テ政府ノ裁可ヲ得タルモノハ府縣會ヲ分テ區部  
會郡部會トシ區部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシムルモノトシ(第  
一條)常置委員モ區部郡部ヨリ互選セシムル等ノ規定ヲ設ケタリ  
以上ハ府縣會規則ノ大要ニシテ前ニ述ヘタルカ如ク府縣會ハ地方稅  
ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其ノ徵收方法ヲ議定スルニ止マリ  
シカ漸次其ノ議權ヲ擴張スルニ至リ法律命令ヲ以テ其ノ職權ニ屬セ  
シメタル事項少シトセス即チ十三年六月太政官第三十一號布告備荒  
儲蓄法第四條二十年十一月勅令第五十六號地方稅ニ關スル寄附及ヒ  
雜收入ハ府縣會ノ議定ニ付スル件二十三年勅令第六十六號府縣委託  
金ヲ地方稅經濟ニ移スノ件同年九月法律第八十八號府縣稅徵收法第  
十三條同年十月法律第九十號市町村立小學校教員退隱料及ヒ遺族扶  
助料法第十四條等アリ又常置委員ノ職權モ漸次擴張スルニ至リ二十

年三月勅令第五號所得税法第二十條、第二十二條、二十二年七月法律第十九號土地收用法第十一條、第二十九條、二十三年十月勅令第二百十五號小學校令第十六條等其ノ他法律命令ニ規定シタルモノ多シ  
府縣財政ニ關シテハ財務行政地方税ノ部ニ於テ論述スヘキヲ以テ此ニハ單ニ財政法規ノ大要ヲ述フ

明治六年七月太政官達第二百七十二號ヲ以テ郡村ノ入費ハ地價ニ課シ其ノ地價三分ノ一タルヘシト規定シ同年一月布告第七號ヲ以テ馬車人力車等其ノ他ノ諸税ハ賦金トシテ府縣限リ徵收セシメ同年八月二月布告第二十三號ヲ以テ舊慣雜税ト稱スル區々ノ徵税ヲ廢シ營業上保護ヲ要スルモノハ課税セシムルノ規定ヲ設ク同年九月布告第四百四十號ヲ以テ賦金ト稱シ收入スル諸税營業上ニ對スル諸收入ヲ其ノ地方ノ費ニ供セシメ其ノ賦課及ヒ費用ノ用途ハ地方官之ヲ取調ヘ大藏省ノ許可ヲ得テ施行スルモノトス是ニ於テ府縣經濟ノ收入ハ地租

地方税規則ノ發布

賦金、營業ニ課スル諸税等ヲ以テ府縣税トシ其ノ收入ヲ以テ府縣經濟ノ基本ト爲セリ

明治十一年七月布告第十九號ヲ以テ地方税規則ヲ發布シ以テ府縣財政ノ基ヲ立ツ地方税ハ地租五分一以內營業税、雜種税、戸數割ノ目ニ從ヒ徵收スルコトヲ得(第一條)會計年度ヲ定メ(第四條)地方税ヲ以テ支辨スヘキ費目ヲ定ム(第三條)又天災時變ニ基因スル非常ノ費用ハ別ニ賦課スルコトヲ得ルノ規定ヲ設ク(第五條)十三年四月布告第十六號ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ即チ現行法ナリ同年二月布告第五號同十五年十二月布告第六十九號同十七年三月布告第十五號同十二月布告第二十九號等ヲ以テ又大ニ修正スル所アリ其ノ要點ヲ擧クレハ府縣ノ收入ハ地租三分ノ一以內營業税、雜種税、戸數割ヨリ成立チ警察、教育、土木、勸業、府縣廳舍、警察廳舍、郡區廳舍、府縣監獄建築修築等ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキモノト規定シ(第二條)數年ヲ期シテ施行スヘキモノハ繼

續事業トシテ之ヲ處理スル規定ヲ設ク(第四條第二項)而シテ同二十三年一月法律第三號ヲ以テ府縣ニ於テ非常災害ノ爲メ臨時土木費ヲ要シ一時地方税ノ負擔ニ堪ヘ難キ場合ニ於テ府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ取り内務大臣、大藏大臣ノ許可ヲ得テ十年以内ノ償還期限ヲ以テ公債ヲ起スコトヲ得但シ起債ノ方法利息ノ定率及ヒ償還ノ方法ヲモ併テ認可ヲ受クヘシト規定シタリ同二十九年三月法律第六十六號ヲ以テ之ヲ改正シ即チ府縣制ヲ施行セサル府縣ニ於テハ三十年以内ニ於テ全部ヲ償却スルコトヲ得ルモノトシ(第一條)又臨時土木費ヲ要スル場合ニ於テハ府縣會ノ議決ヲ取り内務、大藏兩大臣ノ認可ヲ得テ地租制限賦課ヲ爲スコトヲ得セシム(第二條)是レ財政ノ整理ヲ計ル上ニ於テ必要ナル規定タルノミナラス地方自治ノ機能ヲ認ムルノ點ニ於テ法制上ノ一進歩トス

明治二十三年五月法律第三十五號ヲ以テ府縣制ヲ發布ス本法ハ府縣

府縣制ノ發布

府縣ノ機關

自治ヲ認メ郡制市制ヲ施行シタル府縣ニ施行スヘキモノニシテ其ノ施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ内務大臣之ヲ定ム(第九十四條)而シテ本法ハ六章九十八條ヲ以テ成ル第一章ニ府縣ノ構成第二章ニ議會ノ組織選舉ノ方法、議會職務權限、議會ノ類別、議事ノ整理、議員ノ行動第三章ニ府縣參事會職務權限、選舉ノ方法、府縣吏員及ヒ委員ノ選任ト其ノ類別第四章ニ會計ニ關スル一切ノ件第五章ニ行政監督及ヒ方法第六章ニ施行上ニ關スル要件等ヲ規定ス立法ノ趣旨ノミナラス其ノ規定ノ多クハ市町村制ト相類ス故ニ二者立法ノ趣旨ヲ同クシタル規定ハ市町村制ノ說明ニ讓リ茲ニハ府縣ニ特別ナル規定ノ梗概ヲ示ス

府縣ノ機關 府縣ノ機關ハ府縣會及ヒ府縣參事會トス共ニ合議制ナリ而シテ府縣行政ハ府縣知事之ヲ施行シ府縣事務ノ一部ヲ調査セシメ又府縣有財產營造物管理若クハ土木工事ノ施行ニ必要ナルトキ及ヒ一定ノ府縣税ニ付テハ其ノ賦課額調査ノ爲メ府縣會ノ議決ニ依リ

テ有給ノ吏員ヲ置キ及ヒ臨時又ハ常置委員若クハ調査委員ヲ設ケテ其ノ事務ヲ補助セシム(第五十二條、第五十三條、第六十二條)而シテ府縣會及ヒ府縣參事會ノ組織權限ハ左ノ如シ

府縣會ノ組織權限

第一、府縣會

府縣會ハ府縣内郡市ニ於テ選舉シタル議員ヲ以テ之ヲ組織ス(第二條)其ノ定員ハ明治二十四年六月勅令第五十九號府縣會議員定數規則ヲ以テ議員三十人ヲ最低定員トシ人口一定ノ數ヲ超ユルトキハ之ニ比例シテ其ノ數ヲ増加ス(第一條)其ノ選舉ノ方法ハ市ニ在リテハ市會及ヒ市參事會會同シ郡ニ在リテハ郡會及ヒ郡參事會會同シテ府縣内ノ市町村公民中選舉權ヲ有シ一定ノ納稅ヲ爲ス者ヨリ選舉スルモノトス(第三條、第四條)議員ハ名譽職ニシテ其ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ其ノ半數ヲ改選ス(第五條)議長副議長ハ議員中ヨリ各一名ヲ互選シ其ノ任期ハ議員ノ任期ニ依ル(第十九條)

府縣會ノ權限ハ府縣ノ歲出豫算決算府縣稅ノ賦課徵收方法府縣有財產ノ管理及ヒ處分營造物ノ設備維持等ヲ議決シ其ノ他法律命令ニ依リ特ニ定ムルモノニ限ル(第十五條)而シテ府縣會ハ其ノ權限ニ屬スル事件ヲ府縣參事會ニ委任シ(第十六條)官廳ノ諮問ニ意見ヲ述ヘ府縣内ノ公益ニ關スル事件ニ付キ府縣知事又ハ內務大臣ニ建議スルコトヲ得(第十六條、第十七條)

府縣會ハ毎年一回定期ニ通常會ヲ開ク其ノ會期ハ三十日以内トシ其ノ他必要アルトキハ事件ヲ限リ七日以内ノ會期ヲ以テ臨時會ヲ開ク凡テ府縣會議員ノ招集開會閉會ハ府縣知事之ヲ行フ(第二十一條)而シテ其ノ會議ヲ開クニハ議員三分ノ一以上出席ヲ要シ議決ハ過半數ニ依ルモノトス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル(第二十二條、第二十三條)

府ニ於テハ府會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ市ニ關スルモノト其ノ他

ノ部分ニ關スルモノト分別スルコトヲ要スルモノアルトキハ府會ノ議決ニ依リ之ヲ分別シ市會ニ於テ選舉シタル議員ハ專ラ市ノ事件ヲ議決シ市ヲ除キ其ノ他ノ部分ニ於テ選舉シタル議員ハ專ラ郡部ノ事件ヲ議決シ互ニ其ノ議事ニ參與スルコトヲ得ス又市部會郡部會ヲ置キタル縣ニ於テモ亦縣會ノ議決ニ依リ之ヲ分別スルコトヲ得ルモノトス(第二十七條)

第二府縣參事會

府縣參事會ノ組織權限

府縣參事會ハ府縣知事高等官二名及ヒ名譽職參事會員ヲ以テ組織ス府ノ名譽職參事會員ハ八名トシ縣ノ名譽職參事會員ハ四名トス府ハ郡部ニ於テハ四名ヲ互選シ市部ニ於テ亦四名ヲ互選ス縣ハ縣會ニ於テ議員中ヨリ互選ス(第三十八條)其ノ任期ハ議員ノ任期ニ依ル(第四十二條)府縣參事會員タル高等官ハ府縣廳ニ奉職スル高等官中ヨリ內務大臣之ヲ命ス(第三十九條)而シテ其ノ職務權限ハ府縣會ノ權限ニ屬ス

府縣ノ財政

ル事項ニシテ其ノ委任ヲ受ケタルモノ及ヒ臨時急施ヲ要シ府縣會ヲ招集スルノ暇ナキ場合ニ於テ府縣會ニ代テ議決シ又府縣會議決ノ範圍内ニ於テ府縣行政ノ重要ナル事件ヲ議決シ府縣知事ヨリ發スル府縣會議案ニ付キ意見ヲ述ヘ及ヒ會議ニ報告シ府縣知事其ノ他官廳ノ諮問ニ對シテ意見ヲ述フ臨時必要ノ場合ニハ府縣ノ出納ヲ檢査シ(第四十三條)豫算ニ關シテハ府縣會ノ議決ニ付スル前審査スルノ權ヲ有シ(第七十五條)豫備費ノ支出ニ付キ議決ヲ爲シ(第七十七條)其ノ他法律命令ニ依リ其ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス(第四十三條)而シテ三府ニハ府會ト同シク府參事會ニ市部及ヒ郡部ヲ設ク(第四十九條)

府縣ノ財政

府縣有財産及ヒ營造物管理ノ費用、府縣會、府縣參事會及ヒ委員ノ費用、府縣吏員ノ諸給與及ヒ從來法律命令若クハ慣例ニ依リ並ニ將來法律勅令ニ依リ府縣ノ負擔ト定ムル事項ノ費用ハ府縣ニ於テ之ヲ支辨ス

ハキモノトス(第五十四條)從來法令ニ依リ府縣ノ負擔シ來リタルモノ  
ハ明治十三年布告第十六號ニ依レハ警察監獄土木教育勸業ニ關スル  
費用警察廳舍郡區廳舍府縣廳舍監獄廳舍ノ建築及ヒ其ノ修繕費郡區  
吏員給料旅費及ヒ廳中諸費等其ノ最ナルモノトス(第三條)而シテ府縣  
ハ府縣稅其ノ他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨スルモノトス(第五十六條)及ヒ  
財務行政地方稅ノ部參照府縣公債募集豫算決算(第七十四條)第七十五  
條(第八十條)ニ關スル件ハ市町村制ト殆ント相同シキヲ以テ此ニ之ヲ  
省略ス

府縣行政ノ監督

府縣行政ノ監督

府縣行政ノ監督ハ內務大臣之ヲ行フヲ通例トス(第八十一條)財政上重  
要ノ處分ニ至リテハ內務大臣兩大臣ノ認可ヲ要スルモノアリ(第九十  
條)第九十一條)而シテ其ノ監督方法ニ至リテハ府縣會又ハ府縣參事會  
カ其ノ權限ヲ超エ又ハ法律命令ニ背キタル議決ヲ爲シタルトキハ府

府縣制ノ改正

縣知事ハ之カ取消ヲ命スルモノトシ(第八十四條)法律命令又ハ慣行ニ  
依テ府縣ノ負擔ニ屬スル行政上又ハ公益上必要ノ費用ヲ否決シ又ハ  
議決スト雖モ必要ノ給需ヲ缺クトキ又ハ議決スヘキ議案ヲ議決セス  
又ハ一定ノ期限内ニ議了セス其ノ事緊急ヲ要スルモノナルトキハ內  
務大臣ニ具狀シテ其ノ指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得ルモノト  
シ(第八十五條)第八十七條)府縣會招集ニ應セス又ハ成立セザルトキハ  
府縣知事內務大臣ノ指揮ヲ請ヒ處分スルヲ得(第八十六條)府縣會ノ解  
散ハ勅令ヲ以テシ且ツ改選終了ニ至ルマテノ間急施ヲ要スルモノア  
ルトキハ府縣知事ハ之ヲ專決處分スルコトヲ得ルノ外市町村制ト格  
別異ナルコトナキヲ以テ茲ニ之ヲ省略ス

明治三十二年三月法律第六十四號ヲ以テ府縣制ヲ改定ス其ノ規定ス  
ル所ハ大體舊法ニ同シト雖モ舊法ニ於ケル錯雜不明ノ點ヲ正シ其ノ  
數多ノ不備ヲ補ヒタリ本法ハ之ヲ七章ニ分チ第一章ニ總則第二章ニ

府縣會(第一組織)及ヒ選舉、第二職務權限及ヒ處務規程ノ二款ニ分ツ(第三章ニ府縣參事會(前章ト同様ノ二款ニ分ツ)第四章ニ府縣行政第一府縣吏員ノ組織及ヒ任免、第二府縣官吏府縣吏員ノ職務權限及ヒ處務規程、給料及ヒ給與ノ三款ニ分ツ)第五章ニ府縣ノ財務(第一財產營造物及ヒ府縣稅、第二歲入出豫算及ヒ決算ノ二款ニ分ツ)第六章ニ府縣行政ノ監督、第七章ニ附則ヲ定ム、而シテ本法ニ於ケル改正ノ重ナル點ハ府縣會議員ノ選舉方法ヲ改メテ直接選舉トシ、市町村公民ニシテ市町村會議員ノ選舉權ヲ有シ且ツ其ノ府縣内ニ於テ一年以來直接國稅年額三圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會議員ノ選舉權ヲ有シ其ノ十圓以上ヲ納ムル者ハ被選舉權ヲ有ストシ、縣ノ名譽職參事會員ヲ増シテ六名トシ、府縣知事ニ期日ヲ定メテ府縣會ノ停會ヲ命スル權ヲ與ヘ、府縣ノ費用ヲ勅令ノ定ムル所ニ依リ市町村ニ分賦スルコトヲ得トシ、府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ設クルコトヲ得トシタルカ如キ是ナリ

### 第二項 郡

郡制ノ發布

郡ハ明治二十三年五月法律第三十六號制定ノ郡制ヲ以テ自治體ノ權能ヲ得タリ、郡制ハ第一章總則、第二章郡會、第三章郡參事會吏員及ヒ委員、第四章郡ノ會計、第五章監督、第六章附則トシ、第六章八十五個條ヨリ成立ス、町村制ヲ施行シタル府縣ニ施行スルモノニシテ其ノ施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣之ヲ定ム(第八十九條)而シテ其ノ規定ハ府縣制ニ相類スル點多シ故ニ此ニハ郡制ニ特有ナル規定ノ要點ヲ舉ク

郡ノ機關

郡ノ機關

郡ノ機關ハ郡會及ヒ郡參事會ヨリ成立ス、其ノ行政ノ執行ハ國ノ行政機關タル郡長之ヲ施行シ(第五十六條)府縣ト同シク一定ノ事項ニ限リ其ノ補助機關トシテ郡會ノ決議ニ依リ有給吏員及ヒ郡會ニ於テ選舉

郡會ノ組織

シタル委員ヲ設クルコトヲ得(第五十八條、第五十九條)  
第一郡會

郡會ハ郡内ノ各町村ニ於テ選舉シタル議員ト大地主ニ於テ選舉シタル議員トヲ以テ組織シ(第四條)郡長ヲ以テ議長トス(第三十條)各町村ハ各一名ノ郡會議員ヲ選舉シ若シ町村ノ選舉スル議員十名以上ニ及フトキハ郡會ノ議決ヲ以テ府縣知事ノ認可ヲ受ケ其ノ配當法ヲ定メ其ノ數ヲ二十名ニ止ム又其ノ數十名ニ滿タサルトキハ郡會ノ議決ニ依リ知事ノ認可ヲ以テ其ノ數ヲ増シ十名ニ至ラシム(第五條)其ノ任期ハ六年ニシテ毎三年ニ其ノ半數ヲ改選ス(第十三條)而シテ大地主ハ町村ニ於テ選舉スヘキ議員定數ノ三分ノ一ヲ互選ス其ノ任期ハ三年トシ毎三年全數ヲ改選ス然レトモ其ノ員數町村ニ於テ選舉スヘキ議員定數ノ三分ノ一以下ナルトキハ選舉ニ依ラス當然議員タルモノトス(第八條、第十三條)大地主トハ郡内ニ於テ町村稅ヲ賦課セラ

郡參事會ノ組織

第二郡參事會

ル、土地ニシテ其ノ地價總計一萬圓以上ヲ有スルモノヲ云フ(第九條)郡内町村公民ニシテ町村會ノ選舉ニ參與スルコトヲ得ヘキ者ハ總テ被選舉權ヲ有ス(第十條)  
郡會ノ招集ハ郡長之ヲ行フ然レトモ議員三分ノ一以上ニ於テ臨時招集ヲ請求スルトキハ郡長之ヲ招集スルノ義務アリ(第三十二條)

郡ノ財政

郡ノ財政

郡參事會ハ郡長及ヒ名譽職參事會員四名ヲ以テ組織ス名譽職參事會員中三名ハ郡會ニ於テ其ノ議員中ヨリ互選シ一名ハ府縣知事ニ於テ郡會議員若クハ郡内町村ノ公民中ヨリ選任ス(第四十六條)實ニ郡行政ノ參與機關ニシテ合議制ノ行政機關ナリトス  
郡ノ支出ハ郡有財産上ノ收入其ノ他ノ雜收入ヲ以テシ尙ホ不足スルトキハ之ヲ郡内ノ各町村ニ分賦ス其ノ分賦ノ割合ハ各町村前年度ノ



直接國稅及ヒ府縣稅ノ徵收額ニ依ル而シテ各町村ハ分賦セラレタル額ヲ其ノ豫算ニ編入シ町村稅トシテ之ヲ徵收ス(第六十二條)  
郡ノ行政監督ハ第一次ニ府縣知事第二次ニ內務大臣之ヲ行フノ外府縣制市町村制ト大體相同シ

郡制ノ改正

明治三十二年三月法律第六十五號ヲ以テ郡制ヲ改定ス、本法ノ改定ハ同時ニ公布セラレタル府縣制ノ改定ト同一ノ理由ニ基クモノニシテ其ノ編別ノ體裁モ二者全ク相同シ而シテ本法ニ於ケル改正ノ重ナル點ヲ舉クレハ郡會ノ組織ヲ改メ大地主制度ヲ廢シテ議員ノ數ヲ十五人以上三十人以下トシ郡ノ狀況ニ依リ內務大臣ノ許可ヲ得テ之ヲ四十人マテニ増加スルコトヲ得、又其ノ議員ハ直接選舉法ニ依リテ之ヲ選ミ、郡内ノ町村公民ニシテ町村會議員ノ選舉權ヲ有シ且ツ其ノ郡内ニ於テ一年以來直接國稅二圓以上ヲ納ムル者ハ郡會議員ノ選舉權ヲ有シ、其ノ五圓以上ヲ納ムル者ハ被選舉權ヲ有スルコト、シ、郡ノ名譽

職參事會員ヲ増シテ五名トシ盡ク之ヲ議會ニテ其ノ議員ノ中ヨリ選マシメ、郡カ使用料手数料ヲ徵收スルコトヲ得ル場合ヲ明定シ、郡長ハ知事ト同様ノ條件ヲ以テ郡會ノ停會ヲ命シ及ヒ特別會計ヲ設クルコトヲ得トシ、又法人ノ資格ヲ有スル郡組合ナルモノヲ認メタリ、此ノ郡組合ハ特定ノ事務ヲ共同處理セシムル必要アル場合ニ府縣知事カ關係アル郡參事會ノ意見ヲ徵シ府縣參事會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ設定スルモノニシテ、之ヲ設定シタルトキハ府縣知事ハ其ノ設定ト同様ノ手續ヲ履ンテ郡組合會ノ組織、事務ノ管理方法並其ノ費用ノ支辨方法其ノ他ノ必要ナル事項ヲ定ムルコトヲ要シ、凡テ郡組合ニ付テハ法律及ヒ勅令ニテ特別ノ規定アルモノ、外郡制ヲ準用スルコト、セリ

### 第三項 市町村

市町村

市町村ノ制度ハ維新ノ始メ舊來ノ慣例ニ仍ラシメ實ニ當時市町村ハ自治ノ性質ヲ有シタリ  
明治五年四月布告第十七號ヲ以テ庄屋名主年寄等ヲ廢シテ正副戸長ヲ置キ土地人民ニ關係スル事件ノ一切ヲ取扱ハシメ其ノ費用ノ徵收方法モ舊慣ニ仍ラシメタリ同年十月太政官達ヲ以テ地方ノ便宜ニ依リ數町村ヲ合シテ區長ヲ置ク其ノ當時ニ在リテモ一ニ舊慣ニ仍ラシメタリ降テ明治九年十月布告第三百三十號ヲ以テ金穀公借共有地取扱土木起工規則ヲ定メ金穀ヲ公借シ若クハ共有ノ地所建物等ノ處分ハ區ニ在リテハ其ノ區内町村總代町村ニ在リテハ其ノ町村内不動産所有者ノ承諾ヲ要スルモノトシ(第一條)第二條(成文上始メテ公益事項ニ關シテ人民ニ參與セシムルニ至レリ)

明治十一年七月太政官無號達ヲ以テ大ニ地方制度ヲ改ムルニ當リ地方長官ハ地方ノ情況ヲ裁酌シテ區町村ニ議會ヲ開キ區町村限リノ公共事項ニ關スル費用ハ其ノ議決ニ依リテ區長村長之ヲ執行スルモノトシ數町村ニ互ル公共事務ハ各町村ノ協議ヲ以テ經營スヘキモノトシ區町村會ニ關スル規定ハ地方長官之ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ受クヘキモノトス(第四項)第十一項第十二項降テ明治十三年四月布告第十八號ヲ以テ區町村會法ヲ定ム即チ區町村會ノ權限(第一條)數區町村聯合會水利土功等其ノ他行政監督議決ノ施行ニ關スル事項ヲ規定シ(第四條)第五條第六條第七條區町村會數區町村聯合會規則ハ地方長官之ヲ定メ水利土功ニ關スル規則ハ町村會ニ於テ之ヲ定メ地方長官ノ裁定ヲ受クヘキモノトス(第二條)第三條第八條)  
明治十四年二月布告第七號同十五年一月布告第一號ヲ以テ一二個條ヲ修正シ同十七年五月布告第十四號ヲ以テ之ヲ改ム市町村制ノ未タ

施行ニ至ラサル地方ニ在リテハ現ニ效力ヲ有ス此ノ法ハ十五條ヨリ成立シ區町村會ノ權限組織其ノ監督方法第一條第五條第六條第七條第八條第十條ニ關スル件等ヲ規定シ地方長官ハ區町村會ノ會期議員ノ員數任期改選其ノ他ノ規則ヲ定ムヘキモノトシ(第二條)又數區町村ニ關スル事件ニ付キ聯合會ヲ開キ(第十三條)又水利土功ニ關シ區町村會若クハ聯合區町村會ニ於テ評決シ難キ場合ニハ其ノ區域ヲ定メ水利土功會ヲ開カシムルモノトス(第十四條)

市町村制ノ公布

明治二十二年四月法律第一號ヲ以テ市制町村制ヲ公布ス本制ノ趣旨ハ自治及ヒ分權ノ原則ヲ實施シ地方共同ノ利益並ニ臣民ノ幸福ヲ發達増進セシメ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ都市及ヒ町村ノ權義ヲ保護スルヲ主トス抑モ一國人民各自治ノ團結ヲ爲シ政府之ヲ統一シテ其ノ機軸ヲ執ルハ國家ノ基礎ヲ鞏固ニスル所以ナリ國家ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルニハ地方ノ區畫ヲ以テ自治ノ機體ト爲シ以

テ其ノ利害ヲ負擔セシメサルヘカラス從前ノ制府縣ノ下郡區町村アリ區町村ハ較自治ノ體ヲ存スト雖モ未タ完全ナル自治ノ制アルヲ見ス郡ハ全ク國ノ行政ノ區畫タルニ過キス府縣ハ素ト行政ノ區畫ニシテ幾分カ自治ノ制ヲ兼テ有セルカ如シト雖モ是亦全ク自治ノ制アリト云フヘカラス地方分權ノ主義ヲ擴張スルニ付テハ此ノ三區畫ヲ完全ナル三階級ノ自治體ト爲スヲ緊要ナリトス蓋シ自治區ハ其ノ自治體共同ノ事務ヲ擔任スヘキノミナラス一般ノ行政ニ屬スル事ト雖モ全國ノ統治ニ必要ニシテ官廳自ラ處理スヘキモノヲ除クノ外之ヲ地方ニ分任シテ政府ノ繁雜ヲ省クハ中央集權ノ弊ヲ革ムルニ付キ必要ナリトス要スルニ市町村制ノ制定ハ人民ヲシテ地方ノ公務ニ參與セシメ公益ヲ計ルノ思想發達スルニ從ヒ漸ク參政ノ思想實力ヲ養成シ立憲ノ制ニ於テ國家百世ノ基礎ヲ立ツルノ根源ヲ爲スニ在リ而シテ市制ハ七章百三十三箇條町村制ハ八章百三十九箇條ヨリ成立シ第一

章總則ニ市町村制ヲ施行スル地域ヲ定メ法律上市町村ノ性質ヲ明カニシ次テ市町村ノ構成ニ第一要素タル地域ニ關スル件ト其ノ第二要素タル住民權公民權ノ得喪住民權公民權ヨリ生スル權利義務ヲ規定シ且ツ市町村ニ付與スル自主權ヲ示ス第二章市町村會ノ組織及ヒ選舉權被選舉權選舉等級選舉ノ方法等其ノ他職務權限及ヒ處務規程ニ關スル件ヲ規定ス第三章市町村行政ニハ市參事會市町村長助役委員區長等ニ關スル件ヲ規定ス第四章市町村有財產ノ管理ニ關スル件ヲ規定シ第五章ハ市町村內特別ノ財產ヲ有スル市區又ハ町村內各部ノ行政ニ關スル件ヲ規定ス町村制ノ第六章ハ町村組合ニ關スル件ヲ規定シ市制第六章町村制ノ第七章ハ市町村行政ノ監督ヲ規定ス此ノ法律ハ地方ノ情況ヲ裁酌シ地方長官ノ具申ニ依リ內務大臣ノ指定ヲ以テ之ヲ施行スルモノトス(市制第二百二十六條、町村制第三百二十七條)北海道、沖繩其ノ他一定ノ嶋嶼ニハ町村制ヲ施行セス(町村制第三百三十二條)

市町村ノ區域

明治二十二年三月法律第十二號ヲ以テ市制中三府ノ市ニ特例ヲ設ク明治二十八年二月法律第六號第七號ヲ以テ市町村制中改正ヲ加ヘタル箇條アリ(市制第九條、第十二條、第四十一條、町村制第九條、第十二條、第四十三條)而シテ市ト町村トハ各別ニ規定セリト雖モ其ノ制度ヲ立ツル原質ニ至リテハ彼此相異ナルコトナキヲ以テ茲ニハ便宜上併セテ是等ノ概要ヲ論述スヘシ

市町村ノ區域

市町村ノ區域ハ從來ノ區域ナリ變更セサルヲ以テ法ノ精神トス(市町村制第三條)若シ將來必要ノ場合アリテ廢置分合ヲ爲シ又ハ境界ノ變更ヲ爲サルヲ得サルトキハ法定ノ手續ヲ爲スヲ要シ(市町村制第三條、第四條)境界ニ關スル爭論ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得(市町村制第五條)

市町村ノ住民及ヒ公民

市町村ノ住民及ヒ公民

市町村内ニ住居ヲ占ムル者ハ其ノ住民トシ公共ノ營造物及ヒ公有財産ヲ共用スルノ權アルト同時ニ市町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務アリ(市町村制第六條)而シテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニシテ二年以來市町村ノ住民トナリ其ノ市町村ノ負擔ヲ分任シ其ノ市町村内ニ於テ地租若クハ直接國稅年額二間以上ヲ納ムル者ハ其ノ市町村ノ公民トス公民ハ市町村ノ選舉ニ參與シ名譽職ニ選舉セララル、權利ト之ヲ擔任スル義務ヲ有ス(市町村制第七條、第八條)

市町村ノ機關

市町村ノ機關

市町村ノ機關ハ分テ代議機關ト行政機關ノ二トス

第一代議機關ハ市會町村會是ナリ

市會議員ノ數ハ三十人以上六十人以下町村會議員ノ數ハ八人以上三十人以下トシ各人口ノ多寡ニ應シテ之ヲ定ム(市町村制第十一條)而シテ市町村公民ハ總テ選舉權及ヒ被選舉權ヲ有ス、公民ニ非サルモ公權

ヲ有スル内國人及ヒ法人ニシテ多額ノ直接市町村稅ヲ納ムルトキハ亦選舉權ヲ有ス(市町村制第十二條)選舉ノ方法ハ直接市町村稅納額ノ多少ニ由リ選舉人ヲ市ハ三級町村ハ二級ニ分チ市ハ每級各別ニ議員ノ三分ノ一町村ハ每級各別ニ議員ノ半數ヲ選舉セシム但シ被選舉人ハ同級内ノ者ニ限ラス各級ニ通シテ選舉セララル、コトヲ得(市町村制第十三條)而シテ其ノ權限ハ市町村條例規則市町村費ヲ以テ支辨スヘキ事業、豫算決算、市町村稅手数料、其ノ他夫役現品ノ賦課徵收ノ方法、基本財産ノ處分、市町村有財産營造物ノ管理方法等市町村ニ關スル一切ノ事件(市制第三十一條、町村制第三十三條)及ヒ法律勅令ニ依テ委任セララル、事件ヲ議決ス(市制第三十條、町村制第三十二條)法律勅令ニ依リ其ノ職權ニ屬スル市町村吏員ノ選舉ヲ行ヒ(市制第三十二條、町村制第三十四條)市町村ノ事務ニ關スル書類及ヒ計算書ヲ檢閲シ市町村長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理議決ノ施行並ニ支出ノ正否ヲ監査スル權

ヲ有シ(市制第三十三條)町村制第三十五條)市町村住民及ヒ公民權ノ有無選舉權及ヒ被選舉權ノ有無等ニ關スル訴願ヲ裁決スルノ權ヲ有ス(市制第三十五條)町村制第三十七條)

市會ノ議長及ヒ代理ハ一年ノ任期ヲ以テ議員之ヲ互選ス(市制第三十七條)町村會ノ議長及ヒ代理者ハ町村長及ヒ助役ヲ以テ之ニ充ツ(町村制第三十九條)市町村會ハ必要アル毎ニ議長之ヲ招集シ(市制第四十條)町村制第四十二條)又議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ(同上)及ヒ市會ニ在リテハ市長又ハ市參事會ノ請求アルトキ亦必ス之ヲ招集セサルヘカラス(市制第四十條)而シテ市町村會開會閉會及ヒ延期ヲ爲スハ議長ノ職權トス(市制第四十六條)町村制第四十八條)

### 第二市町村行政機關

市町村行政機關ニ付キテハ市ト町村トハ其ノ制ヲ異ニス市ニ在リテハ合議制市參事會市ノ行政ヲ處理シ(市制第六十四條)町村ニ在リテハ

町村長之ヲ處理ス(町村制第六十八條)町村助役ハ其ノ補助役タリ(町村制第七十條)市參事會ハ市長助役及ヒ名譽職參事會員ヲ以テ組織ス(市制第四十九條)市長ハ其ノ議長トナリ且ツ之ヲ代表シ(市制第六十七條)市會ノ議決ニ基キ助役及ヒ時トシテハ參事會員ノ補助ヲ以テ諸般ノ事務ヲ處理ス(市制第六十九條)市町村ノ收入ヲ受領シ其ノ費用ノ支拂ヲ爲シ其ノ他會計事務ヲ掌ラシムルカ爲メ收入役ヲ置キ(市制第五十八條)第七十條)町村制第六十二條)第七十一條)庶務ヲ處理セシムルカ爲メ書記其ノ他必要ノ吏員ヲ置ク(市制第五十九條)第七十一條)町村制第六十三條)第七十二條)又處務ノ便宜ノ爲メ市町村ヲ數區ニ分チ每區ニ區長及ヒ代理者一名ヲ置キ(市制第六十條)第七十二條)町村制第六十四條)第七十三條)又臨時若クハ常設委員ヲ置クコトヲ得(市制第六十一條)第七十三條)町村制第六十五條)第七十四條)而シテ明治二十二年三月法律第十二號ヲ以テ三府ノ市參事會ハ府知事書記官及ヒ名譽職參事會

員ヲ以テ組織シ市長及ヒ助役ヲ置カス市長ノ職務ハ府知事之ヲ行ヒ助役ノ職務ハ書記官之ヲ行フ其ノ他收入役書記及ヒ附屬員ヲ置カス府廳ノ官吏其ノ職務ヲ行フ市參事會及ヒ町村長ハ市町村會ノ議事ヲ準備シ一切ノ行政事務ヲ處理シ吏員ノ監督及ヒ懲戒ヲ行フノ外其ノ他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依リテ委任セラレタル事項ヲ處理ス(市制第六十四條町村制第六十八條)

市長及ヒ町村長ハ自治體ノ機關タルノ外司法警察補助官タル職務及ヒ法律命令ニ依テ其ノ管理ニ屬スル地方警察ノ事務等ヲ管掌ス(市制第七十四條町村制第六十九條)市長及ヒ助役ハ有給吏員トシ(市制第五十條第五十二條)町村長及ヒ助役ハ元來名譽職ナレトモ町村條例ヲ以テ特ニ俸給ヲ與フルコトヲ得(町村制第五十五條第五十六條)收入役書記ハ有給吏員トス(市制第五十二條第五十八條第五十九條)町村制第六十二條第六十三條)

市町村有財產

市町村有財產

市町村ハ其ノ不動產積立金穀其ノ他目的ノ定マラサル臨時ノ收入等ヲ以テ基本財產トシ之ヲ維持スルノ義務アリ(市町村制第八十一條)而シテ市町村有財產ハ市町村ノ爲ニ之ヲ管理シ及ヒ共用スルニ在リ然レトモ民法上ノ關係ヲ有スル者アルトキハ其ノ權利ヲ侵スコトナシ(市町村制第八十二條)又舊來ノ慣行ニ仍リ市町村住民中特ニ其ノ市町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市町村ノ議決ヲ經サレハ其ノ舊慣ヲ改ムルヲ得ス(市町村制第八十三條)而シテ市町村ノ土地物件ヲ使用セントスル者アルトキハ市町村條例ヲ以テ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ市町村住民ニ其ノ權ヲ得セシムルコトヲ得(市町村制第八十四條)凡テ是等ノ使用權ハ民法上ノ權利ニ基カサル限リハ市町村ニ必要ナル場合ニ於テ之ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得(市町村制第八十六條)凡テ市

町村有財産ノ賣却貸付又ハ工事ノ請負物品ノ調達ハ公入札ニ付スルヲ通則トス(市町村制第八十七條)

市町村ノ收入

市町村ハ其ノ財産及ヒ營造物ノ使用ニ付キ又ハ特ニ數個人ノ爲ニスル事業ニ付キ使用料又ハ手数料ヲ徴收スルコトヲ得(市町村制第八十九條)其ノ租稅及ヒ夫役現品ヲ賦課徴收スルハ財産ヨリ生スル收入使用料其ノ他法律勅令ニ依リ市町村ニ屬スル收入ニシテ支出ニ不足ナル場合ニ限ル(市町村制第八十八條)租稅ノ種類ハ國稅又ハ府縣稅ノ附加稅及ヒ直接間接ノ特別稅市町村制第九十條ニシテ之ヲ課スルニハ各一定ノ制限アリ(財務行政地方稅ノ部參照)現品及ヒ夫役ヲ賦課スルハ公共ノ事業ヲ起シ又ハ公安ヲ維持スルノ場合ニ限リ且ツ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市町村稅ヲ準率トシテ之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス夫役ハ普通ノ勞役ニ限リ之ヲ課セラレタル者ハ適當ノ代人ヲ出タシ

市町村ノ豫算

又急迫ノ場合ヲ除ク外金錢ヲ以テ之ニ代フルヲ得(市町村制第一百一條)市町村ニ於テ一時借入金ヲ爲スノ外公債ヲ募集スルハ従前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ變災等臨時ノ支出若クハ團體ノ永久ノ利益トナルヘキ支出ヲ要スルニ當リ通常ノ歳入ヲ増加スルトキハ其ノ住民ノ負擔ニ堪ヘサル場合ニ限ル市町村會ノ議決ニ依リテ募集方法利息ノ定率及ヒ償還ノ方法ヲ定メ其ノ償還ノ初期ハ三年以内トシ年々償還ノ歩合ヲ定メテ三十年以内ニ還了スルヲ要ス(市町村制第六六條)

市町村ノ豫算

市參事會町村長ハ每會計年度收入支出ノ豫知シ得ヘキモノニ付キ豫算ヲ調製シ年度前市町村會ノ議決ニ付シ之ヲ第一次監督官廳ニ報告シ地方慣行ノ方法ヲ以テ其ノ要領ヲ公告スルモノトス(市町村制第七條)第七條)又豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市町村會ノ認定ヲ經テ之ヲ支出スルコトヲ得但シ此ノ場合ニハ市町村會ノ會テ



市町村ノ決算

否決シタル費途ニ充ツルヲ得ス(市町村制第九條)

市町村ノ決算

収入役ハ會計年度後三個月以内ニ決算ヲ結了シ證書類ヲ併セテ市參事會町村長ニ提出ス市參事會町村長ハ之ニ意見ヲ付シテ之ヲ市町村會ノ認定ニ付ス其ノ認定ヲ得タルトキハ市町村長之ヲ第一次監督官廳ニ報告ス(市町村制第一百十二條)

市町村各部ノ行政

市町村内區及ヒ各部ノ行政

市町村内ノ一區又ハ一部ニシテ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其ノ區限リ其ノ費用ヲ負擔スルトキハ上級團體ノ參事會ハ其ノ團體議會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發シテ其ノ財産及ヒ營造物ニ關スル事務ノ爲ニ區會ヲ設クルコトヲ得其ノ事務ノ執行ハ市參事會町村長之ヲ管理ス(市制第一百三條、第一百四條、町村制第一百四條、第一百五條)

町村組合

町村組合

町村組合ハ數町村ノ事務ヲ共同處分スル爲メ數町村ノ協議ニ依リ監督官廳ノ許可ヲ得テ成立ス又法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘサル町村ニシテ他ノ數町村ト協議整ハサルカ又ハ合併ヲ不便ト爲ストキハ郡參事會ノ決議ヲ以テ數町村ノ組合ヲ設ケシムルヲ得(町村制第一百六條)町村組合ハ監督官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ解クコトヲ得ス(町村制第一百八條)

市町村行政監督

市町村行政監督

市ニ在リテハ第一次ニ府縣知事第二次ニ内務大臣トシ町村ニ在リテハ第一次ニ郡長第二次ニ府縣知事第三次ニ内務大臣トス(市制第一百五條、町村制第一百九條)而シテ監督官廳ハ市町村行政ノ法律命令ニ背戻スルヤ其ノ事務錯亂澁滞セサルヤ否ヤヲ監視ス之カ爲メ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及ヒ決算等ノ書類帳簿ヲ徴シ并ニ實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納檢閲ノ權ヲ有ス(市制第一百七條、町村

制第二百一十一條其ノ他監督ノ方法ニ付キ今明文ヲ以テ規定スルモノヲ舉クレハ即チ左ノ如シ

(一)市町村ノ處分ニ對スル訴願及ヒ行政訴訟

市町村事務ノ多數ノ場合ニハ町村ノ處分ニ對シテハ郡參事會市ノ處分ニ對シテハ府縣參事會ニ訴願ヲ許シ(市制第八條第四項第二十九條第三十五條第六十四條第一第二項第七十八條第五條第二百二十四條町村制第八條第四項第二十九條第三十七條第六十八條第一第二項第七十八條第五條第二百二十八條)別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市町村ノ行政ニ關スル郡長若クハ郡參事會又ハ府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分ニ對シテハ府縣參事會府縣知事內務大臣ニ訴願ヲ許ス又明文ヲ以テ出訴ヲ許シタル場合ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得(市制第十六條町村制第二百十條)又明治二十三年十月法律第五百五號訴願法同年同月法律第六號行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判同年

六月法律第四十八號行政裁判法等ニ依リ訴願又ハ出訴スルコトヲ得ルモノトス

(二)違法越權又ハ公益ヲ害スル決議

市會又ハ町村會ニ於テ斯ノ如キ決議ヲ爲セシトキハ市參事會又ハ町村長ハ其ノ執行ヲ停止シテ更ニ再議ヲ要求シ尙ホ之ヲ改メサルトキハ府縣參事會又ハ郡參事會ニ裁決ヲ請フモノトス(市制第六十四條町村制第六十八條)而シテ市參事會ノトキハ市長モ亦之ニ對シテ府縣參事會ノ裁決ヲ請フモノトス(市制第六十五條)

(三)市町村會ノ決議ノ認可

市町村條例ヲ設ケ又ハ或貴重ノ動産ヲ處分スルカ如キハ內務大臣ノ許可時トシテハ勅裁ヲ要シ租稅ノ賦課公債ノ募集等財政上重要ノ事項ヲ決定スル場合ニハ內務大臣ノ許可ヲ要シ財產及ヒ營造物ノ管理又ハ處分或ハ輕易ナル負擔ノ賦課ノ如キハ上級團體ノ參事會

ノ許可ヲ受クルヲ要ス(市制第二百一十一條、第二百二十二條、第二百二十三條、町村制第二百五條、第二百二十六條、第二百二十七條)

(四) 市町村會市參事會ノ義務ニ屬スル事項ヲ議決セザルトキノ代理議決及ヒ命令

市會市參事會又ハ町村會ニ於テ其ノ義務ニ屬スル事項ヲ議決セザルトキハ府縣參事會又ハ郡參事會代リテ之ヲ議決ス(市制第一百十九條、町村制第二百二十三條)市町村ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ命令スル所ノ支出ニ關スルトキハ府縣知事又ハ郡長ニ於テ其ノ費目ヲ豫算ニ加ヘ又ハ臨時支出ヲ命ス(市制第一百十八條、町村制第二百二條)

(五) 市町村吏員ノ認可

市長ノ選舉ハ認可ヲ要シ(市制第五十條)市ノ助役(市制第五十二條)收入役(市制第五十八條)町村長及ヒ助役(町村制第五十九條)選舉ハ府縣知事

ノ認可ヲ要シ(町村制第六十二條)若シ其ノ認可又ハ認可ヲ得ザルトキハ更ニ選舉ヲ行ハシメ其ノ選舉ニシテ仍ホ市長ノ認可若クハ町村長助役ノ認可ヲ得ザルトキハ追テ推薦セシメ又ハ選舉セシムルモノトシテ其ノ間内務大臣又ハ府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市町村ノ負擔ヲ以テ官吏ヲ派シ其ノ市町村長ノ職務ヲ代リ行ハシム(市制第五十條、町村制第六十一條)

(六) 市町村會ノ解散

内務大臣ハ市町村會ノ解散ヲ行フコトヲ得而シテ新ニ市會又ハ町村會ノ成立スルニ至ルマテ府縣參事會又ハ郡參事會之ニ代リテ一切ノ事務ヲ議決ス(市制第二百十條、町村制第二百十四條)

(七) 市町村吏員ノ懲戒

市町村吏員ニ對シテ懲戒ヲ行フハ府縣知事、郡長及ヒ市町村ノ行政機關ニシテ懲戒ノ方法ハ譴責及ヒ過怠金ノ二種トシテ重大ノ過失ニ

由リ職務ヲ解ク場合ニハ上級團體ノ參事會ニ於テ懲戒裁判ヲ開キテ判決ス(市制第六十四條、第二百二十四條、町村制第六十八條、第二百二十八條)市町村ノ吏員ニシテ其ノ職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エ爲ニ市町村ニ對シ賠償スヘキトキハ上級團體ノ參事會之ヲ裁判ス其ノ裁判ニ不服ノ者ハ行政訴訟ヲ起スコトヲ得(市制第二百五條、町村制第二百二十九條)

明治二十九年三月勅令第十九號ヲ以テ沖繩縣區制ヲ公布ス(町村制第三百三十二條參照)同年三月內務省令第二號ヲ以テ始メテ沖繩縣ニ區制ヲ施行ス區制ハ第一章總則第一款區及ヒ其ノ區域第二款區住民及ヒ其ノ權利義務第三款區條例及ヒ區規則第二章區行政第一款區吏員ノ組織及ヒ選任第二款區長區書記及ヒ區吏員ノ職務權限第三款給料及ヒ給與第三章區會第一款組織及ヒ選舉第二款職務權限及ヒ處務規定第四章區ノ財務第一款區有財產及ヒ區稅第二款區ノ歲入出豫算及ヒ

決算第五章區内一部ノ行政第六章區行政ノ監督第七章附則ヲ規定シ沖繩縣ノ區ニ施行ス(第一條)而シテ區ハ郡ノ區域ニ屬セス一ノ行政區畫ニシテ法人トス法律命令ヲ以テ定メタル範圍内ニ於ケル公共事務從來法律命令若クハ慣例ニ依リ又ハ將來法律命令ニ依リ區ニ屬スル事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ之ヲ處理スルモノトス(第二條)而シテ本制規定ハ市町村制ノ規定ト行政組織ト行政監督ヲ除ク外ハ同一ナリ故ニ此ニハ其ノ特別ナル規定ヲ擧ク

區ノ區域ノ變更ハ內務大臣又ハ沖繩縣知事之ヲ定ムルモノトシ(第三條)公民權ニ關スル特免ハ沖繩縣知事ノ認可ヲ要シ且ツ名譽職ノ拒辭等ニ關スル規則ハ內務大臣之ヲ定メ區會ノ議決ニ依リ其ノ規則ニ公民權停止區稅負擔ヲ增加セシムル等ノ規程ヲ設クルコトヲ得ルモノトセリ(第五條)而シテ行政組織ハ大ニ注意スヘキモノアリ同年三月勅令第十四號ヲ以テ區ニ區長區書記ヲ置キ又其ノ外必要ノ附屬員ヲ置

キテ區長之ヲ任免シ收入役ハ區書記中ニ就キ沖繩縣知事之ヲ命ス(第八條第九條)區長ハ區ヲ統轄シ其ノ行政事務ヲ擔任ス其ノ事務ノ概目ハ區條例及ヒ區規則ノ設定、營造物管理方法ヲ定メ收入役及ヒ區吏員ノ身元保證金ヲ徵スル等ノ外ハ市參事會町村長ニ同シト雖モ其ノ區會ニ對スル職權強大ナリトス(第十二條第十三條第十四條第十五條)區書記ハ庶務ニ從事スルノミナラス區ノ行政事務一部ヲ臨時代理ス(第十七條)又區ヲ數部ニ分チ每部ニ部長及ヒ其ノ代理者ヲ置キ部内ニ關スル國ノ行政及ヒ區ノ行政ニ付區長ノ事務ヲ補助執行センムルコトヲ得ルモノトス(第十條第十九條)臨時若クハ常設ノ委員ハ區會之ヲ選舉ス(第十一條)而シテ部長及ヒ代理者並ニ委員ハ實費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得ルモノトシ(第二十二條)有給吏員ノ給料旅費ハ當分國庫ヨリ支給スルモノトス(第二十五條)又區役所ノ處務規程區吏員ノ服務紀律ハ沖繩縣知事之ヲ定メ區吏員ノ處務規程ハ沖

繩縣知事ノ許可ヲ得テ區長之ヲ定メ(第二十一條)區會ノ會議及ヒ傍聽ノ紀律並ニ取締ニ關スル規則ハ內務大臣之ヲ定メ(第五十七條)其ノ書記ハ區長之ヲ命ス(第五十九條)又區ハ區規程ヲ設ケ或ル事業ニ對シ特別ノ基本財産等ヲ設クルヲ得(第六十條)沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ公共團體若クハ一個人ノ事業ニ對シ寄附補助ヲ爲スコトヲ得ルノ明文ヲ設ケ(第六十四條)區債ノ限度ヲ定メ(第七十七條)豫算ノ追加若クハ更正繼續費費目流用等ニ關スルコトヲ定ム(第七十九條)第八十條)出納閉鎖ノ期限、收入役決算提出ノ時期ヲ定メ(第八十三條)部會ノ組織選舉等ハ沖繩縣知事之ヲ定ムルモノトス(第八十四條)而シテ區會ノ議決ニシテ違法越權等ニ關スルモノハ區長又ハ監督官廳之ヲ再議セシムル外之カ取消ヲ命スルモノトシ公益ニ關スル場合ハ唯再議ニ付ス(第十三條)又必要ノ收支ヲ否決シ若クハ不當ノ削減ヲ爲シタルトキハ再議ニ付シ仍ホ其ノ議決ヲ改メサルトキハ沖繩縣知事ニ具狀シテ指揮ヲ請ヒ

又場合ニ由リテハ再議ニ付セスシテ直ニ指揮ヲ請フコトヲ得第十四條區會招集ニ應セス若クハ成立セサルトキ又ハ議了スハキ事件ヲ議決セス若クハ議了セサルトキハ區長ハ沖繩縣知事ニ具狀シテ指揮ヲ請ヒ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スルコトヲ得第十五條監督官廳ハ區行政ヲ監督スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又處分ヲ爲スコトヲ得内務大臣ハ沖繩縣知事ノ區行政ニ關シテ爲シタル命令若クハ處分ヲ停止シ若クハ取消スコトヲ得ルノ規定ヲ設ク(第八十八條)沖繩縣知事ハ區ノ豫算ニ不適當ノ支出ト認ムルモノアルトキハ之ヲ削減スル等ノ規定ヲ設ク(第八十九條)沖繩縣知事ハ十日以内ニ於テ區會ノ停會ヲ命スルノ權アリ(第九十條)

明治三十年三月勅令第五十六號ヲ以テ沖繩縣間切、島、吏員規程ヲ定ム本規程ハ間切、島團體ノ行政組織ニ關スル規定ニシテ自治制ノ一部分ナリトス間切、島ニ施行ス

間切ニ間切長、收入役、書記ヲ置キ間切内ノ一村ニ村頭ヲ置キ又一定ノ島ニ島長、收入役、書記ヲ置キ沖繩縣知事之ヲ任免ス(第一條)第二條、第三條、第四條、第二十一條)而シテ間切長及ヒ島長ハ上司ノ指揮監督ヲ承ケ部内ヲ統轄シ法律命令若クハ慣例ニ依リ其ノ行政事務ヲ擔任ス書記ハ庶務ニ從事シ收入役ハ會計事務ヲ掌トル間切ノ村頭ハ村内ニ間切長ノ事務ヲ補助執行シ又ハ其ノ事務ノ一部ノ委任ヲ受クルコトヲ得島モ亦村頭ヲ置クコトヲ得(第八條、第九條、第十一條、第二十一條)間切及ヒ島ハ附屬員ヲ置クコトヲ得(第六條、第二十一條)附屬員ハ間切長、島長又ハ村頭ニ屬シ庶務ニ從事シ(第十二條、第二十一條)委員ハ間切長ノ事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ臨時其ノ事務ヲ處辨ス(第十三條)而シテ間切島吏員ノ給料旅費其ノ他報酬ハ間切島ノ負擔トス是等ノ支給額支給方法ハ監督官廳之ヲ定ム然レトモ國庫ハ常分有給吏員ノ給料旅費ハ間切島ニ支給ス(第三章及ヒ第

二十一條

明治三十年五月勅令第五百十八號北海道區制同年五月勅令第五百十九號北海道一級町村制同年五月勅令第六十號二級町村制ヲ發布ス共ニ北海道ニ於ケル區町村ノ自治ノ機能ヲ認定スル重要ノ法令ナリトス然レトモ未タ之ヲ實施セス而シテ此等ハ公民權ノ資格ニ關スル條件其ノ他二三ノ規定ヲ除ク外沖繩縣區制ト相同シ

第二章 官吏

官吏

維新以前ニ在リテハ官吏ハ武士以上ノ階級ノ專有スル所ニシテ諸侯ハ其ノ領地ヲ世襲シ之ニ屬スル武士ニモ世襲ノ家祿アリ又其ノ職務若クハ功勞ニ應シテ一身ニ屬スル祿ヲ給セラレ、者アリ封建制度ノ廢止ニ伴ヒ文武共ニ一般人民ヨリ任用シ諸侯及ヒ武士ハ其ノ領地俸祿ニ應シテ公債證書ヲ下付セラレ是等ノ階級の特權ハ全ク消滅スルニ至レリ唯維新ノ初メ三職即チ總裁、議定、參與ノ職ハ親王、公卿、諸侯（參ハ徵士亦任之）ニ非ザレハ任用スルヲ得ストセシカ此ノ規定ハ間モナク廢止セラレ、以來日本臣民ハ身分ノ高下ニ係ハラズ一般ニ文武官ニ任用セラレ、コト、ナリ明治二十二年ニ至リ憲法ノ明文ヲ以テ此ノ點ヲ確保セリ今左ニ官吏ニ關スル制度ノ主ナル點ニ就キ其ノ沿革ヲ示ス

### 第一節 官吏ノ任用

#### 第一 官吏任用

官吏任用ノ沿革

明治元年二月三職八局ノ職制ヲ定ム、其ノ徵士貢士ノ任用ヲ規定スラク、諸藩士及ヒ都鄙有才ノ者公議ニ執リ拔擢セラル、則徵士ト命ス、參與職各局ノ判事ニ任ス、又其ノ一官ヲ命シテ參與職ニ任セサル者アリ、在職四年ニシテ退ク、廣ク賢才ニ讓ルヲ要トス、若シ其ノ人當器尙ホ退クヘカラサル者ハ又四年ヲ延テ八年トス、衆議ニ執ルヘシ、同二年五月ノ詔ニ曰ク、朕惟ニ治亂安危ノ本ハ任用其人ヲ得ト不得トニアリ故ニ今敬テ列祖ノ靈ニ告テ公選ノ法ヲ設ケ更ニ輔相議定參與ヲ登庸ス、ト其ノ後間モナク是等ノ制度廢セラレ、同年七月職員令附官位相當表ヲ定メラレ、君主ノ直接ニ任用スルモノト長官ヨリ奏薦シ旨ヲ承ケテ任用スルモノト長官ノ權限ヲ以テ專行スルモノトノ區別ヲ立テシモ、之ニ

官吏任用ノ詔

一般ノ任用資格

關スル細密ノ規定ヲ設ケシハ明治十九年三月勅令第六號ノ官等俸給令ニ在リ此ノ勅令ニ據レハ勅任官奏任官ハ高等官ト稱シ、勅任官ノ中親任式ヲ以テ敍任シ任命ノ辭令書ニ内閣總理大臣ノ副署ヲ要スルモノヲ特ニ親任官ト名シク奏任官ノ任用ハ内閣總理大臣又ハ同大臣ヲ經由シテ各省大臣之ヲ奏薦シ、内閣總理大臣ハ旨ヲ承ケテ之ヲ宣行ス判任官ノ任用ハ各省大臣地方長官等ノ本屬長官之ヲ專行ス官等ヲ進級スルニハ高等官ハ五年判任官ハ二年又ハ三年間在職ノ後ナラサルヘカラス、但シ每等定員ヲ限ルモノハ成規ノ年限ヲ經過スルモ闕員アルニ非サレハ進級スルヲ得ストシ其ノ後多少ノ改正ヲ加ヘシカ大體ニ於テ異ナル所ナク唯官等進級年限ヲ改メ一般ニ之ヲ短縮シ且ツ新ニ奏任官ニ任用スルニハ一定ノ等級以上ニ至ルヲ得ストシタリ

#### 第二 任用資格

甲、一般ノ資格 明治三年十二月ノ刑法新律綱領ニ於テハ官吏ニシテ



徒刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル者ハ免職シテ後一年ヲ經サレハ再ヒ任用スルヲ得ストセシカ、同九年四月達第三十四號及ヒ同三十二年三月勅令第六十三號官吏懲戒令ニ於テハ懲戒ニ由リ免官セラレタル者ハ二年以上ヲ經過セサレハ再ヒ任用スルコトヲ得ストシ、又現行刑法ニ於テ一定ノ刑ヲ受ケシ者ニ科スル能力刑ノ中ニ官吏トナル能力ヲ剝奪又ハ停止スルコトヲ定メタリ

特別ノ任用資格

乙、特別ノ資格 一般文官ノ任用ニ付キ、特別ノ資格ヲ要スルニ至リシハ明治二十年ノ文官試験規則ヲ以テ始トス、此ノ規則ニ依レハ新ニ文官ト爲ルニハ勅任官ハ特別ノ資格ヲ要セスト雖モ、奏任官、判任官ハ各其ノ登用試験ニ及第シタル者ヨリ採用シ、奏任官ニ在テハ三年間試験トシ判任官ニ在テハ二年間見習トシ實務ヲ練習セシメタル後ニ非サレハ之ヲ本官ニ任用スルヲ得ス、但シ大學教授ハ登用試験及ヒ實務練習ヲ經ス、又在職ノ判任官ニシテ高等官試験ニ及第シタル者ハ實務練

習ヲ經スシテ直チニ奏任本官ニ任用スルヲ得、法科大學卒業生及ヒ法學博士ハ試験ヲ要セスシテ直チニ奏任官試験補ト爲スヲ得、官立中學校及ヒ一定ノ公私ノ法律學校卒業生ハ試験ヲ要セスシテ直チニ判任官見習トシ、又本法施行前二年以上各官廳ニ雇員タリシ者ニシテ本屬長官ノ事務ニ熟練シタリト認ムル者ハ試験ヲ經スシテ直チニ判任官トスルコトヲ得トシ、其ノ後數多ノ單行法ヲ發シテ特別任用ノ場合ヲ規定セリ、明治二十二年發布ノ憲法ニ依リ裁判官ノ資格ニ關スル規定ハ法律ヲ以テ定ムルコト、ナリ、翌年二月法律第六號ノ裁判所構成法ヲ以テ舊法ト略ホ同様ノ規定ヲ設ク、二十六年十月勅令第百八十三號ヲ以テ行政官ノ任用ニ付キ舊法ヲ改正ス、其ノ舊法ト異ナル要點ハ本官ニ任用スルニ先チテ必シモ試験補トスルコトヲ要セス、奏任官ニ在リテハ實際上多數ノ場合ハ先ツ之ヲ判任官又ハ試験補トシテ實務ヲ練習セシム、任用資格ハ奏任官ニ在リテハ文官高等試験合格者ノ外、滿三年以

上判事、検事タリシコト又ハ特別任用法ニ依ラスシテ高等文官ノ職ニ在リシコトヲ要シ判任官ニ在リテハ文官普通試験合格者ノ外高等文官試験合格者官立中學校其ノ他一定ノ學校ノ卒業生又ハ特別任用法ニ依ラスシテ滿三年以上文官ノ職ニ在リシ者タルヲ要ス但シ教官技術官其ノ他特別ノ學術技藝ヲ要スル文官ハ試験委員ノ銓衡ヲ經テ直チニ奏任又ハ判任官ニ任用スルヲ得ヘク五年以上同一ノ官廳ニ勤務シタル者モ同一ノ手續ニ由リテ之ヲ判任官ニ任用スルヲ得然レトモ此等ノ特別資格ニ由リ任用セラレタル者ハ直チニ之ヲ他ノ文官ニ任用スルヲ得ストシ更ニ二十六年十月勅令第九十七號ヲ以テ文官試験規則ヲ定メ試験ニ關スル規程ヲ定ム其ノ大要ヲ舉クレハ試験ヲ分チテ文官高等試験及ヒ文官普通試験ノ二トシ成年以上ノ男子ニシテ左ノ資格ニ該當セサル者ハ文官試験ヲ受クルコトヲ得一重罪ヲ犯シタル者(但國事犯ニシテ復權ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス)ニ定役ニ服ス

ル輕罪ヲ犯シタル者、三破産若ハ家資分産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ未タ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者トス、受験者ハ手数料トシテ高等試験ニ在リテハ金拾圓、普通試験ニ在リテハ金二圓ヲ納メシム文官高等試験ヲ分テ豫備試験、本試験トシ豫備試験ニ合格シタル者ニ非サレハ本試験ヲ受クルヲ得サルコト、シ帝國大學法科、舊東京大學法學部文學部及ヒ舊司法省法學部ノ卒業證書ヲ有スル者ハ豫備試験ヲ免ス豫備試験ハ論文試験並論文ニ關聯スル口述試験及ヒ迅速作文試験ノ二次トシ本試験ヲ受クルニ相當ナル學科ヲ修メタルヤ否ヲ考試スルヲ以テ目的トシ本試験ハ學理上ノ原則及ヒ現行法令ニ通曉シ並修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能否ヲ考試スルヲ目的トス、本試験ノ科目ハ憲法、刑法、民法、行政法、經濟學、國際法ノ六種ニシテ此ノ他尙ホ受験者ヲシテ財政學、商法、刑事訴訟法及ヒ民事訴訟法ノ四科目ニ付キ其ノ一種ヲ撰擇セシム普通試験ハ各官廳ノ須要ニ應

任用令ノ改正

シ尋常中學ノ科程ヲ標準トシ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シ文官普通試験委員ノ定ムル所ニ依ルコト、シ尙ホ其ノ後數多ノ單行法ヲ以テ行政官任用ニ付キ特別ノ試験ヲ要スル場合及ヒ特別ノ資格ヲ規定セリ。明治三十二年三月勅令第六十一號ヲ以テ文官任用令ヲ改ム本令ハ親任式ヲ以テ敍任シ及ヒ特別ニ設ケタル規程ニ依リテ任用スル者ノ外一般文官ノ任用ニ適用スルモノトス、今其ノ大要ヲ述ブレハ卽チ左ノ如シ

第一教官、技術官及ヒ特別ノ學術技藝ヲ要スル行政官以外ノ文官ノ任用資格

(一) 勅任文官

甲 一般勅任文官 勅任文官タリシ者ニシテ在職滿一年以上ナルカ又ハ一般奏任文官任用資格ヲ有スル者、高等官三等ノ奏任文官タリシ者(以上何レモ特別規程ニ依リ任用セラレシ者及ヒ教

官、技術官タラサルコトヲ要ス)又ハ滿二年以上勅任檢事タリシ者ハ一般ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

乙 特別勅任文官 滿二年以上勅任判事タリシ者ハ司法省ノ勅任文官ニ、滿二年以上帝國大學又ハ文部省直轄諸學校ノ勅任文官タリシ者ハ文部省部内ノ勅任文官ニ、陸海軍將官ハ別ニ任用規程アルモノ、外其ノ部内ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

(二) 奏任文官

甲 一般奏任文官 文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者、滿二年以上高等文官タリシ者(但シ特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル者及ヒ教官、技術官ノ在職年限ヲ除ク)又ハ滿二年以上檢事タリシ者ハ一般ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

乙 特別奏任文官 滿二年以上判事タリシ者ハ司法省ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

(三) 判任文官

甲 一般判任文官 文官普通試験又ハ文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者官公立中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以上ト認メタル官公立學校其ノ他一定ノ學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ滿二年以上文官タリシ者(但シ特別ノ規程ニ依リテ任用セラレシ者及ヒ教官技術官ノ在職年限ヲ除ク)ハ一般ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

乙 特別判任文官 滿五年以上雇員トシテ同一官廳ニ勤績シタル者ハ文官普通試験委員ノ詮衡ヲ經テ其ノ官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

第二教官技術官及ヒ特別ノ學術技藝ヲ要スル行政官ニ任用スル方法  
教官技術官ハ文官高等試験委員若クハ文官普通試験委員ノ詮衡ヲ經テ之ヲ高等文官若クハ判任文官ニ任用スルヲ得特別ノ

官吏ノ義務

學術技藝ヲ要スル行政官ハ前者ト同様ノ詮衡ヲ經テ教官技術官ノ中ヨリ若クハ其ノ試験委員カ教官技術官タルノ資格アリト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

第二節 官吏ノ義務

明治九年官吏懲戒例ノ制定ニ至ルマテハ刑法ニ於テ官吏ノ職務執行上故意又ハ過失ニ出ツル不當ノ行爲ニ付キ數多ノ場合ヲ規定シテ其ノ處分ヲ定メシト雖モ官吏ノ身分ニ伴フ義務ハ刑法ノ條文ヲ以テ盡シタルニ非ス、主トシテ長官ノ認定スル所タリ、唯明治八年ニ官吏ノ商業ニ従事スルヲ得サル義務ニ付キ其ノ範圍ヲ定メ、九年ノ懲戒例ニ於テ素行修ラスシテ官吏ノ體面ヲ汚カス者モ職務上ノ過失ニ準シテ懲戒スルコトヲ定メシカ、官吏ノ義務ニ關シ一般ノ規定ヲ設ケシハ明治十五年七月達第四十四號ノ服務規律ニ在リ、此ノ規定ニ依レハ官吏ハ

上官ノ命令ニ從ヒテ其ノ職務ヲ執行スルヲ要ス、官ノ機密ハ其ノ職ヲ退ク後ト雖モ之ヲ漏洩スルヲ得ス、官吏ノ行爲ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重ンスヘク、他人ノ請托ヲ受クルヲ得ス、又本屬長官ノ許可ナクシテ其ノ職務ニ關シ他人ノ贈遺ヲ受ケ及ヒ直接間接ニ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ職ニ從ヒ、又ハ擅ニ其ノ職役ヲ離ル、コトヲ得ストス、此ノ規定ハ本屬長官ノ命令ニ服従スルコト其ノ他一二ノ條項ヲ除キテハ凡テ司法官ニモ適用スルコト、シ、翌年官吏監督ノ爲メ全國ヲ五區ニ分チテ臨時巡察使ヲ派出シ各官署ヲ巡察セシムルコト、セリ

明治二十年七月勅令第三十九號ヲ以テ行政官ノ服務規律ヲ改正ス、是レ即チ現行法ニシテ其ノ改正ノ要點ヲ擧クレハ、官吏ハ天皇及ヒ天皇ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシテ其ノ職ヲ盡サ、ルヘカラス、職務上本屬長官ノ命令ニ服従スルノ義務アレトモ之ニ對シテ意見ヲ述フルノ自由アリ、本屬長官ノ許可ナケレハ裁判所ニ召喚セラレ、證人又ハ鑑

定ヲ命セラル、トキト雖モ官ノ秘密ヲ守ルノ義務アリ、外國政府ヨリ授與セントスル勳章其ノ他ノ贈遺ヲ受クルニハ天皇ノ裁可ヲ要シ、官廳ト請負供給等ノ契約ヲ爲シ又ハ官廳ヨリ補助金ヲ受クル者ト直接ニ關係アル職務ニ居ルノ官吏ハ此等ノ者ヨリ饗宴ヲ受クルコトヲ得ス、又私立ノ船舶鐵道會社ヨリ無償運送切符ヲ受クルヲ得ス、官吏及ヒ其ノ家族モ本屬長官ノ許可ヲ得サレハ直接間接ニ商業ニ從事スルコトヲ得ス、浪費シテ産ヲ破リ其ノ分ニ應セサル負債ヲ爲スコトヲ得ス、凡テ一部ノ長官タル者ハ其ノ下官ニ對シテ訓告シ若シ懲戒ヲ要スト認ムルトキハ之ヲ本屬長官ニ稟告セサルヘカラス

### 第三節 官吏ノ懲戒

明治三年十二月ノ刑法ハ官吏ニ對シテ普通ノ犯罪ニ付キ一般人民ヨリ寛刑ニ處セラル、ノ特權ヲ與ヘシカ其ノ職務ニ關係シ故意及ヒ過

行政官懲戒

失ニ出ツル數多ノ不當ノ行爲ハ過失ニ由ル普通ノ犯罪ト同シク自宅  
監禁及ヒ官等貶黜ニ處シ其ノ處分ノ手續モ普通ノ犯罪ノ場合ト異ナ  
ルコトナシ(刑法參照)明治六年六月太政官布告第二百六號ヲ以テ刑法  
ヲ改正スルニ至リ自宅監禁ヲ改メテ贖罪金ヲ科シ其ノ額ハ官等ノ高  
下ニ由リ金額ヲ異ニシ又官等貶黜ヲ改メテ罰俸ニ處スルコトセリ  
明治九年四月太政官布告第四十八號ヲ以テ官吏ノ職務上ノ過失ニ關  
スル規定ハ一切刑法中ヨリ削除シテ別ニ官吏懲戒例ヲ定ム是レ即チ  
現行法ニシテ明治二十三年ニ至ルマテハ之ヲ裁判官ニモ適用セシカ  
憲法ノ規定ニ依リ裁判官ノ懲戒及ヒ其ノ懲戒裁判所ノ構成ハ立法事  
項トセラレ同年八月別ニ法律ヲ以テ判事懲戒法ヲ定ム  
行政官懲戒(明治九年四月太政官布告第四十八號ニ依ル)  
懲戒ハ分チテ譴責、罰俸、免職ノ三種トシ譴責ハ本屬長官ヨリ譴責書ヲ  
付ス罰俸ハ俸給月額十分ノ一以上ニ於テ三個月以下ノ俸ヲ奪フ免職

ハ奏任官ノ場合ニハ奏請シテ之ヲ行ヒ位記ヲ返上セシメ免職後二年  
以上ヲ經過セザレハ再ヒ任用スルコトヲ得ス懲戒權ハ諸省所屬ノ奏  
判任官及ヒ府縣ノ奏任官ニ付テハ主務大臣之ヲ行ヒ府縣判任官ニ付  
キテハ地方長官之ヲ行フ官吏ノ行爲ニシテ刑法ニ觸ルモノト認ム  
ルトキハ本屬長官ヨリ先ツ告發ノ手續ヲ爲シ裁判所ニ於テ無罪ト判  
決ヲ下シタル場合ニ限り懲戒ヲ行フコトヲ得  
明治三十二年三月勅令第六十三號ヲ以テ文官懲戒令ヲ定ム本令ハ親  
任式ヲ以テ敘任スル官及ヒ法令ニ別段ノ規定アルモノ、外一般ニ適  
用スルモノニシテ蓋シ官吏法上ノ一大進步ナリ本令ニ依レハ官吏ノ  
懲戒ヲ受クヘキ場合ハ官吏カ職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リ  
タルトキ及ヒ職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ  
所爲アリタルトキニ限り懲戒ノ種類ハ免官、減俸及ヒ譴責ノ三種トス  
而シテ懲戒ヲ行フノ方法ハ勅任官ノ免官及ヒ減俸奏任官ノ免官ハ懲

戒委員ノ議決ヲ具シテ之ヲ奏請シ裁可ニ依リテ之ヲ行ヒ、奏任官ノ減俸、判任官ノ免官及ヒ減俸ハ懲戒委員ノ議決ニ依リテ本屬長官之ヲ行ヒ、譴責ハ本屬長官之ヲ行フ、而シテ懲戒委員會ハ分テ二種トシ一ハ文官高等懲戒委員會ニシテ高等官ノ懲戒ヲ議決スルモノトシ之ヲ組織スルニ委員長一人委員六人ヲ以テス委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所長官、勅任行政裁判所評定官、勅任判事其ノ他ノ勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リテ之ヲ命ス、此ノ外委員會ニハ幹事一人書記三人ヲ置ク他ノ一ハ文官普通懲戒委員會ニシテ判任官ノ懲戒ヲ議決スルモノトシ、内閣、樞密院、各省、臺灣總督府會計検査院、行政裁判所、警視廳、北海道廳、府縣、臺灣ノ縣及ヒ廳、貴族院及ヒ衆議院ノ事務局其ノ他各省大臣ニ於テ必要ト認ムル所轄官廳ニ之ヲ置ク、而シテ委員會ハ委員長一人委員二人乃至六人ヲ以テ組織シ之ニ書記二人ヲ付ス、委員長ハ概テ各官廳ノ長官ヲ以テ之ヲ充テ委員ハ當該官廳高等

官ノ中ヨリ本屬長官之ヲ任命スルヲ通則トス、懲戒ノ手續ハ本屬長官ニ於テ所部ノ官吏ニ懲戒スヘキ所爲アリト思料スルトキハ證據ヲ具ヘ書面ヲ以テ懲戒委員ノ審査ヲ要求シ、懲戒委員長ハ委員ヲ招集シテ審査ヲ爲シ委員會ニテ必要ト認ムルトキハ旅費ヲ給シテ本人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得ルモノトス

裁判官懲戒(明治二十三年八月法律第六十八號ニ依ル)

判事ヲ懲戒スルハ職務上ノ義務ニ違反シ又ハ職務ヲ怠リシ場合及ヒ官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ懲戒裁判所ニ於テ之ヲ決定ス、懲戒ハ分テ譴責、減俸、轉所、停職及ヒ免職ノ五種トシ減俸ハ一月以上一年以下月額ノ三分ノ一以内ヲ減シ、轉所ハ他ノ裁判所又ハ他ノ職ニ轉セシメ、停職ハ三個月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止シ、免職セラレタル者ハ恩給ヲ受クルコトヲ得ス、懲戒裁判所ハ各控訴院及ヒ大審院ニ之ヲ置キ其ノ院ニ屬スル判事ノ一定數ヲ以テ合議體

ノ組織ト爲シ、之ニ檢事ヲ附ス、大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院判事、控訴院ハ院長及ヒ部長ニ對シテハ第一審ニシテ終審タリ、其ノ他ノ者ニ對スル場合ハ終審タリ、懲戒裁判所ハ懲戒事件カ轉所停職又ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ其ノ職權ニ依リ又ハ檢事ノ申立ニ依リテ裁判手續ノ終結ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得、被告ハ此ノ決定ニ對シテ上訴ヲ爲スコトヲ得、懲戒裁判所ノ言渡シタル減俸、停職、轉所及ヒ免職ノ決定ハ司法大臣之ヲ執行ス、判事ニシテ刑事裁判ニ付セラレ官職ノ喪失ヲ惹起サ、ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ更ニ懲戒ヲ行フコトヲ得ルモノトス

官吏ノ權利

第四節 官吏ノ權利

第一款 官吏ノ地位ニ對スル權利

司法及ヒ行政裁判所ニ於ケル裁判官及ヒ會計検査院ニ於ケル検査官ハ法律ノ規定ニ依ルノ外其ノ意ニ反シテ官ヲ免セラル、コトナク、又武官モ其ノ地位ヲ保障セラルト雖モ一般文官ニ至リテハ從來自由ニ免官非職又ハ貶等セラレ、爲ニ安シテ其ノ職ニ盡ス能ハサルノ弊アリキ、是ヲ以テ明治三十二年三月勅令第六十二號ヲ以テ文官分限令ヲ定ム、本令ハ親任式ヲ以テ敘任スル官、公使、秘書官及ヒ法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外一般ノ文官ニ適用セラル、モノニシテ、官吏ヲ免官スルハ第一刑法ノ宣告、第二懲戒ノ處分、第三不具廢疾ニ因リ又ハ身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ其ノ職務ニ堪ヘサルトキ、第四傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ免官ヲ願出タルトキ、官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキニ限ル而シテ第三ノ理由ニ因リ免官スルニハ高等官ニ在リテハ文官高等懲戒委員會、判任官ニ在リテハ文官普通懲戒委員會ノ審査ニ付ス、委



員會ニハ顧問醫ヲ置キ本令ニ依リテ審査ヲ爲スニハ豫メ顧問醫ノ意見ヲ徵スルヲ要ス、官吏ハ廢官、廢廳ノ場合及ヒ官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタル爲メ若クハ官廳事務ノ都合ニ因リ必要ナル爲メ休職ヲ命セラレ滿期ニ至リタル場合ニハ當然退官者トス、官吏ハ其ノ意ニ反シテ同等官以下ニ轉官セラル、コトナシ、官吏ニ休職ヲ命スルコトヲ得ルハ第一懲戒令ノ規定ニ依リ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ、第二刑事事件ニ關シ告訴又ハ告發セラレタルトキ、第三官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ、第四官廳事務ノ都合ニ因リ必要ナルトキニ限リ、其ノ期間ハ第一、第二ノ場合ニハ其ノ事件ノ懲戒委員會又ハ裁判所ニ繫屬中トシ、第三、第四ノ場合ニハ滿三年トス、休職者ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セス、第一、第三、第四ノ理由ニ因ル休職者ニ對シテハ本屬長官ハ何時ニテモ事務ノ都合ニ依リ復職ヲ命スルコトヲ得、休職者ハ其ノ休職中俸給ノ三分ノ一ヲ給セラル、免官ヲ

行フハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣奏任官ニ在リテハ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官奏請シ裁可ニ依リテ之ヲ行ヒ、休職ハ勅任官ハ内閣總理大臣奏請シ裁可ニ依リテ行ヒ、奏任官ニ在リテハ内閣總理大臣ノ認可ヲ經テ本屬長官之ヲ命ス、其ノ復職ヲ命スルノ手續亦同シ

官吏財産ニ對スル權利

### 第二款 官吏ノ財産ニ對スル權利

官吏ハ試補、見習、名譽領事等ノ外一般ニ俸給ヲ受ク、休職官吏ハ其ノ休職中本俸ノ三分ノ一ヲ受ク、又公務ノ爲メ旅行ヲ爲ストキハ旅費、公務ヲ行フ爲メ特ニ費用ヲ要スルトキハ其ノ實費辨償、公務ノ爲メ病傷ヲ得タルトキハ手當ヲ給セラレ、退官シタルトキハ其ノ在職年數ノ長短ニ依リ一時退官賜金若クハ終身恩給ヲ受ケ、又官吏ノ死亡後其ノ遺族ハ終身又ハ一時ノ給與ヲ受クルノ權アリ、今此ニハ退官者ノ恩給及ヒ官吏ノ遺族扶助料ニ關スル一般ノ規定ノ沿革ヲ示スニ止ム

恩給

第一 恩給

巡查看守ノ恩給法ハ明治六年十一月達第三百九十二號ヲ以テ逕卒番人賞與規則ヲ定メ同十五年七月達第四十一號ヲ以テ巡查看守救助例ヲ定ム軍人恩給法ハ同八年四月達第四十八號ヲ以テ陸軍武官救助概則及ヒ同年達第四百四十八號ヲ以テ海軍退隱令ヲ定メ同二十三年六月法律第四十五號ヲ以テ軍人恩給法ヲ制定セラレ、又一般文官モ退官ノ時ニ一時賜金ヲ與フルノ規定ハ夙ニ存セシト雖モ、其ノ終身恩給ノ制ヲ設ケシハ明治十七年一月達第一號ヲ以テ始トス、今其ノ要點ヲ擧クレハ恩給ハ俸給ヲ得テ奉職シタル官吏ニ其ノ退官後終身給與スルモノニシテ、之ヲ受クルノ權利アル者ハ左ノ如シ

- (一) 滿十五年以上在官シテ年齢六十歳ニ及ヒ退官シタル者及ヒ年齢六十歳ニ至ラスト雖モ官府ノ廢止變更ニ因リ、又ハ不治ノ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘスシテ退官ヲ命セラレタル者

(二) 在官年限ニ拘ハラヌ公務ニ依リ不治ノ疾病ニ罹リ又ハ其ノ職ニ堪ヘサル重傷ヲ負ヒテ退官ヲ請ヒ又ハ命セラレタル者

(三) 大臣又ハ大臣相當以上ノ一定ノ官ニ滿二年以上奉職シテ退官シタル者ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給セラル、コトアリ

年齢六十歳未滿ニシテ自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者、及ヒ懲戒處分又ハ刑事裁判ニ由リ免官セラレタル者ハ恩給ヲ受クルヲ得ス、又恩給ヲ受クル者能力剝奪刑ヲ受ケシトキハ其ノ權ヲ失ヒ、能力停止刑ヲ受ケ、再ヒ俸給ヲ受クル官ニ就キ又ハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタル場合ノ如キハ其ノ間恩給ノ支給ヲ停止ス、恩給ノ年額ハ退官當時ノ俸給額ノ二百四十分ノ六十ニシテ、十五年以上在官シタル者ニ對シテハ十五年ヲ超ユル一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ、二百四十分ノ八十二至リテ止ム、公務ニ由リ其ノ職ニ堪ヘサル病傷ヲ受ケテ退官ヲ命セラレタル者及ヒ退官ヲ請ヒタル者ニ對シテハ特旨ヲ以テ恩給ノ最低額ノ

十分ノ七マテヲ増給スルコトヲ得ヘシ、  
恩給ハ一年以上其ノ受領ヲ請求セサルトキハ其ノ間ノ權利ヲ失フ此  
ノ規定及ヒ以下ノ諸規定ハ扶助料ニモ適用ス恩給ノ給否ハ最高行政  
官府タル太政官カ其ノ下ニ屬スル恩給局ノ審査ヲ經テ決定ス恩給ノ  
給與ニ付テ不當ノ處置ヲ受ケシ者ハ本屬長官ニ請願シ其ノ處分ニ不  
服ナル者ハ恩給局ニ請願スルコトヲ得但明治二十六年十月勅令第百  
十九號内閣所屬職員官制中ニ恩給局ノ權限ヲ定ム  
明治二十三年六月法律第四十三號ヲ以テ文官恩給法ヲ改正ス其ノ改  
正ノ要點ヲ擧クレンハ恩給ヲ受クヘキ官吏ハ政府ヨリ俸給ヲ受ケサル  
官吏又ハ商業ヲ營ムコトヲ得ル官吏ニ非サルコトヲ要シ滿五年以上  
國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ當然恩給ヲ給シ又退官後一  
定年限内ニ在官中ノ公務ニ起因スル病傷ニ引繼キテ重症ニ陥リタル  
者ハ退官當時同様ノ重症ニ罹リシ者ト齊シク恩給ヲ與フ滿十五年以

遺族扶助料

上ノ在官者ニ對スル恩給ノ増額ハ二百四十分ノ八十五ニ至リテ止メ、  
公務ノ爲メ職ニ堪ヘサル病傷ニ罹リタル者ニ對スル増額ハ當然支給  
セサルヘカラス恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三年間請求セ  
サレハ其ノ權利ヲ失フ恩給ノ支給ニ關スル恩給局ノ裁決ニシテ病傷  
ノ原因輕重等ノ事實ノ認定ニ關セサルモノニ對シテハ更ニ行政裁判  
所ニ出訴スルコトヲ得恩給權ハ讓渡シ擔保トシ又ハ差押フルコトヲ  
得ス

第二 遺族扶助料

一般官吏ノ遺族扶助料ハ明治二年ニ在官中病死シタル者ノ遺族ニ死  
亡當時ノ月俸額三個月分ヲ一時給與スルニ初マリ明治七年ニハ其ノ  
金額ヲ改メ月俸額ノ二分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額ヲ給スルコト  
トシ明治十七年一月恩給法ヲ設ケ其ノ中ニ遺族扶助ニ關スル規定ヲ  
設ケタリ今其ノ要點ヲ擧クレンハ官吏ノ遺族ニ扶助料ヲ給スルハ凡テ

特旨ニ由ルモノニシテ、之ヲ給スルヲ得ル場合ハ高等官ニシテ在官中  
 恩給ヲ受クヘキ期ニ至リ又ハ退官後恩給ヲ受ケテ死去シ及ヒ在官年  
 限ニ關ハラス公務ニ由リ死去セシトキ及ヒ判任官ニシテ在官中恩給  
 ヲ受クヘキ期ニ至リ公務ニ由リ死去セシトキニ限ル、而シテ之ヲ受ク  
 ル遺族ハ判任官ノ場合ニハ寡婦ニ限り、死者ノ受クヘキ恩給ノ四分ノ  
 二ヲ終身給ス、高等官ノ場合ニハ之ヲ寡婦ニ給シ、寡婦ナク又ハ之ヲ受  
 クル資格ナキトキハ其ノ相續人タルヘキ孤兒滿二十歳ニ至ルマテ同  
 額ヲ給シ、此等ノ扶助料ヲ受クル者ナキトキ、從來死者ニ依リテ生活セ  
 ル老年又ハ癱疾ノ父、祖父又ハ配偶ナキ母、祖母アリテ他ニ之ヲ奉養ス  
 ル子孫ナキトキハ一定ノ順序ニ從ヒテ其ノ中ノ一人ニ特旨ヲ以テ寡  
 婦扶助料ノ三分ノ二以內ヲ終身支給スルコトヲ得ヘク又父母、祖父母  
 ノ扶助料ヲ受クル者ナキトキ、同一ノ狀況ニ在ル二十歳未滿又ハ癱疾  
 ノ兄弟姉妹アルトキハ特旨ニ由リ寡婦ノ受クヘキ扶助料ノ一年分以

上五年分以下ノ額ヲ一時支給スルコトヲ得ヘシ、此ノ外凡テ在官中死  
 亡シタル者ノ遺族ニハ其ノ月俸額三個月分ヲ一時ニ給ス  
 扶助料ヲ受クルノ權利ハ死亡シ、禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、又ハ日本人  
 タルノ分限ヲ失ヒタル場合ニハ一般ニ之ヲ失ヒ、尙ホ寡婦ハ復籍又ハ  
 再嫁ニ由リ、孤兒ハ嫁娶シ、俸給ヲ得ル官職ニ就キ又ハ諸官立學校ノ官  
 費生ト爲リタルトキハ之ヲ失フ、扶助料ノ給否ノ裁定之ニ對スル訴願  
 及ヒ時効ノ規定ハ當時ノ文官恩給法ノ規定ニ同シ  
 明治十八年判任官ノ遺族ニ給スル扶助料ノ規定ヲ改メテ其ノ範圍ヲ  
 廣メ、二十三年六月法律第四十三號ヲ以テ舊法ヲ廢シテ更ニ扶助法ヲ  
 制定ス、其ノ舊法ト異ナル要點ヲ擧クレハ政府ヨリ俸給ヲ受ケ且ツ商  
 業ヲ營ムコトヲ得サル官吏ハ、在官中年々其ノ俸給ノ百分ノ一ヲ國庫  
 ニ納メシメ、官等ノ官吏ノ遺族ニ對シテ扶助料ヲ給ス、而シテ判任官モ  
 高等官モ同一ノ規定ニ依リ區別ヲ立ツルコトナシ、寡婦、孤兒ハ當然扶